

子貢曰はく、貧にして隘ふなく、富みて驕るなき、何如。子曰はく、可也、未だ貧にして樂しみ、富みて禮を好むものに如かず。子貢曰はく、詩に云ふ、切るが如く、礎くが如く、琢くが如く、磨くが如しと、其れ斯の謂か。子曰はく、賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ、これに往を告げて、來者を知る。(學而)

此の如き例は尙ほあり。初めに大體を示し、其の細目は問者をして自ら刻苦攻究せしめ、其の到底能はざるに及び、之れを啓いて通せしむ。而して其の間はず疑はざるものには、進んで此れに説くことなかりし也。

孟懿子孝を問ふ。子曰はく、違ふなかれ。樊遲御たり、子之れに告げて曰はく、孟孫孝を我れに問ふ、我對へて曰はく、違ふなかれ。樊遲曰はく、何の謂をや。子曰はく、生には之れに事ふるに禮を以てし、死には之れを葬むるに禮を以てし、之れを祭るに禮を以てす。(爲政)

樊遲に説明せる所を以てすれば、『違ふなかれ』とは、『禮に違ふなかれ』の意なり。此の時孟孫更らに孔子に問うて、『何に違ふなきや』と云はく、孔子は蓋し、『言ふまでもなく禮也』と答へしならん。禮を先づ言はざりしは、之れを問

はしめて而して答へ、以て禮に重きを措かしめんとなりしならん。孟孫問はざりしが爲めに之れを樊遲に移したる也。されど此時孟孫は實際之れを解し得て、復た問はざりしやも知れず、彼れは其の父孟僖子の遺言によりて、始め禮を習ふのみの目的を以て、孔門に入りたるものなるが故に、禮は最も其の留意する所なりしなるべければ也。斯く既に瞭解し得るが爲めに、復問せざりしものは高弟に於いては素より少なからず。此等に對しては、一に問答的教式のみにはあらずなり。孔子が曾子に對し、『吾が道一以て之れを貫く』と教へしとき、曾子は只一語『唯』と答へし(里仁)が如き、其の例なり。顔子の如き、十分成育したるものに在りては、最も然りしは、孔子の左の二語にて明白なり。

吾れ回と言ふ、終日、違はざること愚の如し。退いて其の私を省るに、亦以て發くに足る。回や愚ならず。(爲政)

回や、我れを助くる者に非ざる也。吾が言に於いて説びざる所無し。(先進)

孔子は口舌を以て教授せんよりも、躬行實踐を以て子弟を率ゐんとしたるもの也。故に、

古者言の出でざる、躬の逮びざるを耻ぢて也。(里仁)

子曰はく、予れ言ふなからんと欲す。子貢曰はく、子如し言はずんば、小子何をか述べん。子曰はく、天何を言はんや、四時行はれ、百物生ず、天何を言はんや。

(陽貨)

の嘆ありき。されどこれは餘りに極端にして、孔子も實際に於いて口舌を用ゐざりしにはあらずし也。さりながら、多少此の傾向は必らずありしならん。且つ教授の餘りに開發的なる、子弟は平素教へらるゝこと、太だ慙きの感を抱きしものありしが如く、遂に孔子は、

二三子我れを以て隠したりと爲すか。吾れ爾に隠すなし。吾れ行ひて二三子に與しさるものなき、是れ丘也。(述而)

と自ら辨せざるを得ざるに至りては、開發教授に過ぐるの餘弊ならずんばあらず。故に孔子の教授を受くるには頗る努力を要し、顔回の如き逸足の人を外にしては、倦怠の色あるを免れざりしならん。

之れに語けて惰らざるもの、其れ回やか。(子罕)

といへる、他の諸弟子は多少惰容ありしものか。

孔門の教育は子弟の獨修に重きを措き、喜んで其の來り問ふに應じたる也。

疑問は速かに來りて糺すべく獎勵したり。大戴禮の中に、

宰我曰はく、昔しや、予やこれを夫子に聞く、曰はく、小子宿問あること勿れと。

(五帝徳篇)

と見ゆ。宿問ある勿れとは、孔子が屢、其の門人に告げたる所なりしならん。書籍を教授するにも、多くは獨修せしめ、其の解し難き點を擧げて、來り問ふに答へしものゝ如し。例へば、

子夏問うて曰はく、巧笑倩たり、眉目盼たり、素以て綯を爲す、何の謂ぞや。(八佾)の如き、子夏獨習して此に至り、解せざるに會して之れを問へる也。

孔子が教授の様式は問答體なり、故に孔子は『教ふる』といふことの代りに『與に言ふ』又は『與に議す』の語を用ゐることあり、子夏と子貢とは對して『與に詩を言ふ可し』(學而、八佾)と云ひ、顔回を評して、『終日言ふ、愚の如し』(爲政)と云ひ、『士、道に志し、惡衣惡食を耻づるものは、未だ與に議するに足らざる也』(里

仁といへり。

凡そ問答の様式に二あり、一は弟子問ひ、師答ふるもの、二は師問ひ、弟答ふるものなり。

子疾病す、子路趨らんと請ふ。子曰はく、これありや。子路對へて曰はく、誅あり、いふ、爾に上下神祇に禱ると。子曰はく、丘の禱るや久し矣。(述而)

の如く、孔子より問ふのみにて、遂に子路に瞭解せしめたる例あれど、多くは第一の様式によりて、門人の質問に答ふるに在りし。論語及び其他の諸書に記する所は、皆高弟との間に行はれたる教育的動作なるが故に、門人より問を發するもの多しと雖も、其の以外に在りては、如何様なりしやは知るを得ず。論語に載する弟子との問答以外に、單に『子曰はく』とあるものは、多くは人に教へたる結論、又は主眼の語句なるべければ、問答體のみにて教授したりとは見るを得ず。大戴禮王言篇の如き、又は孝經の如きは、確實に信を措き難きも、斯くの如く自ら標題を設けて、滔々數百言講じ去り講じ來りしは、想像されざるに非ず。されど既に多數の門生を有して、一時に之れを收容すべき大教室ありしとも覺えざれ

は、弟子は代るく來りて問を發し、又は教へを請へりしならん。故に子路の如きは、既に聞きし所を未だ行ひ得ざれば、新に聞かんことを恐れたりといへり。是れ教授が隨時行はれしを想像せしむ。

子路聞くことあり、未だ之れを能く行はざれば、唯聞くあらんことを恐る。(公冶長)

此の言、既に、今の學校又は古の私塾の如く、毎日時を定めて教授をなせしに非ざるを示す。

門人の發する質問は極めて多様なりき。或は文書につきて其の難解の點を問ふことあり、子夏が詩句の義を問へる(八佾)が如し。或は行事の論理的判斷を問ふことあり、子貢が『貧にして諂ふなく、富みて驕るなきは如何』と問へる(學而)が如し。或は理想的人格の内容及び行動を問ふことあり、子張が善人の道を問ひ(先進)、子貢が君子を問ひ(爲政)、司馬牛が君子を問ひ(顔淵)、子路が成人を問ひ(憲問)、子路と子貢とが士を問ひ(子路)、子貢が『君子も亦惡ありや』と問ひ(陽貨)、子路が『君子勇を尙ふか』と問ふ(同上)が如し。或は倫理上の原理又は概念を問ふ

ことあり、樊遲知を問ひ(雍也)、顔淵仁を問ひ(顔淵)、仲弓、司馬牛、樊遲等各、仁を問ひし(同上)が如し。或は政治上の事を問ふことあり、子張政を問ひ(顔淵)、子貢、子路亦之れを問ひ(同上)、子路は又具體的に、『衛君、子を待ちて政を爲さば、子將に奚をか先きにせんとするか』と問へる(子路)が如し。或は處生上の問ひあり、子張友を問ひ(顔淵)、子張祿を子むる所以を問ひ(爲政)、又子貢は、最も其辭を婉曲にして、『斯に美玉あり、韞匱して藏せんや、善賈を求めて沽らんや』(子罕)と、孔子の出處進退を問へるが如し。或は修養上の問ひあり、子張明を問ひ(顔淵)、同じく子張が『徳を崇うし、惑を辨する』を問ひ(同上)、憲は耻を問へる(憲問)が如し。或は古今の人物を擧げて、其の批判を請ふことあり、子貢が『孔文子、何を以て之れを文といふや』と問ひ(公冶長)、仲弓が子桑伯子を問ひ(雍也)、又は子張が令尹子文及び陳文を問へる(公冶長)が如し。或は弟子の孔子を以て多知多能となすや、其の問ひの雜事に涉れるものあり、季路『鬼神に事ふるを』問ひ(先進)、樊遲『稼を學ばん』と請へる(子路)が如し。以上は論語に見えたる孔門問答の二三を彙類したるのみ。其他先秦及び秦漢諸書の、孔子と弟子との問答を記せるもの千百箇ならず、一々信

懇切なる應問

すべからざるも、一切の事物につきて、盛んに質問を起せしを想像するに足る。斯くの如く、日夕蜉蝣集し來る千種萬様の質問に對し、孔子の之れに應接するや、極めて懇切なりき。宰我は孔子より屢、非難されたるものなり。其の人物も餘りに重厚ならざりしが如く、其の質問の如きも、其の才氣と能辯とに任せて、盛んに奇問を發し、宛かも當今の悪少年が、倫理先生を困却せしめんとするが如きものあり。而かも孔子は一言に之れを叱し去ることなく、悠然之れに臨み、從容之れに應ふ。

宰我問うて曰はく、仁者あり、之れに告げて、井に仁ありと曰ふと雖も、其れ之れに従はんや。子曰はく、何ぞ其れ然らんや、君子は逝るべき也、陷るべからざる也、欺くべき也、罔すべからざる也。(雍也)

の問答の如き其の一例也。大戴禮五帝德篇の、『黃帝は人か、抑も人に非ざるか』の宰我の問の如き、孔子諄々として之れに答ふること數百言。

分に應せざるの問、又は人情に訴へざるべからざるもの、如きは、之れに答解を下さざることあり。是れ孟子の所謂『教ふる亦多術。之れに教誨するを屑

しとせざる、亦之れを教誨する』(告子下)の類か。

或る人、禘の説を問ふ。子曰はく、知らざる也、其の説を知るもの、天下に於ける、其れこれを斯に示すが如きかと。其の掌を示す。(八佾)の如き亦其の一例なり。

宰我最も奇問を發す、而かも嚴師の面を犯して來る。孔子は之れに對して、其の教へらべきものには應ふること前述の如し。されど一場の訓誨、到底其の美情を發生せしむる能はずと爲せるときは、退けて其の良心に訴へしめんとす。

宰我問うて曰はく、三年の喪已に久し矣、君子三年禮を爲さざらば、禮必ず壞れん、三年樂を爲さざらば、樂必ず崩れん、舊穀既に没り、新穀既に升らば、燧を鑽り火を改め、期已むべし矣。子曰はく、夫の稻を食ひ、夫の錦を衣る、汝に於いて安きか。曰はく、安し。女安くば、則ち之れを爲せ。(陽貨)

『汝に於いて安きか』と問はれ、曰はく安しと答へきりたるなど、宰我も面白き男かな。且、三年の喪已に久しとなせるは、一個の見識たるを失はず。されど宰我の此の問ひの如きは、其の情の醜劣なるを自白するものとして、孔子の叱責を

受けたる也。若し其の問ひの要領を得たるものあるときは、直ちに其の問を承けて之れを發展することあり。

子貢曰はく、博く民に施し衆を濟ふが如き、仁と謂ふべきか。子曰はく、何ぞ仁を事とせん、必ずや聖乎、堯舜だも其れ猶ほこれを病めり。(雍也)

の如き是れ也。又其の問ひの既に要領を得て、他事に之れを發展するの必要を見ざるときは、之れに應へざることもありき。

南宮适孔子に問うて曰はく、羿、善く射、稟、舟を盪す、俱に其の死を得ず、然れども禹稷躬稼し、而して天下を有てりと。夫子答へず、南宮适出づ。子曰はく、君子なる哉、かくのごとき人、徳を尙ふ哉、かくのごとき人。(憲問)

右の一例にても明かなるが如く、其の問答の間、弟子の聰明又は進境を看取すれば、之れを激賞して措かず。子貢に對しては、

賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ。これに往を告げて來を知るもの。(學而)といひ子夏に對しては、

子を起すものは商也。始めて與に詩を言ふべきのみ。(八佾)

直接的興味
の喚起

といへり。此くの如きときに於ける子貢子夏等の満悦知るべきなり、豈益奮勵せざらんや。教育學者は、直接的興味と間接的興味とを區別す、褒賞又は賜與の類を以て、間接に進學の興味を惹起するは、學問の進歩其れ自身に對し、自ら直接に興味を喚起するの、遙かに效多きに如かず。子貢子夏等は方さに、巧みならざる巧みを以て、直接的興味を生せしめられたる也。

因みに言ふ。子夏が孔子の『繪事は素を後にす』の言より、『禮は後か』と悟り及びたるは、少しく明敏なる所あれども、敢て驚くべき程の事にはあらず。又自ら修養研精する状態を形容する爲めに、子貢が切磋琢磨の詩句を引き來りたるに至りては、甚だ平凡の觀あり、何人も詩を一讀したるものは、此に思ひ當らざるを得ず。而かも孔子の二つながら之れを激賞するは何ぞや。兩者に之れを許せる『始めて與に詩を言ふべきのみ』の『始めて』の字、『汝と始めて』の意に解すれば、此の時までは未だ子貢子夏と詩を講究せしことなかりしか。若し又『汝に於いて始めて』の意に解すれば、孔門文學の程度の甚だ高からざるを怪まざるを得ず。『始めて』の字、單に賞賛を強むるの意

に過ぎざるか。古來之れにつきては、少しも説なし、恐らくは第三の意に解せるならん。此の一字、僅かに一副詞たるに過ぎざるも、孔門の教育を研究するに極めて緊要なり、研經家諸先生の留意を望むこと切也。何れにもせよ、孔子の弟子を見ること、慈親の愛子に於けるが如く、少しく聰明なる點の發動せるを見れば、喜びに堪へざりしならん。斯くの如くにして教育は生動すといふべし。

師弟授受の眞率にして、後世の支那の師弟間に於けるが如き、虚儀繁禮の笑ふべきものなかりしは、注目すべきものあり。

子路曰はく、衛君子を待ちて政を爲さば、子將に笑をか先きにせんとす。子曰はく、必らずや名を正さんか。子路曰はく、是れある哉、子の迂なるや、笑ぞ其れ正さん。子曰はく、野ある哉、由や、君子知らざる所に於いて蓋し闕如たり。

(子路)

弟は師を迂なりといひ、師は弟を野なりといふ、而して却て一抹の温情はあり。何ぞ其の授受の眞率なるや。

子武城に之き、絃歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑うて曰はく、鷄を割く、焉く
んぞ牛刀を用ゐん。子游對へて曰はく、昔しこれを夫子に聞く、曰はく、君子、道
を學べば則ち人を愛す、小人、道を學べば則ち使ひ易しと。子曰はく、二三子、偃
の言是なり、前言は戯るゝ耳。(陽貨)

門人の前に前言を取消し、弟子の言を是認す。何ぞ其の態度の眞率なるや。

國語の正音
を用ふ

孔子は詩書禮樂を教ふる、必らず其の語音を正しくせり。

子の雅言する所、詩書執禮、是れ雅言也。(述而)

是れ也。朱子は雅言を常言と解し、常に詩書禮樂を教ふる意となしたるも大に
非なり。朱子の註も此に至りては最も愚なりとす。詩書禮樂は孔子の新に始
めたる教材にはあらず、支那古來の慣行なりき。されば朱子の語を俗解すれば
今の我國の一小學先生の傳に於いて、彼れは常に教育勸語を訓へたり、いろはを
教へたり、算術と國定讀本とを教へたりといふが如きのみ。特に事として記載
するの要なきは言ふを須たす、其の愚なる知るべし。されば特に記載さるべき
意義なかるべからず。孔註に、『雅言とは正言なり』とあり、鄭註には『先王の

典法を讀む、必らず其の音を正言す、然して後に義全し、故に諱む所あるべからず
禮は論せず、故に執といふ』とあり。雅言を正言と解したるは當れり、然れども
曲禮の『詩書は諱まず、文に臨みては諱まず』に曲解して、正言を單に不諱尋費
名との同音又は同字を避くるを諱むといふ古來今に至るまで支那の制なりとなしたるは物足らぬ心地す。劉臺拱の論語
駢枝に、

雅言とは正言也。鄭謂ふ、其の音を正言すと、之れを得たり。但し、以て詩書諱
まず、文に臨みては諱まずとなすは、則ち是に非らず。執猶は掌の如き也、執禮
とは禮の事を相するを謂ふ。文王世子禮記のに曰はく、秋、禮を學ぶ、禮を執る
もの之れに詔ぐと。雜記同上に曰はく、女未だ許嫁せずと雖も、年二十にして笄
す、禮に云ふ、婦人其の禮を執ると、是れ也。夫子魯に長ず、魯語せざる能はず、惟
詩を論じ、書を讀み、禮を執る、三者必らず其の音を正言す。

とあり、此說最も是也。詩に小雅大雅などの篇あり、雅とは正の意なり。『爾雅』
の書の名の義を尋ぬるに、爾とは昵なり、近なり、雅とは義なり、正なり。文字の最
も近く且正しき意義を書き輯むといふこと也。此の書は必らずしも周公孔子

の編にあらずと雖も、漢武のとき既に之れあり、先秦より漢を通じて、數代に増輯したるものならん(四庫全書總目の説に依る)以て雅字の古訓を知るに足るべし。又雅と夏とは音義相通す、荀子に、

越人は越に安んじ、楚人は楚に安んじ、君子は雅に安んず、是れ知能材性の然るに非ざる也。(榮辱篇)

楚に居りては楚、越に居りては越、夏に居りては夏、是れ天性に非ざる也、積靡の然らしむる也。(儒效篇)

とあり、此の二語を併せ見れば、雅と夏と同義に用ゐられしを知るべし。されば孔子の言に還りて、其の所謂雅言とは、中夏の正言正音なること極めて明瞭なり。當時各國頗る語音を異にせしは明かなる事實にして、又門人には、語音を異にせる各地方よりの集會なれば、孔子が詩書執禮を讀誦するに、必らず魯の方言に依らず、中夏の正音を雅言せるにて、彼の『必らずや名を正さんか』(子路)と共に、孔子の國語に對する見解(後の國語統一論の一章を参照せん)ことを要す、及び用意を知るを得べく、又之れを教授上に實行せしを見る也。而して茲に詩書と禮と

を擧げて樂を言はざるは、樂は元來音譜にして語音にあらず、若し聲を擧げて歌謠を和すれば、既に是れ詩なるが爲めに、其の正音を用ひて歌ふことは勿論なるが故ならずや。方觀旭の論語偶記に、

子の雅言する所、樂に及ばざるは何ぞや。蓋し樂は、詩と禮との中に在り矣。

季札の樂を觀しとき、爲めに十五國風を歌ふ。樂は詩にある也。宗伯の屬典樂の官、凡べて二十。樂は禮に在る也。郷飲酒及び燕禮、並びに歌を升ぼす中、此れ更らに樂と詩と禮との分つべからざるもの也。是れ子、詩禮を言うて樂已の中に在る也。

といへり、亦一説也。

直觀的教授

孔子の教授は多くは直觀的なりき。子貢が『夫子の文章、得て聞くべき也。夫子の性と天道とを言ふ、得て聞くべからざる也』(公冶長)といへる、亦此の點より觀察されざるに非ず。空想的談義を離れて、成るべく形質的直觀を取りし也、故に禮の如きは、儀則を説明すると共に、又之れを實習したり。弟子と禮を大樹の下に講せしが如き、其の一例なり。年少なる門生に對しては、洒掃應對進退の

節より注意を興ふるに始めたりけん。又禮は實物につきても講習したるが如し、司馬遷は魯に於いて其の遺物を實見したり。

故居る所の堂、弟子の内後世因りて廟す。孔子の衣冠、琴、車、書を藏し、漢に至るまで二百餘年、絶えず。(孔子世家)

余孔氏の書を讀み、其の人となりを想ふ。魯に適き、仲尼の廟堂、車服禮器を觀る。諸生、時を以て禮を其の家に習ふ。余祇回去る能はずと云ふ。(同太史公贊)

漢代の諸生が、時に集まりて禮を其の家に習ひ、其の存せる車服禮器を見て、孔門當時の教化を追想せし也。是れ豈に孔子が、其の門生と共に、實地に禮を講習せし手澤の存せるものならずや。

第三節 孔門の訓育法

教育學の所謂訓育とは、教育者の有する倫理觀念を以て、之れを十分に被育者

に實現せしめんとするをいふものなるが故に、孔門の訓育法を研究し、孔子の訓育論を敘述せんには、孔子の有せる一切の倫理的觀念を先づ説明するの要ありと雖も、孔子の倫理説は、諸家の鑽覈既に甚だ精なるものあり、其の書乏しからず、今又蛇足を加ふるの要なし。只其の子弟教育上の動作に現はれたる、訓育的方面を檢討するに止む。

孔子の如き偉大なる人格より發する訓育は、其の大部分に於いて孔子自身の感化なるは、言ふまでもなし。故に弟子は孔子の一舉一動にも注視するを怠らず、以て一々範を取らんとせる也。

師冕見ゆ。階に及びしに、子曰はく、階也。席に及びしに、子曰はく、席也。皆坐す。子之に告げて曰はく、某斯に在り、某斯に在りと。師冕出づ。子張問うて

曰はく、師と言ふの道か。子曰はく、然り、固より師を相くるの道也。(衛靈公) 音樂を專業とするもの、頭目を師と稱す、冕とは名なり、當時有名なる樂師なりき、而して樂師は皆盲目者なりしかば、師冕の孔子の許に來りしとき、孔子が階なり、席なり、某は斯に在りと、一々注意したるまでのことにて、盲者と相見るときは

斯くせざるべからずと定められたるが故に、爾くなすにはあらず。されば孔子も師を相くるの道なりといへるのみ。子張が師と言ふの道かと問ひたるが如きは、今より見れば少しく滑稽に思はるれど、孔門にては決して滑稽などの沙汰にあらず。一言一行、悉く孔子を學ばんとするものには、極めて真面目なりし。左の記事の如きは、寧ろ笑ふに堪へたり。

孔人門人と立ちしとき、拱して右を尙ふ。拱手して右の手の方を上に置いてありしなり二三子亦右を尙ふ。孔子曰はく、二三子の學を嗜むや、之れを賞して實は何ぞ甚しきやと驚きたるなり我れは則ち姉の喪あるが故也と。二三子皆左を尙ふ。(禮記檀弓上)

逸足の高弟には、斯程までの滑稽もあるまじけれど、多くの門人にては、内容の意義山縁は之れを措き、起居進退の末微に至るまで、形式的に先づ孔子の爲す所に倣はんとせしの状態見すべし。莊子に、

顔淵仲尼に問うて曰はく、夫子歩すれば亦歩し、夫子趨れば亦趨り、夫子馳すれば亦馳す。夫子奔逸して塵を絶し、而して後へに控若たり矣。(田子方篇)とあり。是れ實際顔子の語なるや否や明かならず、又歩趨馳奔は形而下の意に

禮と訓育及び其の弊

非ずして、精神的に孔子に追及することに焦慮するの形容語なるべしと雖も、門人が一切則を孔子に取りしことは想像せらる。

孔門の訓育が、主として禮によりて行はれしは、既に言ふ所の如し。されど、禮が内面化して、仁と、義と、知と、相並びて一の徳の名となりしは孟子よりなり。尤も禮記に魯人周豊なるもの、哀公に對して、

苟しくも禮義忠信誠懇の心なくして、以て之れに蒞まば、固結の民と雖も其れ解けざらんや。(檀弓下)

といへるあり、禮は一の徳目なるやに見ゆ。哀公は孔子晩年の魯君なれば、當時既に此の傾向ありしとは思はるれど、孔子に在りては、禮は未だ内面的のものならず、全然外面的のものにして、政治上にては制度、社會上にては儀式、個人にありては作法を意味するが故に、所謂『禮以て之れを齊しくす』の如く、禮は其の本質上、何人をも一樣にせんとするの嫌ひあり。禮記を讀むものは、極めて微細なることに至るまで、一々禮によりて其の爲すべき所を定められたるに驚くべし。自由なる人生の、甚だ窮屈なるを感せしむ。即ち禮を以てする教育は、人

其一、模倣化する

の知能徳器を啓發成就せしむるにわらずして、一の模型に入るゝを目的とするのみ、斯くの如きときには、人は斯くの如くにすべきものなりと記憶し、及び實行するによりて、禮の教育は十分に其の目的を達せるものとなさる。是れ後世長く其の弊を支那の教育に及ぼしたる所にして、例へば自由にして生きたるべき少年の頭腦を固結せしめて、之れを進退動作の禮的一塊たらしめしが如き、活潑ならざる個人の集團は、竟に其の國家を退嬰姑息のものたらしむるに至りぬ。

禮は其の内面に於いて、之れに應ずる美情の伴ふなければ、殆んど禮の訓育的意義を失はんとす。但し、幼年者又は普通人に對しては、先づ外部より正して、之れに應ずる美情を内面に起さしむべき、訓育的價值なきにあらず。例へば容儀の亂れたるを端正ならしめ、愁いて其の心を清肅ならしむることもなきにあらず。ねど、事々物々、一々形式よりするのみとなれば、遂に多くは外面的のみ禮に合せしめ、所謂偽善を生せしむるの弊あり。此に至りては、益なきのみならず、害既に生ず。情の過ぐるは之れを制し、足らざるは之れを補ふを以て、禮の職能なりとなされ、之れを禮の價值となすと共に、其の弊亦茲に在り、天真流露の美點を失ふ

其二、美情の伴はざる

こと是れ也。此の點に於ては、三年の喪は已に久しとなせる宰我の疑問は、大に取るべき所なきにあらず。孔門諸弟子が無意義に孔子に働ひ、前に擧げし二例盲者に對すること、右を尙ひしこと等を見て、是れ禮かとなせるが如きは、最も笑ふべき餘弊なり。孔子自身は、

伯高の喪、孔氏の使者至らず。冉子束帛を攝し、馬に乗じて之れを將ふ。孔子曰はく、異なる哉、徒らに我れをして伯高に誠ならざらしむ。〔禮記檀弓上〕

の用意ありき。鄭註に『徒らにとは、空しく也。禮は忠信に副ふ所以也』とあり。斯く孔子は、禮は忠信に出で、誠を表すべきものとなせるも、餘りに禮を煩些にしたる結果、竟に内面を忘れて形式にのみ拘泥せんとするに至れり。重厚忠信なる曾子の如きも、其の禮に熱するに過ぐるの極、

子夏其の子を喪し、而して其の明を喪ふ。曾子曰はく、吾之れを聞く、朋友明を喪へば則ち之れを哭すと。曾子哭す、子夏も亦哭す。〔同上〕

に至れり。是れ、朋友明を喪ひし場合には、哭すべきものなりと教えられたるが故に、今則ち哭すべしとて哭したるにて、情に於いて哭せず、理に於いて哭し、内面

の心よりする命令に於いて哭せずして、外部の禮よりする命令に於いて哭するもの也。何ぞ其の滑稽にして不自然なるや。後世の葬儀に於ける哭人なるもの、其の由來亦遠しといふべし。禮は上代既に其の弊あり、後世益然り、支那の紳董を見ずや、威儀堂々、禮節森々、而かも其の心は則ち測り知るべからず。支那を觀まりたるものは、禮も亦確かに其の一因たりといふを躊躇せず。

禮は情の過ぐるを制すといふの點に於いて、人の至情を矯めしむることあり、是れ亦決して善良なる教化にあらず。

子路姉の喪あり、以て除すべきなり、而かも除せず。孔子曰はく、何ぞせざるや。子路曰はく、吾れ兄弟寡なし、而して忍びざる也と。孔子曰はく、先王禮を制す道を行ふの人皆忍びざる也と。子路之れを聞きて遂に之れを除せり。(同上) 伯魚の母死す、期にして猶ほ哭す。夫子之れを聞きて曰はく、誰ぞや、哭するものは。門人曰はく、鯉なりと。夫子曰はく、嘻、其れ甚しきや。伯魚之れを聞きて、遂に之れを除せり。(同上)

の二例の如き、是れ唯情を矯むるの外、何等の價值なきにあらずや。既に人の美

其三、至情
を矯むる

なる至情に出づ、何故に除せざるべからざるか。昔に先王の制せる禮に悖戻すといふの外、少しも道理なからずや。換言すれば、人は禮によりて他の人と總べてを一樣にせざるべからずと、先王より定められたりといふのみにあらずや。悪なる直情徑行は最も避くべしと雖も、不善ならざる天真流露は寧ろ尊ぶべからずや。孔子も情を矯むるの弊は多少自覺せりと見ゆるは、其の子路に告げて『道を行ふの人、皆忍びざる也』といへる語氣に知らる。禮的教化は、孔子の如き偉大なる教育家に教育されてこそ、其の弊或は見えざるべけれ、儒家末流に至りて既に之れあるは、前に擧げし墨荀二家が記實の傳ふる所の如し。孔子ならざるものよりする禮を重んずる教化が、今に至るまで、支那後世の士人を誤まりしの大なるは、慨且つ嘆すべき也。

孔門常に洋々たる樂聲の遠く聞へつゝありし狀は、既に述べたり。孔子が訓育上樂を重んじたるは、亦禮と同じきものあり。其の訓育的價值につきては、禮と共に之れを後篇の教育説及政教論に於いて説明すべしと雖も、本來樂の教育的意義は、寧ろ副貳的なり。臯陶謨に云ふ所の樂の九徳は、要するに中和に歸し

樂と訓育

其の後皆樂を云ふもの、之れを祖述すといへども、思ふに音樂其のものが、直接に道徳を發展すべきものならず。元と善良なる音樂が人の高尚なる美感を涵養し、卑醜なる劣情を掃蕩するによりて、道徳に助けとなるに過ぎず。孔子自身は其の性格に於いて之れを見しが如く、之れによりて美感を享樂し、趣味を養成したるが如く、又孔門諸弟子の音樂に於けるも、亦此くの如くなりしが如し。後年儒流を汲むもの、猶ほ上世禮樂の盛行を夢想し、孔子の本意を誤解して、寧ろ美感養成よりも、直接に政教の要具なるが如くに思爲し、例へば荀子の如き、樂記の如き、政治上、道徳上、餘りに之れに有目的の意義を加へ、却つて樂の眞意を失ふに至れり。且つ禮の尊重は、却つて人の美情を伴はず、至情を矯むるにのみ傾きしが爲めに、樂と兩立せず、樂は遂に何等の發達をも遂げずして、淫聲の教坊に行はれ、俚歌の市井に謠はるゝは、即ち之れありと雖も、教科上には全く其の位置を有せざるに至りぬ。

寛嚴の張弛

何人も孔子は極めて嚴肅の訓育なるべきを想像す、而かも決して然らざりき、必らずしも嚴肅一方の人ならざりしは既に述べたり。其の弟子に對しても、或るときは莞爾として笑ひ、或るときは卒然として戲謔し、或は二三子前言は戯むるゝのみなどゝも云へり。固より謹嚴なりしは言ふまでもなけれど、左の孔子の言の如きは、政治上につきて言へるものなれども、教育上につきても、亦此の意を體し、日常斯くの如くなりしを想像せしむ。

張りて弛めず、文武も能はざる也。弛めて張らず、文武も爲さざる也。一張一弛は文武の道也。(禮記雜記下)

故に率直なる子路の如きは、屢叱責され、又屢推賞せられ、英敏なる宰我の如きは、時に嚴罰を蒙り、時に温誨を蒙り、政事的才腕ある冉有の如きは、或は破門の罰を受けんとし、或は獎與の辭を受けたり。又孔子は、時ありては講壇に、襟を正しくして教へ、時ありては私室に、淺酌低唱、琴瑟を擁して門人と語るを好みりき。

孔子は其弟子の個性を熟知せり。凡そ教育は子弟の個性を別ち、一之れに應ずるの訓化なかるべからず。是れ軍隊の教練と大に逕庭ある所以也。軍隊は元と一團としての力を發揮するに力む、故に之れを組織する個人の資質に關しては、多く知るの要なし。たゞ、教育にありては然らず、其の對象は厭くまで個

個性に注意す

人に在り、故に其の稟性の長短善悪を知る所なかるべからず。孔子が人を見るの法にいはく、

其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉くんぞ度さんや、人焉くんぞ度さんや。(爲政)

人の過ちや、各、其の黨に於いてす。過ちを觀て斯に仁を知る矣。(里仁)

斯くの如くにして頗る門人の個性に注意し、又平生の動作に留心して、其の訓化の果して行はるゝや否やを檢せり。

退いて其の私を省る。(爲政)

といへる、必らずしも顔回に對してのみにはあらざりしなるべし。

孔子は其の門に在る學徒を、大體に於いて二分していはく、

先進の禮樂に於ける、野人也。後進の禮樂に於ける、君子也。之れを用ゐるが如くんば、則ち吾れは先進に従はん。(先進)

と、鄭玄いふ、『先進後進とは、學を謂ふ也』と、劉逢祿の論語述何にいふ、『此の章弟子の言行を類記し、夫子裁正する所のもの』と。孔子の如き春秋戰國の過渡、

誠實眞率な
る批判

時代に在りて、久しく教育に従事したるものは、其の先學と後學との間に斯くの如き二大差別の著しきを看取せしならん。宛かも、明治中葉の學校生徒に於いて、夙やく入りて上級に在るものは、猶ほ封建粗野の風ありしに反し、後に來れるものは、既に漸やく華美新奇の様に浸染せしが如きものありしならん。孔子は斯くの如く大體に於いて甄別せしのみならず、一と其の特性を知れり、故に其の長處短處を知れり。其の長處は誠實に之れを賞揚して、奮勵發展せしめ、其の短處は眞率に之れを剔抉して、戒愼畏懼せしめたり。

子、南容を謂ふ。邦、道あれば廢せず、邦、道なきも刑戮に免かる。(公冶長)

子、子賤を謂ふ。君子なるかな、若き人。(同上)

子貢問うて曰はく、賜や何如。子曰はく、汝は器也。曰はく、何の器ぞや。曰はく、瑚璉なり。(同上)

雍や、中略、其の仁なるを知らざるも、焉くんぞ佞を用ゐん。(同上)

由や、千乗の國、其の賦を治めしむべき也。其の仁なるを知らず。(同上)

求や、千室の邑、百乗の家、之れが宰たらしむべき也。其の仁を知らざる也。(同

上

赤や束帶して湖に立ち、賓客と言はしむべき也。其の仁を知らざる也。(同上)

由や果。中略賜や達。中略求や藝。(雍也)

賢なる哉、回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂ひに堪へざるも

回や、其の樂しみを改めず。賢なる哉、回や。(同上)

孝なる哉、閔子騫。(先進)

師や過ぐ。商や及ばず。(同上)

柴や愚。參や魯。師や辟。由や瘞。(同上)

子曰はく、回の人となりや、中庸を擇び、一善を得れば則ち眷ふ服膺し、而して之

れを失はず矣。(中庸)

等の類、枚擧に違わらず。又其の美所を稱するも、自ら安んずることなからしめ

ん爲めに、轉じて之れを抑ふことあり。

子曰はく、道行はれず、槎に乗りて海に浮ばん、我れに従ふもの、其れ由か。子路

之れを聞きて喜ぶ。子曰はく、由や、勇を好むこと我れに過ぎたるも、材を取る

所なしと。(公冶長)

敝れたる緼袍を衣、狐貉を衣るものと立ち、而して耻ぢざるものは、其れ由やか

伎ヒらず求めず、何を用てか、臧カからざらんと。子路終身之れを誦す。子曰はく

是れ道なり、何ぞ以て臧しとするに足らん。(子罕)

之れを揚げんとして急に之れを抑ふるは、或るものに對しては頓に萎靡せしめ

或るものに對しては此れより自棄せしむることあり。子路の如く、果決剛毅、而

して率直なるものに於いて始めて効あり。孔子が能く其の門生の個性を熟知

して、一々之れに適する教化を施せしは、此くのごとき事例よりして略観察せ

らる。

個性
観別の
利川

子路は其の資質の甚だ愉快なるものありしより、孔子と子路との間に行はれ

たる問答は、之れを讀む毎に趣味津々たるを覺ゆ。子路の如き進むに勇なるも

のは退くにも亦速からんことを恐れ、又技能の末を能くせざるが爲めに、道義の

本を忘るなからんを虞れ、且つ子路なればこそ屢抑へらるれ、他の門人之れを知

らずして、子路の美點を閉却せんことを憂ひ、抑へて又之れを揚ぐることあり。

子曰はく、山の巖、奚すれど丘の門に於いてせんと。門人子路を敬せず。子曰はく、由や堂に升れり、未だ室に入らざる也。(先進)

孔子は、又、其の人の長短によりて、教ふる所を斟酌區別せざるべからざる所以を、實例もて明かに説明せることあり。

子路問ふ、聞くごとに斯れ行はんやと。子曰はく、父兄いますあり、之れを如何んぞ、其れ聞く斯れ之れを行はんや。冉有問ふ、聞くごとに斯れ行はんやと。

子曰はく、聞く斯れ之れを行へ。公西華曰はく、由や問ふ、聞くごとに斯れ行はんや、子いはく、父兄いますありと、求や問ふ、聞くごとに斯れ行はんや、子いはく、聞く斯れ之れを行へと、赤や惑へり、敢て問ふと。子曰はく、求や退く、故に之れを進む、由や人を兼ね、故に之れを退く。(先進)

又、子路が其の性の剛勇にして、所謂負けじ魂なるより、知らざるも亦知れりとするの風ありしと見え、

由、女に之れを知るといふことを誨へんか。之れを知るを知れりとせよ、知らざるを知らずとせよ、是れ知る也。(爲政)

といへり。剛勇なる、而して聞く所一之れを實行せんとする子路は、思ふに之れより、知らざるを知らずとするに於いて益、勇なりしならん。

孔子が其の門人の個性を知れることの精微なりしは、孔門の教育に於いて見たる如く、其の教育法の個別的なる便宜により、相見ること多く、相接する深く、又吉凶禍福、常に之れを共にせしに因らずんばならず。

時として、門人をして自ら其の人物を内省し、他と比較せしめて、其の進境の程度を注意せしむることあり。

子、子貢に謂うて曰はく、女、回やと、孰れか愈まされると。對へて曰はく、賜何ぞ敢て回を望まん、回や、一を聞いて以て十を知る、賜や、一を聞いて以て二を知ると。

子曰はく、如かざる也、我れ汝と如かざる也。(公治長)

吾れも亦汝とともに回やに如かざる也といふ、顔回を擧ぐることに數等なると共に、又子貢をして自暴自棄に至らしめず。僅とたる一小句、教育的辭令の甚だ輕んずべからざるを見る也。

朱子の註、皇侃を踏襲して『與』を『許』に解し、『吾れ汝に如かざるを許

子弟相互の比較

さん』と訓せしむ。されど、是れ聖人を以て何事にも無上なりとする笑ふべき後世の思想なり。包咸はいふ、『吾れ汝と俱に如かずとは、蓋し以て子貢を慰めんと欲する也』と、此説可也。尙ほ列子中の左の一文は参照の價あり。

子夏孔子に問うて曰はく、顔回の人となりはいかに。子曰はく、回の仁は丘より賢れり。曰はく、子貢の人となりはいかに。子曰はく、賜の辯は丘より賢れり。曰はく、子路の人となりはいかに。子曰はく、由の勇なるや丘より賢れり。曰はく、子張の人となりはいかに。曰はく、師の莊なるや丘より賢れり。(仲尼篇)

門人も亦自家の性格若しくは進歩の程度を、他と比較して定められんことを請ひ、孔子は之れに親切に應答したり。孔子が子賤を君子なるかなと評せるに續きて、子貢が直ちに『賜や何如』と問ひし(公治長)が如き、其の一例也。又子、顔回に問うて曰はく、之れを用うれば則ち行き、之れを舍けば則ち藏す、唯我れと爾と是れあるかなと。子路曰はく、子、三軍を行らば、則ち誰れとともにせんか。子曰はく、暴虎馮河、死して悔なきものは、吾れ與せざる也、必らずや、事に

臨みて懼れ、謀を好みて成す者也。(述而)

の如きも、亦其の一例とせん。こゝに子路を抑へしは、其の有せる強さに於いて既に十分なる意志を、正しき方向に導きて完全なるものたらしめんとてなるが如し。

又、自己の修養し到達し得たる所を、倫理上の語を以て之れを問ふことあり。孔子は腹藏なく之れに答へたり。

子貢曰はく、我れ、人のこれを我れに加ふるを欲せざるや、吾れ亦これを人に加ふるなららんを欲すと。子曰はく、賜や、爾の及ぶ所にあらざる也。(公治長) 又他の同門二人の人物を問ふこともあり。子貢問ふ。師と商やと、孰れか賢れる。(先進) の如き是れ也。

孔子自ら謂ふ、『唯、仁者能く人を好み、能く人を惡む』(里仁)と、愛憎に偏するにあらず、其の愛すべきを愛し、其の惡むべきを惡むなり。其の惡むは、愛する所以にして、惡まるゝものは怨みず、以て正に歸すべき也。孔子の顔子を愛するや他

『能く人を好み、能く人を惡む』

に過ぐ、されど此くの如き至情は、他の弟子に對しても亦然りしを疑はず。

顔淵死す。子曰はく、噫、天子れを喪ふ、天子れを喪ふ。(先進)

顔淵死す。子之れを哭して慟す。從者いはく、子慟せり矣と。曰はく、慟する
ありしか、夫の人の爲めに慟するに非ずして、誰が爲めにせんと。(同上)

顔淵を最として、其の愛情の子弟に及べるもの、歴々見るべし。此くの如く、之れ
を愛するの心を以て之れを惡むが故に、其の叱責は甚だ凛烈なりき。

冉求曰はく、子が道を説びざるにあらざるも、力足らざる也と。子曰はく、力足
らざるものは、中道にして廢す、今女畫せり。(雍也)

宰予晝寢ぬ。子曰はく、朽木は雕すべからず、糞土の牆は朽すべからず。予に
於いてか何を誅めんと。(公冶長)

時として、其の叱責の極めて輕妙にして諷刺的なることあり、寧ろ却て聞くもの
をして懼然として耻ぢ畏れしむ。

子貢人を方る。の方は務の略字子曰はく、賜や賢なるかな、我れは則ち暇あらず。(憲問)
嗚呼、曾て泰山は林放にだも如かずと謂へるか。(八佾)

又は叱斥せずして、單に警戒するに止むることあり。宰我が哀公の社を問ひし
に答へ、斯かる大事に對して、一時を繙繙し、其説を謬まりしを聞き、
成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず。(同上)
といへり。是れ之れを叱責是正するの價值なしとなせるものにして、實は叱責
の最も甚だしきもの。

理想の人格

後に孔子の教育説に於いて説明する所の如く、孔子は、君子、仁者、知者、勇者、士、達
者等、理想の人格を表準して、屢、弟子に示せしも、更らに古今の人物を取り來りて
之れを示めすことあり。伯夷叔齊を云ひ(公冶長)、左丘明を云ひ(同上)、寧武子を云
ひ(八佾)、子産を云ひ(公冶長)、公平仲を云ひ(同上)、臧文仲を云ひ(同上)、微生高を云ひ(同
上)、孟之反を云ひ(雍也)が如し。此れ等は、其の事蹟、昭々として眼前に在り、其の是
非善惡、及び其の學ぶべきもの、明かに之れを見るべく、理想の人格の抽象的説明
に比すれば、之れを理解すること易く、又範を取るに難からず。訓育は示範的人
格を成るべく、近きに取り、之れを眼前に示すによりて最も有効なりとす。

孔門、師弟關係の殆んど家庭的なる、弟子をして時に各、其の志を言はしめ、又自

各其の志を
言はしむ

ら其の志をも告げて之れと比較せしめ、以て其の人物の修養と進展とに資せしめたり。雨日雪夜若しくは花間月下若しくは公暇閑ありて恰かも無聊なるとき若しくは患難前に襲ひ來るも儼然知らざるが如く、師弟相圍坐し若しくは杖を曳きて相歩し、各其の志を言うて相磨厲せしが如き、教育は洵に人生の一大至樂也。孟子の所謂王侯たる亦與からざる也。

顔淵季路侍す。曰はく、盍ぞ各其の志を言はざる。子路曰はく、願はくば、車馬衣輕裘、朋友と共に之れを敝りて、而して憾みなからんと。顔淵曰く、願はくば善に伐ることなく、勞を施ること無けん。子路曰はく、願はくば子の志を聞かん。子曰はく、老者は之れを安んじ、朋友は之れを信じ、少者は之れを懐けん。と。(公治長)

子路曾皙冉有公西華侍坐す。子曰はく、吾れ一日の爾に長たるを以て、吾れを以てすることなかれ、居れば則ちいふ、吾れを知らざる也と、如し、爾を知るあらば則ち何を以てかせんや。(先進)

斯くて各其の抱負と所懐とを言はしめ、終りに孔子が之れを批判したるもの、如き、論語中の一大名文にして、今必らずしも擧げず。

第四章 孔子の述刪

從來謂ひし所の孔子の述刪なるもの、之れを平易に今の語を以てすれば、教科書編纂となすも亦妨げなし。孔子をして孔子たらしむるは、其の偉大なる人格と、其周到なる教育とに因るは勿論なりと雖も、孔子が今猶は億兆民衆の心の中に其の生命を有し、赫々たる光彩を放ちつゝあるものは、其の述刪即ち其の撰定せる教科書あるに職由する所多し。孔子の述刪が、支那に於ける國定教科書となり、所謂經典として人の必らず讀まざるべからざるものとし、以て今に至れるは、漢の武帝のとき之れを制定せるものなりと雖も、孔子は單に其の所謂道て自家の理想を、後世に遺さんが爲めに述刪せしのみにはあらずして、寧ろ權威ある國民的讀本の教科書としてにありしは、其の修整せる詩書禮樂が、孔子以前より、古來既に唯一無上の教材たりしこと、及び其の春秋に對する至大の抱負あり。

りしとにて推知せらる。

孔子の述刪は天下を周遊して魯に歸りたる後にして、其の晩年のこと也。史記之れを叙すること頗る詳。

魯遂に孔子を用ゐる能はず、孔子亦仕を求めず。孔子の時、周室微にして、禮樂廢れ、詩書缺ぐ。三代の禮を追迹し、書傳を序じ、上、唐虞の際を紀し、下、秦繆に至り、其の事を編次す。中略故に、書の傳はり、禮の記さるゝ、孔子よりす、中略吾れ衛より魯に反り、然して後、樂正しく、雅頌各、其の所を得たりと。古へは、詩三千餘篇、孔子に至るに及びて、其の重を去り、禮義に施すべきを取り、中略三百五篇、孔子皆之れを絃歌し、以て韶武雅頌の音に合せんことを求む。禮樂此れより得て述ぶべし。以て王道に備へ、六藝を成す。孔子晩にして易を喜び、彖繫、象說卦、文言を序す。中略子曰はく、弗なる哉、弗なる哉、君子世を歿して名の稱せられざるを病む、吾が道行はれず、吾れ何を以てか後世に見えんやと。乃ち史記に因り、春秋を作る。中略其の文辭を約にし、而して指は博し。もと、吳楚の君、自ら王と稱す、而して春秋は之を貶して子と曰ふ。賤土の會、實は周の天子を召

す、而して春秋之れを諱み、天子河陽に狩すと曰ふ。此の類を推し、以て當世貶損の義を繩す。後に王者あり、擧げて之れを開き、春秋の義行はるれば、則ち天下の亂臣賊子懼る。中略春秋に至りては、筆すべきは筆し、削るべきは削り、子夏の徒一辭を贊する能はず。弟子、春秋を受く、孔子曰はく、後世丘を知るものは春秋を以てせん、而して丘を罪するものも亦春秋ならんと。(孔子世家)

されば、孔子は其の道を當世に行ふ能はざりしに激し、寧ろ長く後世を教化せんと目的を以て、其の述刪を完成したるは明かにして、其の家塾の教育と相待ちて寧ろ後世に於ける影響は其れよりも大に、孔子の教育的事業の一部面なりとせん。而して史記は以上の文の如く、詩書易禮樂春秋、即ち後世の所謂六經、漢人又一に六藝と稱するもの、悉く孔子の編輯若しくは論定を経たるものなりとなせり。されど之れにつきては多少研究すべき餘地あり。たゞ、春秋が孔子一人の心血より出でたる著作なることは固より論なし、他の詩書禮樂及び易の十翼に對して、孔子が之れを刪定せる程度分量等は果して何如、遷の如くに輕く之れを言ひ去るべからざるものある也。

第一に、詩は、史記には、孔子以前三千餘篇、孔子之れを刪りて今の三百五篇となせりといひ、一時殆んど定説の如くなりたり雖とも、之れには何等の確證なし。或は孔子は淫聲を去りたりといふも、現に存せる詩經の中には、詩意に於いて淫奔少なしとせず、衛風の如き然り。又聲譜に於いても『鄭聲は淫』(衛靈公)と評せるものすらあり。又孔子が刪除せりと稱する、今の所謂逸詩なる者の中には、誦すべき教訓なしとなさず。されば假りに孔子が刪除する所ありしとするも、其の標準は全く無意義となる。且つ孔子は屢、『詩三百』(爲政、子路)と稱せり。子路篇の『詩三百を誦して』は、詩中の三百篇を誦すればと強いて解され得るも、爲政篇の『詩三百、一言以て之れを蔽ふ』は、詩の全部を言へること明白にして、孔子のとき、詩は既に三百餘篇なりしと見ゆ。但し、孔子自ら吾れ衛より魯に反り、然らして後、雅頌各、其の所得。(子罕)といへるを見れば、魯に歸りて後、樂譜を整理すると共に、詩の序次又は語句の亂雜なるものありしを、修整せしことは確實なるが如し。

第二に、書は史記に『書傳を序す』とあり、順序を正しくしたるの意ならん。

之れにつきては古來種々の説あり。其の一は、宛も詩の三百餘篇ありしを刪りたりとなすが如く、古書三千餘篇中より選刪せりとするものなり、左の如き是れ也。

孔子書を求めて、黃帝の玄孫帝魁の書より、秦穆公にいたるまで、凡そ三千二百四十篇を得たり。遠きを斷ち、近きを取り、以て世の法となすべきもの百二十篇を定め、百二篇を以て尙書となし、十八篇を中候となし、以て三千一百二十篇を纂去す。(尙書緯)

(一)非常なる大部を刪り去り、(二)尙書を編纂し、(三)又今の緯書中に在る尙書中候も亦孔子の撰なりとするものなれども、是れ元より信すべからず。但し此くの如く多數ならずとも、從來ありしものより、孔子之れを刪り去りたるものあるか、又は單に從來ありしもの、序次を正すのみなりしか、此の疑につきて確實に決定する能はず。孔子の常識的にして、怪力亂神を語らざるや、其の言、毎に堯舜以上に遡らず、上代の神話的記載を抹殺したるべきは、甚だ然るべきの想像なりと雖も、孔子以前に、既に『書』と題する書籍あり、又其の篇名も既に定まり居りしは

左傳國語中、屢「書曰」として書中の語を引き、若しくは其の篇名すら擧げたるものありしを以て證すべく、且つ詩書禮樂と並べ稱するは、必らずしも孔子の創めたるものにあらず。書は春秋と異なりて、既に夙くより其の家塾の教科に用ゐられたりき。而して此の孔子以前既に「書」と稱したる書に、堯舜以前の神話的記載が編入されつゝありしや否やは明かならざるも、孔子が堯舜以前を語りしは其主義よりしてなれども、繫辭傳に伏羲をいふも、孔子の言なるやは疑はし、孔門諸人が一も堯舜以前を問ふことなく、大戴禮に「我が『黃帝は人か』と問ひ、孔子之れに答へ、又事新しく五帝の帝系を詳説するなど、何となく、堯舜以前のことは既に『書』中になかりしやの心地せざるにあらず。尙ほ又、周禮外史氏が『三皇五帝の書を掌る』とあれども、元來周禮といふ書も疑はしく、又假令ひ之れを事實とするも、後世此の三皇五帝の書を見たるものなし。左傳昭十二年、楚の左史倚相が、『能く三墳五典八索九丘を讀む』とあれども、是れ靈王の言にして、前後の文によれば、或は故意の僞言なりしやも計られず。假りに此等の書ありとして、孔子之れを見たることありとするも、其の非常の珍籍にして、孔

子以前既にありて普通に讀まれたる『書』中に載録されざりしは明白なり。即ち異論者の提出したる問題は端なく茲に一轉して、孔子は『書』中より種々の篇章を刪り去りたりといふよりも、寧ろ取りて加へざりしといふの妥當なるに歸せんとす。要するに、孔子が書に對して刪り去りし所ありしや否やは明瞭ならず。余は刪り去れるに非ざるべしとは想像すれど、史記の『書傳を序す』以外に、確實なる證據とてなれば斷言はなし難し。但し、孔子が始めて『書』を編纂せしに非ざること丈けは、極めて明瞭也。

尙ほ又今傳はれる尙書の小序なるものは、之れを孔子自ら筆せしものとなせるものあり、其の之れを信ずるは班固也。

易に曰はく、河は圖を出だし、洛は書を出だす。聖人之れに則る、故に書の起る所、遠し矣。孔子纂し、上は堯より斷ち、下は秦に訖る、凡三百篇、而して之れが序を爲り、其の作意を言ふ。(漢書藝文志)

といへり。是れ書を孔子の編纂なりとなせるに於いて、既に明白に事實を謬まれり。班固以前に、孔安國、其の孔子の系たるにより、傳家のオーストリテイを以て

之れを明言せりとなさる。即ち

先君孔子、周末に生れ、史籍の煩文を親之れを覽るもの、一ならざるを懼れ、遂に乃ち禮樂を定め、舊章を明かにし、詩を刪りて三百篇となし、史記を約して春秋を修め、易を證して以て八索を黜け、職方を述べて以て九丘を除き、墳典を討論して、唐虞以下より斷ち、周に訖る。煩亂を芟夷し、浮辭を剪截し、其の宏綱を擧げ、其の機要を撮り、以て世に垂れ教を立つ。典謨、訓誥、誓命の文、凡そ百篇。中序序を書し、作者の意たる所以を序す、昭然義見ゆ。(僞孔傳尙書序)

是れ也。されど、今の孔傳尙書なるものは、假孔の僞作たることは明かにして、此の文中の他の所言も、悉く信憑すべからざることは昭々として見ゆ。

書序は、古文尙書を信するものすら、之れに疑ひを挾めるもの多し、朱子の如き其の一なり、閻若璩の尙書古文疏證卷末に附録する閻泳復の朱子古文書疑語類第四十七條に見ゆ。朱子は元來古文尙書にも、多少不安心を感じしと見え、遂に之れのみには註せずして、蔡沈をして之れを註せしめたり。蔡傳も書序に疑ひを挾めるは、其の康誥及び召誥の註に於いて明言せる所なり。書序の孔子の筆

にあらざるは、康誥を以て成王の書となせる一事にても明かなり。康誥の文中に康叔を呼びて弟となせること見ゆ、康叔は文王の子、武王の弟なれば、成王には叔父に當れり、序の信すべからざる斯くの如し。尙は閻若璩、王鳴盛の説最も確實なり。閻はいふ、

古文を僞作するもの、魏晉の間に生る。時に皆書序を以て、孔子の作となす、故に撰する所二十五篇の書、之れに依傍し、此の序太甲の小序を云ふ則ちいふ、太甲既に立ちて明かならず、伊尹之れを桐に放つ、三年、復、毫に歸す。中序遂に桐に放つる事を以て、上篇に撰し、三年復歸の事を、中篇に撰し、以て書序に合す。而して孟子に合せざるを顧みず。(尙書古文疏證卷四第六十)

王はいふ、

百篇の序之れを小序といふ。伏生の時、猶ほ未だ小序を得ず。盤庚三篇合して一となし、康王の誥は顧命に合す。孔安國始めて據りて以て古文尙書に序す。西漢諸儒並びに以て孔子の作となす。故に寧ろ經を屈して以て序に従ふ、而して其の説の通すべからざるを顧みず。宋諸儒出づるあり、始めて方め

て之れを排す、之れを排す誠には是也。朱子謂ふ、是れ周秦間低手人の作る所と尤も特見に屬す。蓋し周秦間に非ざれば、備さに百篇の名を知る能はず、低手人に非ざれば、亦まさしに此くの如く庸且つ妄なるを説くべからず。(尙書後案 卷七第一百五)

其の他學者尙は説多けれど今一と擧ぐるを要せず。要するに、書序の孔子の筆にあらざる、既に定論たり。思ふに、此の誤謬は、史記の『書傳を序す』より誤まり傳へたるものならざるか、若しくは、此れに氣づきて偽作せるにはあらざるか、史記の所謂『序』は序次なり、序文の意にあらざるを知らざる也。されば孔子が書に於けるは、刪定は確實ならず、況んや編纂をや、加筆は信すべからず、單に次第せるのみなるが如し。

第三に、禮記は、史記にいふ如く、孔子のとき、禮樂廢れたれば、孔子三代を追迹し已に絶えたるを復興し、又其の紊れたるを整理したるならん。『雅頌各、其の所得』といへる、是れ樂の正しきを得たるもの也。樂は皆詩を音譜に上ぼしたるものなるが故に、樂の整理は之れを詩に於いてせる也。又、禮は禮の書を編したる

禮樂を整理す

易を推奨す

るにはあらず、今の三禮の著作は、孔子と何等關係なき所なり、禮の既に廢れ、或は亂れ、或は誤まれるを、復舊し、修整し、是正し、以て之れを門人に傳へたるならん。

第四に、易は、孔子が『我に數年を加へ、五十まで以て易を學ば』云々(述而)といへる如く、後年之れを好みしは事實にして、史記の記す所によれば、韋編三たび絶ちたるまで、繰りかへし繙讀したりといへり。易は從來一の卜筮の書、又は一種の哲學思想を含むものとして取扱はれしも、教化上、左まで尊重されしにはあらず、りしが如し。而して後世遂に一の經書となり、政教倫理の寶典となるに至りしは、孔子の之れを推奨せしによりて也。十翼が孔子の作なりといへるにつきては、異論あり。章末に附載する六經解說にいふ所の如く、十翼の或るものは、孔子の思想を雜ふるものあれども、孔子の作にあらざるは確實なるが如し。史記も亦之れを作爲すといはずして、

象、繫象、說卦、文言を序す。

といへり。既に序すといふ、『書傳を序す』の序字と同じく、序文又は序述の意にあらずして、序次の義なりとすれば、十翼は總べて孔子以前に存在せるもの、

如きも、其の或るものは、孔子以後にも出でたるものあるが如し。たゞ繫辭傳には、多く孔子の思想を含めり、或は孔門學徒の筆か。

春秋を著す

第五に、春秋が孔子の著作なるは論なし。其の意義につきては古來頗る説あり。單に正史として纂輯せるなりといふものあれども、之れに教化的意義ありしは蔽ふべからず。孟子いふ、

王者の迹熄みて詩亡び、詩亡びて、然して後、春秋作る。晋の乘、楚の檮杌、魯の春秋、一也。其の事は則ち齊桓晋文、其の文は則ち史。孔子曰はく、其の義は則ち丘竊かに之れを取る矣。(離婁下)

されば、文や事を以てするの記實的載籍にあらずして、一の意義ある正史となせしや明か也。又孟子に

世衰へ、道微に、邪說暴行作るあり。臣其の君を弑するもの、之れあり、子其の父を弑するもの、之れあり、孔子懼れて春秋を作る、春秋は天子の事也。是の故に孔子曰はく、我れを知るものは其れ惟春秋か、我れを罪するものは其れ惟春秋か。(滕文公下)

春秋の名につきて

孔子春秋を作り、亂臣賊子懼る。(同下)

春秋は天子の事なりの一句、明瞭に、權威ある教化的經典を後世に與えんと企圖せしものなるを道破せり。

春秋は全然孔子の作なれども、其の名は孔子の獨創にはあらず。左傳杜序に『春秋は魯の史記の名也』とあれども、左傳昭元年韓宣子來聘の條に、『易の象と魯の春秋とを見る』とあり、唯春秋と云はずして、魯の春秋と云へるを見れば、各國皆春秋といへるならん。國語に、楚の王、其の諡號を遺言する條に、『唯是れ春秋、先君の後に從ふ所以のもの』(楚語上)といへり。韋昭は春秋を註して、禘の祭と解すれども、諡號を用うるは祭時のみに限られたるにあらずれば、此の春秋とは、楚の史記の意ならん。同じく楚語中の太子教育の科目中に、『之れに教ふるに春秋を以てす』の語あるにあらずや。されば、楚にても、史記を稱して春秋といへりしと明かにして、孟子の所謂『楚の檮杌』とは方言に過ぎず、文語にては猶ほ之れを春秋と唱へしなり。又管子の法法篇に『春秋の記』てふ一句見ゆ、即ち齊の春秋ならん。又墨子の明鬼篇下に、『著して周の春秋に在り』

の語見ゆ、周の春秋もありしなり。莊子齊物論に『春秋經世は先王の志、聖人謝して辭せず』とあり、是れ亦孔子の春秋にあらず。又今存せる墨子中には見當らざれど、漢魏六朝百三名家集中收むる李懷集に、

墨子云ふ、吾れ百國の春秋史を見る。(重答魏攸書)

とあり、其頃の墨子の書にはありしならん。各國皆春秋と稱せしこと、此に於いて極めて明白となれり。即ち孔子の獨創にあらざるは勿論、獨り魯のみに備し居りし名にもあらざる也。

要するに所謂六經なるもの、悉く孔子の手筆、又は其の思想の加はるあるは事實なれども、其の間自ら差違あり、獨り春秋のみは、其の心血を傾注したるもの也。六經の總てが孔子の著作なりとせらるゝは、楊子の所謂『天下の惡は、皆之れを桀紂盜跖に歸し、天下の善は、皆之れを堯舜周公孔子に歸す』(列子楊朱篇)にして、先秦既に孔子の名聲甚だ高きを致せるに、漢に入りて、古文復興の潮流に合し、遂に天下の尊崇を享くるに及び、教訓を含める至高の書は、一切之れを孔子に傳會するに至れる也。

又列子に、孔子が顔回に告ぐる語として、

曩きに吾れ詩書を修め、禮樂を正し、將に以て天下を治め來生に遺さんとす。

但に、一身を修めて魯國を治むるのみに非ざる也。(仲尼篇)

といへるを載す。列子書中孔子を言ふもの多し、莊子の如く、之れを言へば必らず之れを誹毀する如きものならず。問、孔子を借り、寓言を以て己れの道に牽強する所あれども、以上の言の如きは、必らずしも列子の學と相關する所なし、單に一の事實を述べたるものにして、其の『詩書を修め、禮樂を正す』の確實なる事實なるを知るべし。而して修とは、史記に『詩書禮樂を修む』天下周遊以前及び初以前陽虎專政治下に於と云ふの講修又は修學の意なると異なるは、列子が直ちに『來ける孔子を述べし』の世に遺さんとす』といへるにて明か也。即ち詩書を修整齊正せるなり。此の語、孔子が詩書禮樂に對する關係と、其の後世の教化的經典たらしむべき意向とを知るに足る。

孔子の述刪は、之れを教科書たらしむべき目的を以てせしや否や、既に再三言明せる如く、固より然りといふに躊躇せず。況んや、春秋の如きは、明かに其の意

を示し、其他平生家塾の教育に、既に之れを採用せしをや。(詩書禮樂の用ゐられたるは、既に言へり、春秋も書成りて其の徒に授けしこと、史記の文に見ゆ、たゞ、易は晩年之れを研究せるといふと、いふへ、孔子の死は七十四歳にして、周易の研究を思ひ立ちたるは、四十五六のことなるらしければ、其の死に先だつ殆んど三十年なれば、其の徒に授くる餘裕は十分なれど、寧ろ哲學的に深遠にして、日常得るに益なく、孔子の常識的教育と相交渉すること少なきとの爲めにや、弟子と之れを討究せしこと少しも見えず。此れより以降學に志すもの、皆之れに依ることとなり、所謂一切の信を六經に考ふるものにして、最も高等にして且つ最も普通なる教科書とされたり。而して漢までは、一の證典となすべき尊重すべき書として行はれしが、漢武六經を表章するに及びて、今の所謂國定教科書となり、竟に以て動かすべからざるに至りぬ。

別に孝經といふものあり、通篇孔子が直接に曾子に告ぐるの語なるが如き體裁を以て書かれあり。緯書には、

子曰はく、吾が志は春秋に在り、吾が行は孝經に在りと。孔子庶に在り、庶人にして位を得

孝經についで

ざる徳施こす所なく、功就す所なし。志は春秋に在り、行は孝經に在り。春秋を以て商子夏に屬し、孝經を以て參曾子に屬す。(孝經鈞命訣)

などいへるものあるも、是れ甚だ信すべからず。されど史記漢書も亦孔子の作又は述となせり。

孔子、以て能く孝道に通ずとなす。故に之れに業を授け、孝經を作る。(史記仲

尼弟子列傳、曾子の條)

孝經は、孔子、曾子の爲めに孝道を陳する也。(漢書藝文志)

孔子の作又は述なるや否やは姑らく措き、其の古き書なることは、呂氏春秋に孝經の文を引き、又蔡邕獨斷に、魏文侯(戰國時代中第一の學藝あり、且つ教育を重んじたる王侯)の孝經傳なるものを引けるにて明かなり。今其の書を見るに、孔子曾子以外の第三者の手にして、此の二人の執れにもあらざるは、冒頭の一語、『孔子閉居す、曾子侍坐す』にて明白なり、是れ既に形式上に於いて史記の説を否定す。然るに、第三者が孔曾の問答を聞きて、有りの儘に忠實に筆寫せしやといふに、是れ亦然らざるが如し。孝經に在る如き、孝を以て諸徳の根本とする説は、孔

子の他の語に於いて見ざるのみならず、孔子の思想と矛盾す。されば漢書の記載も、亦孝經の内容よりして破れざるを得ず。但し、孔子の學說には、孝を一切の本とすることなきも、孔門の學風と、古來支那の社會組織上より考ふるに、孝が諸徳の中、頗る重きものたりしには相違なし。論語學而篇に有子(孔子歿後一時孔門の塾頭たりし人)の言に、『孝弟やは、其れ仁の本たるか』(仁を爲すの本かと訓するは誤謬なり)の如き、亦見るべし。されば、孝經の所説は比較的孔子に近きものならん。孝經に、

孝は天の經也、地の義也、民の行也。

と云ひ、孝を世界的原理の如くなせる思想は、或は孔子と哀公との問答にて見らるべき、孔子晩年の天人合一説と多少の脈絡あらん。或は曾子の學徒の筆する所か。

終りに六經の教育的價值を一言すべし。此れにつきては學者説多しと、雖も左の一文は最も精髓を得たるものといふべきか。特に『孔子曰はく』と之れに冠せり、禮記に之れあり。

六經の教育的價值及其注意

孔子曰はく、其の國に入れば、其の教知るべき也。其の人となりや、溫柔敦厚なるは、詩の教也。疏通知遠なるは、書の教也。廣博易良なるは、樂の教也、絜清精微なるは、易の教也。恭儉莊敬なるは、禮の教也。屬辭比事なるは、春秋の教也。故に、詩の失は、愚。書の失は、誣。樂の失は、奢。易の失は、賊。禮の失は、煩。春秋の失は、亂。其の人となりや、溫柔敦厚にして愚ならざれば、則ち詩に深きもの也。疏通知遠にして、而して誣ならざれば、則ち書に深きもの也。廣博易良にして、而して奢ならざれば、則ち樂に深きもの也。絜清精微にして、而して賊ならざれば、則ち易に深きもの也。恭儉莊敬にして、而して煩ならざれば、則ち禮に深きもの也。屬辭比事にして、而して亂ならざれば、則ち春秋に深きもの也。(經解)

此の章果して孔子の言なるや否やは、次ぎに批判を試むべく、今只單に六經の教育的價值(冒頭已に其の教知るべしといひて、六經の各、が教育と相關する所以を明かにせり)をいへる最古のものなるに於いて、且つ威嚴あるものなるに於いて、此の一文は留心すべきものなり。其の長處を挙げ、又翻つて一々其の弊の在る

所を示したるなど、用意頗る周到なるものあり。此の文の解説は少しく明瞭を缺ぐものなきにあらねど、其の義を測度するに、或は知識的に、或は訓育的に云へるものなりとす。今其の要領を解釋せんに、詩と樂とは、美感を以て性情を養ふものにして、殊に詩は、何事も科學的に説明的に直截に言ひ破らざる所に、其の妙味存し、攻弊又は論破を事とせず、胸臆の琴線に觸れたるやさしき聲なるが故に人をして溫柔敦厚ならしむるも、元と情的にして知的ならざるが故に、其の失は愚となるに在るを注意すべく、殊に樂は、衆と相樂しみ、衆と相和合し、衆心を一ならしむるに於いて、樂を聞くときは、衆心皆始らく他を忘れて此れに惹かるゝに一致するよりならん。此の文に所謂廣博たる長所あり、又道理よりして善に進むにあらざるも、邪念を掃蕩するに於いて、簡易善良、此の文に所謂易良なるの益ありども、餘りに之れを好むに僻し、若しくは其の樂を擇まざれば、奢侈淫逸に陥ることあるを注意せざるべからず。書は、政教興廢の大綱に通じ、遠き上代を諒ね知り、以て今の政治に施す所以の利害を考察し得るの益ありども、能く境遇と事情とを究めずして、輕卒なる判断を下すに於いては、誤まりて事を誣ふるの弊

あるを心すべく、禮は、内面的には恭儉の美德を涵養し、外面的には莊敬の儀容を馴致するものなれども、一と之れに拘泥するときは、其の弊は即ち煩といふことに在るを心せざるべからず。易は、吉凶禍福を詳にし、必らずしも占筮の意ならず、場合々々に應ずる行事の結果が、吉となり福となり、凶となり禍となるを説明せるもの、易と見らる、其の身を持つること潔清に、事宜に通ずること精微ならしむるの益ありども、其失は此の文に所謂賊にして、迷信的に又獨斷的に、人を傷ふことあるに用心すべく、春秋は、辭令に達し、事務に通ずるの益ありども、其の失は餘りに史中に没了し、事件の起伏を愉快に感ずるより、遂に平明を喜ばずして吾れも亦何等か一事件を捲き起し見たしなど、此の文に所謂亂を思ふに至らんこと用心すべしとなり。以上其の得失共に多少の理ありといふべし。又以上の説明及び注意は、六經てふ特殊のものにつきてなれど、之れを當今のことにつきていへば、詩と樂とは一般に詩歌戲曲音樂唱歌、書は古代史、春秋は近世史及び外交史、禮は禮義儀式、易は處生的訓辭の類と見て、此等と教育との相關する所につきて、頗る適切なるものあるを覺えずんばあらず。

されば、以上禮記經解の所言は、多少尊敬を拂ひて聽くべきものありと雖も、其の果して孔子の言なりやといふに至りては、直ちに然らずと答ふるに躊躇せず。思ふに漢代の學者が、孔子の言に傳會したるものなるべきか。其の理由とする所は、次ぎの三個條は動かし難しと信ず。

第一に、孔子は六經を並稱することなし。禮記に經解といへる其の「經」なる文字が、既に後世的なり。前にも一言したる如く、先秦少なくとも孔孟以前にありては書籍を稱して經といふことなし。經とは大法又は典常の義なり、若しいふことあらば、并は其の含む所の理法を指して尊稱するに過ぎず。經書なるもの、定められしは漢以後なり。又管に孔子が六經を並稱せざるのみならず、先秦亦然り。莊子に

孔子、老聃に謂うて曰はく、丘、詩書禮樂易春秋六經を治め、自ら以て久しとなす矣。(外篇天運篇)

とあれども、外篇は莊子の筆にあらざるもの多きは定説たり。且つ此に「六經」の二字ある、既に明かに漢代人の竄入なるを示めず。荀子に、

書は、政事の紀也。詩は、中聲の止まる所なり。禮は、法の大分、率類の綱紀也。中畧禮の敬文なるや、樂の中和なるや、詩書の博なるや、春秋の微なるや、天地間に在るもの畢る矣。(勸學篇)

とあり、是れ後世の所謂經典を並稱して、其の職能を概説せるの嚆矢ならん。然るに詩書禮樂春秋の五を擧げて、未だ易を取らず。六經並稱は漢代よりなり、買誼始めて之れをいふ。王應麟は、

六經始めて莊子天運に見ゆ。禮樂詩書易春秋を以て六藝となすは、始めて太史公滑稽列傳に見ゆ。(困學紀聞卷八)

といへど、是れ誤まれり。太史公の前、董仲舒既に六藝を云ひ、漢書本傳、對策文中及び春秋繁露玉杯篇、董仲舒の前、買誼之れを並稱し、其の徳教的價值を言へり。

詩書易春秋禮樂、中畧之れを六藝と謂ふ。中畧書は、徳の理を竹帛に著はして而して之れを陳ね、人をして觀せしめ、以て從事する所を著す故に曰はく書は此の此れとは代名詞也書に著はれたる也。詩は、徳の理を志し、而して其の指を明かにし、人をして之れに緣りて以て自ら成さしむ。故に曰はく、詩は此の志誌也。

易は、人が徳の理に精しきと、しからざるとを察し、循いて其の吉凶を占す。故に曰はく、易は此の占なるものなり。春秋は、往事の徳の理に合すると、いなとを守り、合せて其の成敗を紀し、以て來事の師法となす。故に曰はく、春秋は此の紀なるもの也。禮は、徳の理を體し、而して此の節文を爲し、人事を成す。故に曰はく、禮は此の體なるもの也。樂は、詩書易禮春秋五者の道備はる、則ち徳に合し、合すれば則ち驩然として大に樂しむ矣。故に曰く、樂は此の樂しみを謂ふもの也。(新書六術篇)

賈誼は猶ほ私言なれど、董仲舒は之れを獻策し、漢武之れを採用する及びて始めて六經並稱と經の名とあり。經の意義は、主權者の命令を以て、又は社會の意志を以て、準則と認めたる書をいふこととなり、先秦と全く異なる意義となりしが故に、漢以後の稱呼なることは最も明か也。

第二に、孔子のときまでは、教育の材としては詩書禮樂のみにして、楚語に出でしものは、増益して九科の多さを言ひ、春秋を入れたるも、未だ易を取らざりし。孔子以前の春秋なるもの、皆史官の筆にして、容易に一般人の見るを得べきもの

ならず、楚語は太子の教育をいふものなるが故に、之れを加ふるに過ぎず。故に易と春秋とは、未だ普通教育の科目たらざりしもの也。經解に云へる六經の説明が孔子の言にして、其の春秋が孔子の著はせる春秋ならば、而して是れ孔子の春秋を言へるものなるは明か也。餘りに自尊の甚しきものならずや。易は孔子が晩年之れを研究し、其の哲理の深遠なるを認めたるものなれば、若し之れを教科に採用すとせば、高等なる學科にして、此の文の冒頭に言へる如く、其の國に入りて其の教を知るべき程に、易は普通教育に用ゐられず、又用うべからざりし也。此の六經が、教育的權威を有するに至りしは、遙かに後世なるが故に、孔子自ら其の教育的價值を推稱するの理なし。若し孔子をして、普通教育に用ゐる教材の教育的價值、又は其の用意を批判解説せしめば、詩書禮樂の四者のみに止まらざるべからざりし也。

第三に、此の文は、孔子が六言六蔽、即ち仁、智、信、直、勇、剛の六徳に對し、愚、蕩、賊、絞、亂、狂の六失を擧げたるもの(季氏)と、其の造語甚だ相似たり。後の學者が六經といふより、迷想して、之れを模倣したる斧鑿の痕は、歴々瞭るべし。

附載 論語及六經解説

此の一章は本書の目的と直接の關係なきが如しと雖も、孔子の人格事業及び學說を知るべきものは論語及六經にして、本書中の所説としばしば交渉あり、且つ述剛は孔子の事業中の最も昭且つ大なるものにして、其學術の集大成にも相關するものなれば、以上の序述を補ふべく、且つ之れを研究する人々の便宜の爲めに掲ぐ。相参照せらるれば、本書中言ふ所を更に明かにすべきものあらん。専門に漢學を研究せられたる人には、勿論充足なり。たゞ著者の婆心を諒とせられんことを乞ふのみ。但し、六經といへど、樂は禮記中に樂記篇ある外、經書あるにあらず、詩を音樂に上すものなるは既に屢言ふ所の如し。

一 論語について

孔子の鑑定を經若しくは孔子の編輯に成り、若しくは孔子の加筆あるものを經とす。論語は孔子歿後、其の徒が孔子の言動を蒐録したるものにして、孔子の相知らざるものなれば、此れを經書中に入れたるは、遙かに後世にして、漢までは

三論と其の合併

論語を引くにも、『傳に曰はく』とのみいへり。

論語といふ書名の始めて見へたるは史記なり。但し、論語中の文句は古書に引用されあり。思ふに戰國の世に編輯されたるものか。古くは三論とて、古論、齊論、魯論、三種の論語あり。古論は魯の共王、秦火の後、孔氏の壁中より得たるもの、齊論は齊人の傳、魯論は魯人の傳なり。三論各、少しく異同ありしは、何晏集解の序中に之れを言へり、例へば古論二十一篇、齊論二十二篇、魯論二十篇なり。漢の張禹、元と魯論の學者なりしが、齊論を兼ね取りて一書を成せり、之れを張侯論といふ。孔安國は古論に註解せしも、其の書傳はらず。後漢の鄭玄、魯論を本として、他の二論を析衷して、文字を校合し、又それに註せり、所謂鄭玄本にして一時大に流行したり。魏の何晏、此の鄭玄本に依り、諸種の論語を折衷校合し、諸家の解説を纂輯し、以て論語集解を作れり、今に傳はるものは是れ也。されば、今の論語を稱して魯論といふ、篇數は魯論なれども、文字は三論合併のもの也。

論者の編者につきては古來種々の説あり。漢書藝文志の言ふ所は、其の大意孔子が其の弟子及び時人に應答せしを、採集したる語録なり、當時弟子等各記す

論語の編者及其作意

論語及六經解説

る所あり、孔子死して、門人等之れを集めて論撰す、故に論語といふとあり。鄭玄は仲弓子游子夏等の撰定する所となせり、此の三人は、孔子門人中の若年者なりしよりの想像ならん。然るに孔門の最年少者は曾子にして、孔子より若きこと四十六歳、而して長壽を保ちたる人也。而るに論語には曾子の死を載せたと曾子には特に子と稱して敬意を表したると、又一面に、有子も同じく敬稱されたと、論語開卷初頭に、有子曾子の言あると等より想像して、此の二人の弟子、殊に曾子の徒の編輯ならんとするものあり。柳子厚、程子、朱子等なり。されど、閔子冉子等の如く、敬稱は唯り有曾二子に止まらざるを如何にせん。我が朝の物徂徠は、琴張原憲のみ特に其の名を言へるより、此二人の筆なりといへど、此れ只一の機知ある観察たるに止まるのみ。要するに、確實に其の編者を定め難し、單に論衡の説の如く、孔門の諸弟子が共に孔子の言行を記しありしものを蒐めたりとなし置くべし。但し考證家諸人の説の如く、多少の蕪雜を免れざるものなれば、一時の撰より、後又之れに竄入せるものありしならん。

但し其の編輯には多少の意義あるが如し、第一に學而篇を置き、學問の重ん

ずべきをいひ、學問は己れを修め人を治むるを本とするより、第二に爲政篇を置き、而して最後に堯舜以來の傳統たるの意味を以て、堯曰篇を以て結びたり。是れ必らずしも偶然ならず、又學者牽強の辭にあらざるべし。荀子は之に倣ひしにや、始めに勸學を説き、次に修身を論じ、而して最後に堯舜を述べたり。而して兩書とも、中間には敢て意を用ゐざりしが如し。是れ亦、必らずしも偶然の暗合にはあらざらん。

重なる註解

西漢以降の註釋が、何晏によりて集成されしは既に言ふ所の如し、此れより諸家の註本皆傳はらず、只、集解中に其の説を擧げられしを見るを得るのみ。近時の大儒俞曲園は、鄭玄の説の諸書に散見せるものを蒐集し、論語鄭義を作りたるも、固より完本にあらず。何晏は元と老莊學者にして、六朝老莊家の通弊として其人品より論すれば殆んど價值なく、其の説も亦時に名教の罪人たるものあり、「回也屢空し」の解を老莊流の虛無に牽解したるが如き是れ也。應神の朝、百濟より我邦に獻せる論語は、當時晋の代なれば或は何晏本なりしやも、知れざれど、漢末より、諸學者皆亂を避けて遼東に入り、其れより朝鮮に傳はりたるべけれ

ば、百濟よりせしものは鄭玄本なりしならんと、先師島田先生は予に教へられしことあり。

梁の世、皇侃は晋宋以後二十餘家の説を集めて、論語義疏と題したり、後、朱子の註行はるゝに及び、此の書亦滅びたり。然るに此の書、我國には之れを存し、現に足利學校に在り。享保中、中根八右衛門之れを寫し、上木せしに、支那に流傳して學界を驚喜せしめたりし。阮元の十三經校勘記に足利本とあるは是れ也。然るに此の時多少其の體裁を改めしより、清人は一時其の僞書ならずやを疑ひしといふ。

唐にては、論語と孝經とは必らず讀まざるべからずと定められしが、其の註釋は、論語は何晏を取れり、我が大寶令明經道の用本も亦何晏本なりし。然るに宋に至りて朱子集註出で、大に具備したり。朱子の註解は、易と詩とは簡に過ぎ、大學と中庸とは密に過ぎ、其の中を得たるは論語と孟子とにして、論語最も可也。朱子以前に刑昺論語正義を作れるも、特に發明の説もなく、又漢儒の意を解くには足らざりき。

朱子は論語の註釋には頗る力を用ひ、初めは論語精義、次ぎに集義、而して最後に集註と改めたるなど、大に意を致したるを知るべし。多くは皇侃の義疏を用ひたれど、曾子の三省を『傳へて習はざるか』と解したるは、古註無き所なり、古註は『習はざるを傳ふるか』にして、己れ未だ實習自得せずして、直ちに之れを人に傳ふるなからんを自警したるの意なり。是れ朱子自ら新意を出したるか、然らざれば、義疏の原本を見ること精ならざりしかならん。朱註は、可なるは即ち可なれど、誤解もあり、又議すべきものもあり、姑らく字義訓詁の事は論せずとするも、孔教の本旨よりして、必らず辨せざるべからざるものあり、學而篇有子の語なる孝弟仁本章の如き是れ也。朱子は此の章を解きてはいはく、程子の説に、性の中、唯彼の仁義あるのみ、何を嘗て孝弟あらんやとあり、孟子には、仁義禮智の天より付與されたるをいふも、孝悌はなし、されば孝弟は仁の本にあらず、『爲仁之本與』にて、仁を爲すの手ほどきとして、孝悌を行ふべきなり云々と。されど是れは誤まりなり。孝悌は仁を爲すの本にあらずして、孝悌其の者が既に仁也。中庸に、『仁は人也、親に親しむを大となす』とあり、孟子に、『仁の術は父に仕ふ

る是れ也』とあり又『堯舜の道は孝悌のみ』ともあり管子に『孝弟は仁の祖也』とあり。實際仁は人を親愛するの謂なれば父兄を親愛する孝悌は既に仁にして仁の根本たるべき筈也。餘りに性論を固執する朱子は其の一家の説により之れに反する所は經文を曲げんとすることあり此れも其の一例也。況んや古本論語我が朝の博士家に傳へしものにて天文版正平本には『孝弟也者。仁之本與』とあり仁字の上に爲字無し。されば今の『爲』字あるものを訓して、『仁の本たるか』と讀むべき也、『仁を爲すの本か』と讀むは誤まれり。

又『秦伯は其れ至徳と謂ふべきのみ』の章秦伯は季歷即ち文王の兄なれど父王は文王を愛して其の國を之れに傳へん欲するを知り樂を採るを名として逃れ去りたるものなるが朱子は之れを解して太王が商を翦つ^た股を滅ぼ^すの意ありしも其子秦伯從はずして逃れたり云々といへり。されば太王は夙に殷を亡ぼすの意あり其の子の諫をも用ゐざりしものにて司馬仲達一輩の逆賊となれり是れ大に事實を誤まるもの也。太王は秦伯季歷等の父にわらず。詩經の魯頌に『太王初めて商を翦つ』とあり此の詩は周の淵源既に久しく太王岐山に都

を遷したるが是れ事實に於いて既に殷商を滅ぼしたる也と、フィギュラチーフに婉言したるのみ。朱子が之をリテラリ、センスに解したるは笑ふべし。太王の岐山に都せるは秦伯文王等を去る七百餘年前の事にて殷に在りては武丁の時也。武丁は明君にて孟子は之れを聖賢の君と云ひ史記には此の時殷道復興るといへり。微とたる僻阪の一族長が焉くんぞ商を翦つ^たの志を發せんや。

此の外尙は多けれど省略すべし。宋元以後のものは總べて朱子を敷衍したるのみ。清朝に入り毛奇齡は四書臆言及び論語稽求篇を著はし大に朱子の説を駁し又閻若璩の四書釋地あり又近來に至りて劉寶楠の論語正義あり頻に古註の旨意を闡明したり。我が國にては伊藤仁齋の論語古義主として古註に依り又物徂徠の論語徵説き得て大に肯綮を得たり兪樾は徂徠の説を十數條に分ちて推賞したる程なり。但し徂徠一流の一種の僻説あるは惜むべし例へば『千乗の國を道^{みち}むるに』^{道は道びくの意なり}を『千乗の國に道^{みち}するに』と訓し天子巡狩して千乗の國に行くとなすが如き笑ふべきものある是れ也。

朱子以後の
註解

二 詩經について

上代の詩及び采詩の制

詩のことの經書に見えたるは、書經に、舜が夔に命じて樂を興らしむとあるを始めとす。されど堯舜以前より既に詩歌ありて、詩は樂に合せたるものならん但し黃帝のときの詩といふものあれども、勿論信じ難し。又同じく書經に、詩は志を言ひ、歌は言を永くするなどの理論的解説も見ゆ。舜と皋陶と相和韻して君臣相磨厲せる四言詩の書經に出でたるが、作例の見えし最初のもの也。緯書には、擊壤歌封人歌などあれども、是亦信じ難し。夏の時には九功歌なるものありしは、左傳に出づ、又書經に五子の歌とて、羿の爲めに國を失ひし太康の第五人が、各歌を作りしもの出であるも、是れは古文尙書なれば信用し難し。殷の時に湯盤の銘ありしは、大學の書に見ゆ。又今の詩經の終りに殷時の歌あり、語前にして意頗る強し。夏殷二代は猶ほ素朴簡古の世たりしも、周に至りては、文化盛んに開け、詩も亦大に進みたるが如し。

周のとき、天子五年毎に一たび天下を巡狩するや、太史の官に命じて、民間の歌

詩の効用

謡を采り蒐め、以て獻せしめき。蓋し歴代の記録は史僚の手に出づるものなるが故に、舞文虚飾あるべしとの用心より、民間の歌謠に就いて、實際に於ける政治の得失を検せんとして也、又諸地方の人情風俗の美醜善惡も知らんとて也。是れが即ち今の詩經の始めにして、天子の燕會のときに歌ひ、又は學校教育の具に供したり。然るに周の幽王に至り、一旦犬戎に亡ぼされ、之れより周室漸やく微に采詩の制も亦絶ゆ。孔子のとき、其の詩三百餘篇あり、是れ即ち今の詩經なり。詩は斯くの如く民間一時の流行歌の如きものなれば、所謂天に口なし人を以て言はしむるにて、事實を枉ぐることなく、謠ひ出だせる點に於いて、既に尊重すべし。又其の主意は、溫柔敦厚の四字に外ならずとなさる。之れを讀むに、當時は讀むにわらず、節調を附せり、之れを歌ふ又は賦すといへり、如何にも雍々たる太平の風あり。凡そ既に詩經に入れば、如何に慷慨勇壯なるものも、自然に優美なる風情の之れに伴ふを常となす。詩は人の心を和げ、不平の心を化して和平ならしむとなさる。又『以て羣すべし』とて、人が羣すれば競争起り、猜疑生ずるも、詩を以て人心を和げ、圭角を去るとなさる。又、『以て怨むべし』とて例

せば、君臣父子間にて、無理な事を言はれて、うらめしと云ふ心は起るとき、其の意を詩に漏らせば、思ひは露るべしとし、詩に於いてのみは、怨恨の情あるも許容すべしとなさる。

又詩を讀めば、各國又は各代の人情風俗、及び其の時政との關係を知るを得べく、以て政事上の助けとなすを得べし。各國の使者が、己れの意味を露骨に發表するなく、先づ己れの言はんと欲する所に類せる詩を歌ひしことも、左傳多く見ゆ。

詩は舜のときより教育上最も必要のものとなされ、高等教育は全く樂によりてのみ施されしは、典樂の官が即ち教育の官にて、樂の九德即ち教育の目的なりしを以て知らる。周にて、大司樂が國子の教育を掌りしは、周禮に見ゆ。孔門にて、所謂「詩に興り、中、尋、樂に成る」にて、詩と樂とは極めて重用されたるは、本篇既に述べし所の如し、尙ほ後の教育説の條を参照すべし。蓋し詩は上述の如く上代より道徳上及政治上、必須のものとなされし也。上代、詩と音樂は離れざりしも、孔子のとき、音樂は既に餘り盛んならず、漸やくにして韶の樂を齊に聞

四派の説詩

き、孔子は三月肉味を忘れたる程なりしにて察すべし。戰亂相繼ぎ、又古制も漸やく廢れ、漢に至りては、樂全く絶えて、詩のみ残りし也。

詩は人の誦誦せしものなりしを以て、秦火に遇ひて、其書は灰に歸しても、口耳相傳へて焼けず。されば漢初の古文復興に會し、其の文句は舊時のまゝに存し、他の諸書の如く、流派によりて文字に異同あるが如くならず、唯其の義を解するのみに於いて四家の別を生じたり。其一を魯詩と云ひ、魯人申公、子夏の傳統を得たりとするもの、其二は齊詩、齊人轅固生之れを傳へ、其三は韓詩、韓人韓嬰之れを唱ふ、皆朝廷に用ゐられたり。其後、趙の毛公なるもの、荀子よりの傳を以て頗る詩に深く、當時の學者王たる河間獻王大に之れを好みしより、次第に門人も多きを加へたれど、其の最も後れて出でしが爲めに、毛詩のみは未だ學官に立てられ、學校の正科に採用し、朝廷より其の専門の一家を官養するを學官に立つるといふざりし。後漢武の時、魯の孔氏の壁中より書初めて出でしが、其の詩は即ち毛傳なりき。之れより他の三家につきて、徐に疑ひを狹まれ、例へば關雎の詩は、康王晏起して、謗りを起したるものとか、鷓鴣の詩は、情人野合の詩なりとか、頗

る古書と合はざるもの、注意さるゝに至り、翻て毛傳は、此等の柄盤なく、又傳來も正確なりとて、遂に勝を占むるに至れり。今の詩經を毛詩と稱するは之れが爲め也。鄭玄は、毛詩鄭箋を作れり、毛傳鄭註の説、之れより長く異を樹つるものなかりし。

詩の註釋

歐陽修の詩本義は、朱子の前驅をなせり。されども毛傳を誤解せる所多きは、重厚にして博覽なる修の爲めに惜むべしと言はる。蘇轍の詩本義、詩序の一句を歿し、他を取り去れり。朱子に至り、名物訓詁は毛傳鄭箋に従ひ、序説を一掃し、一家の見識を立てたるも、孔子の『鄭聲は淫』(淫とは淫猥の義にあらず、淫逸の意なり、宜しきを過ぐるを淫と云ふ、鄭聲は淫とは、鄭國の音樂は、今の支那の音樂を耳にするとき感ずる如く、餘り強きに過ぐとの意也)を誤解して、鄭風衛風を總べて淫奔の詩となせるは、笑ふべし。尤も、中には桑中の詩の如く、確かに淫奔のものもあるが如きも、朱子の如くに總べて説き去るは、寧ろ曲解なり。

朱子の集傳出でしより、元明を通じて學官皆之れを用ゐたり、但し學者は猶ほ毛傳及び鄭箋の説を取れり。朱子の詩經に關する説は、朱子語類及び朱子文集

中にも參考すべきもの多し。朱子の解説を敷衍せるものには、詩經説約、詩經正解等世に行はる。

古註の側に在りては、十三經中の詩經正義最も可なり、朱子も五經正義の中に、詩と禮と最も良しといへり。たゞ、毛傳と鄭箋とを混淆したるは不可なれど、王肅の詩經既に之れをなせりといふ。古註の參考には、詩本義、詩傳等見るべし。明の何楷の詩經古義、字義名物極めて詳備せり。

我が邦の學者にては、詩經に力を用ゐたるもの極めて少なし、徂徠仁齋の博學を以てして、詩に於いては甚だ得意ならず。四書に勞して、未だ力を五經に用ゐるに至らざりし也。伊藤東涯に至りて、詩及び易に解説を試みしも、皆可ならず。恩師島田先生の先師海保先生に、毛詩集開二十二冊の著あり、博搜網羅頗る勉強せられたるものなれども、未だ上木に至らず。

三 書經について

書經とは後世の名にして、上世にては單に書といひ、又尙書とも云へり。左傳

書の案歴及
内容

國語には『書に曰はく』とあり、又然らざるものは篇名を擧げたり、其後尙書と云ひ、漢以來經字を加ふ。堯舜以來、政治又は道徳上教訓となるべき嘉言を主として、時代に沿いて収録したる一種の歴史也。書の外、上世種々の記録ありしは周禮に在る『三皇五帝の書』とか、左傳に在る『三墳五典八索九邱』とかの書名にて知らる。此等は總べて傳はらざれど、三墳は三皇、五典は五帝、八索は八卦の易書、九邱は九州の地志なるべしと想像するものあり。今の書經に在るものは、極めて信用すべきものなるは勿論也。書の顧命の篇に言ふ所を以て見れば、周の成王が康王に位を讓るとき、傳世の寶物を陳列せし中に、赤刀大訓などあり、赤刀とは武王が戰場に用ゐしもの、大訓とは堯典舜典の二篇是れより。斯く上代は皇室のみに深く藏されしも、後世に至り、普通に讀まるゝに至りし也。孔子のとき百餘篇、支那に於ける最も古き書なるのみならず、世界に於ける最古の書の一なりとす。儒教の始源は、大抵尙書より汲まるべきが故に、此の點に於いても最も味ふべきものなり。例へば、二典は政治の大綱領、皐陶謨は萬世儒教の本、五倫は舜典に出で、五行は洪範に見ゆ。禹貢は地理、無佚は自律の戒、皐陶謨の

『天、有典を秩す』云々は性善説の本原、九徳三徳は中庸の始祖なる等の如し。秦火の後、漢の惠帝漸やく狹書の禁を除きしも、學者典籍未だ多く出でず。文帝の時、濟南に伏生名は勝なるものあり、年既に九十餘も、秦の博士官たりしが、焚書のとき、尙書を其の壁に塗り込め置き、深く匿せしが、漢のとき取り出だし見たるに、當時の書籍は所謂方策とて、板や竹やを綴り合はせたる者、其れに所謂竹書漆簡にて、竹片に漆をつけて書きたる文字なれば、長き間の壁中にて、虫も喰ひ、字も消え、綴ぢ目も切れてばらばらになり、百篇の中、七十二篇は亡び、漸やく二十八篇のみを取り止め得たり。以て門人に教授し居りしが、此事世に聞へ、文帝の爲めに召さるゝに至りしも、斯かる高年のことゝて、京師へ出づる能はず、即ち屍錯を遣りて傳授を受けしめしも、齒落ち舌澁り、之れに加へて山東の語なれば、長安の屍錯には容易に解し得ず、伏生の女某、其の父の讀書を耳聞し居りしが、其の口授にて纔に知るを得たりといふ。此くて屍錯が受けて歸りし二十八篇及び武帝のとき、河南の一女子が獻せし泰誓一篇、今の泰誓にはあらず、併せて二十九篇、皆漢時行はれし文字に寫し換へたるものなれば、之れを稱して今文尙書

といへり。其の後景帝のとき魯の共王其の領内なる孔子の舊宅を毀ちしに、尙書出でたり、總べて二十六篇二十四篇なれど一篇が三篇に分れしものあり、皆科斗の文字なれば、人之れを讀むこと能はず、孔子十二代の孫、博士孔安國に命じて之れを讀ましむ、之れを古文尙書といへり。當時伏生の今文は通用の學となり、孔氏の古文は、唯天子の祕府に藏され、別に一部の寫本を孔氏の門に置けり。成帝のとき、張霸百二篇を偽作す、此れを百兩篇と云ひ、偽書の嚆矢なり。兩漢の間、學者は寧ろ今文に多く、其の古文は、祕府と博士家とに在るのみなれば、永嘉の大亂に全く滅びたり。東晋元帝のとき、豫章の内史梅頤なるもの、古文尙書を得たりとて、之れを獻せしが、今文に比すれば二十五篇を増し、泰誓も亦三篇に分れたれば、總べて五十八篇なり。大禹謨、咸有一德、五子之歌、諸篇始めて出づ、此れを後の古文尙書となす。今文はきんぶんと訓す

今古二尙書の消長

南北朝のとき、北朝には今文、南朝は古文行はれしが、隋の一統を経て唐に至り、太宗のとき、學者定説なきを憂ひ、孔穎達等に命じて五經の正義をなさしめしが、書は今文なる鄭玄の註を棄て、古文なる孔安國の註を採れり、今の十三經註疏に

在るものは是れ也。之れより學校の正課は古文を用ゐ、鄭註の今文は、僅に参考とし讀まるゝに過ぎざりき。宋のとき、吳棫なるもの始めて古文尙書に疑ひを容れて曰はく、鄭玄註三禮、張岐註孟子、韋昭註國語、杜預註左傳、皆今の古文尙書に在る言を逸書といへり、今の古文尙書を見たることなかりしなり、後漢より三國に在りて、古文尙書を見る能はざる理なし、又伏生の今文は甚だ讀み難きに、古文は却て讀み易し、是れ大に疑ふべきもの、梅某なるもの、今の古文尙書を如何にして得たりけん。朱子も亦古文の一筆に出でしが如きを怪しみしも、其の謹厚の質、未だ確證を得ずして、容易に經書に疑ひを容るゝことなく、只脱亂あるが爲めとし、自ら之れに註することなく、高弟蔡沈をして之れを成さしめたり、但し蔡註は朱子の允可を得たるものなるは勿論なり。

元に入り、趙子昂、吳草廬等多少古文を疑ひ、王充耘の讀書管見、赫京山の尙書詳解、亦之れを言ひしも、元明の學者は考證未だ十分ならず。考證に關する諸問題の解決は、總べて清朝の諸學者の出づるを待たざるべからざりし。

古文尙書の決定

閻若璩は清康熙年間の人、幼時は遲鈍なりしとの事なりしも、中年大に聰明を

加へ來たる、書經のみを研究すること二十年、遂に古文尙書の偽作を論ずること百二十八條、尙書古文疏證を著はせり。其の二三を擧ぐれば、(一)梅賾の古文尙書と孔安國の古文尙書とは篇を同じくせず。(二)鄭玄、服虔、杜預、趙岐、韋昭、王肅が逸書と稱して、原文を見るを得ざりしもの、皆今の古文尙書中に在り。(三)今の古文尙書中に在る辭句は、皆左傳國語其他の古書中に散見せるもの、此等を補綴したるものならん。(四)孔安國の所謂註なる者も、亦本文と一律の偽作なるは、同じ書中の同じ文句に異なる解釋多き、梅賾の尙書考異にも、孔安國の禹貢註の中に安國死後の地名あるを指摘せりによりて明か也。(五)舜が禹に譲るときの有名な執中の言、論語には堯が舜に告げ、舜亦之れを禹に告げたりとありて、其の語は『天之歷數在爾躬。允執其中。四海困窮。天祿永終』とて、毎句一東の韻を踏めり。然るに古文尙書のは然らず、是れ形式に於いて既に上世的ならず。(六)且つ其の言中に在る『人心惟危。道心惟微。惟精惟一』云々は荀子に出づ、而して荀子には『道經に曰はく』とあり、道經の何の書たるを知らざるも、尙書にあらざるは疑ひなしと。其の他、閻の論、殆んど動かすべからず。是に於いて、古文

尙書及び孔安國の註、皆一併に偽書なること全然定論となれり。

時に毛奇齡あり、才氣を負ひ、博覽を恃み、閻に反對して、宛詞なるものを著はせしも、所詮一笑を贏ち得るに過ぎず。朱彝尊の經義考、惠棟の古文尙書考、棟は此の書を作りしとき未だ閻の著を見ざりし、王鳴聲の尙書後案、江聲の尙書逸文等相繼いで出で、いよゝ之れを確むるに至れり。但し何人の偽筆なるべきやは今猶ほ明かならず、犯迹既に明徴あるも、罪人未だ檢舉されず、實に學界の一大疑獄也。たゞ此の犯迹を昭かにせし閻等檢察の明知精勵は、實に驚嘆に値ひす。梅賾の事蹟は知られざるも、學者にあらざりしは論なし、此の凡手を以て此の巨篇を偽作せんは、殆んど不可思議なり。一は古典に出處あり、之れを補綴して這般の名文を作るは、學者の一大事業、十年の日子能く成すべきに非ず、偽作も此に至れば、眞に一大藝術也。或はいふ王肅なるべしと、肅は博覽の大儒、且つ其の偽作に巧妙なるは、孔子家語の手際にて察せらる、或は然らんか。

古文尙書の信すべからざるは定まりたるも、語は名言多く、且つ出處も一は古典の中に在れば、教訓の書としては甚だ捨て難し。宛も其の鼎は甚だ凡にして

其の肉は甚だ美なるが如し、鼎を以て肉を去らずして可なり。

四 易及十翼について

周易及び諸卦重卦者

周禮に大卜の官あり、三易を掌りしこと見ゆ、連山、歸藏、周易是れ也。連山、歸藏の二易は早く亡び、今存するものは周易のみ。此の周易の周字につきては諸種の説あれども、周代の周なるべきは明かにして、今の易は周に於いて起りし也。八卦を畫せしは伏羲なりと繫辭傳に見ゆ、此等は證明も反證も成り難ければ、姑らく之れに従ふとし、又始めより之れに何等かの意義ありしとするも、之れを重ねて六十四卦となせしは何人なりしやといふに、伏羲之れを爲せりとするもの一、神農之れを爲せりとするもの二、禹なりといふもの三、文王なりといふもの四。されど一と確證あるにあらず、總べて想像説なり。

假りに六十四卦が最古の時代よりありしとして、其の包含せる意義は何如。宋の楊誠齋は其の著易傳にて、是れ古の文字なりとなせり、一見伶俐なる着眼なれども、坎の水、離の火等の外、多くは牽強を免かれず。又假りに或る方法を以て

上下經の作者

占筮に用ゐられしとするも、上世は龜卜の方が主とせられしは、書經の舜の言、及洪範中の所説にて明かなれば、六十四卦を尊重し、而して龜卜の法は之れが爲めに其の傳を失するに至りしは、周易よりなるべし。されば、重卦の畫者及び其の本始的意義は皆明かならずとして、今現に存する所の卦辭、或は彖辭とも云ふ及び爻辭、即ち今の所謂上下經の作者は何人ぞ。

繫辭傳の著者孔子が繫辭傳を作れりとは信すべからざるも、孔子の思想を含むことは甚だ多しは、其の何人なるを知らず、但し其の成りし時代は殷末周初なるべしといへり。然るに後世に及び之れを以て文王又は周公の作なりといふものあるに至れり、是れ繫辭すら既に知らざりしものを、遙かに後年より臆斷するものにして、史記漢書を始めとす。漢書は蓋し史記を襲用し、史記は易緯の説に依る、而して易緯は聖人てふ意義の誤解に基づく。聖人が易を作れりとは、繫辭傳中屢見ゆる所なるが、聖人とは古への知者哲人といふに過ぎず。然るに後世に及びて、聖人てふ語が内容の意義を増して、外延の廣さを減じ、或る史的特殊人、即ち堯舜禹湯文武周公孔子に限らるゝことゝなりしより、易の作者を此等の

中に求めざるべからざることゝなれり。さて然るに堯舜禹湯及び武王は、聖人中の事業家なるが故に、文教大に發達せりとなさるゝ殷末に生れ、且つ聖王中の最も學者なりしらしき文王は、蓋し恰好なる易の作者ならざるべからず。且つ其の功を周公にも分つに至りしは、周公は主權者側に於ける最後の聖人にして一切の名教は此の人によりて大成又は創作されたりとなすが故に、聖人易を作るの思想は、周公にも易の作者たる名譽を分たざれば満足する能はざりし也。

易緯の書にては乾鑿度最も古し、史記以前なるは異論なし。此の書に『文王爻を推す』と見え、史記直ちに之れに依りて、文王が姜里に拘せられしとき六十四卦を作り、周易を演ずといへり。然るに文王が姜里に拘せられしこと既に疑はし、況んや、上下經を文王の作なりとすれば、下の如き矛盾あり。升卦の爻辭、王云々の言は何如文王以前の王號は皆追尊なるに、文王此の時は西伯生前既に王といへるなり。明夷卦の爻辭に箕子云々とあり、是れ武王の時のこと也。幸ひに此れ皆爻辭なるより、馬融、陸績、王弼、孔穎達、朱子等皆此の矛盾より脱せん爲め卦辭は文王、爻辭は周公、之れを作るといふに至れり。此れには少しく證左らし

文王周公說
の山處及び
誤譯

きものあり、左傳に韓宣子が魯に來りて、易の象と魯の春秋とを見、『周の禮盡く魯に在り、吾れ乃ち今にして周公の徳と、周の王たる所以を知る』といへり。是れ一見、易の象と周公と何等か關係あるが如く見ゆれど、之れを以て直ちに周公が爻辭の作者なりとなさんは速斷に失す。此の語の意は、魯の立國と文明とが、其祖周公の徳澤に仰ぐ所多く、古文物の善く保存せられあるを頌せしに過ぎず。且つ爻辭は易の象を説けるものなるが故に、此ににいふ『易の象』を爻辭と解するとするも、崔述の既に着眼せし如く、左傳には此の以前に晋文公の易占の記事あるが故に、晋の末たる韓宣子が魯に於いて始めて之れを見るの理なし、所謂易の象なるもの、或は後にいふ如く爻辭にあらずして、象傳ならん。要するに上下經の作者は、今何人なりとも定め難し、唯其の出でし時代の殷末周初なるべきを知るを得るのみ。

易は殆んど謎語の如きものにて、解釋甚だ難く、又如何様にも説き得べきが如きもの也。是れ古來諸家の註釋が盛んに異途に出づる所以也。之れを一定せんことは到底不可能にて、或は恐らくは後世之れを解する程に、其の本始的意義

易の解釋と
費氏易

は深遠ならざりしやも知れず。故に之れを讀むものは諸家の解説に拘泥し、又は迷溺することなく、經の本文につき、明白に解し得べきものは、註解を見ずして可也。其の解し難きものは、其の最古の註釋書たる十翼に従うべきのみ、十翼の間に多少矛盾なきにあらざる故、此の時は其の古き方に従うべし。尙ほ解し難きときは、費氏易を可とせん。費氏易は易の正宗とも云ふべく、鄭玄、荀悅、王弼、孔穎達、後年に及びては、朱子等、皆費氏易の餘流なり。費氏易、今に傳はらざるも、鄭荀等の説に知るべし。以上諸家各見る所を異にすと雖も、參酌すべきものなからず。但し諸氏の解が、明かに後世の思想を以て易に傳會せしもの、又は種々の言辭を加へて隱語を解するもの、如きは、皆取らずして可也。

次に、十翼を以て孔子の作なりとなせるは、司馬遷よりなり、『孔子晩にして易を喜び、象、繫象、說卦、文言を序す』といへり。此の『序す』とは、敘述の意か、序次の義か、明かならざるも、若し序次の義ならば、十翼は孔子以前の作ならざるべからず、而るに繫辭、文言、共に孔子の語あるを見れば、遷は十翼を以て孔子の敘述せる者となせしならん。班固は明白に孔子の作なりといひ、孔穎達等に至りて

十翼の作者

は、『孔子の作る所たるは、先儒更に異論なし』など、言ひ去れり。されど是れ卦爻兩辭を文王周公に歸するが如く、亦何等根據なき説なり。孔子が易を研究せんとの志を起せしは、論語に見ゆ、或は史記の記する所の如く、韋編三絶するまでに、勉勵せしやも知れず。されど十翼を作りたることは、孔子の言中にも、孔門諸人の言にも、孟荀其他漢以前の諸家の説にも、少しも之れなき所にして、何等の證左なき臆説たるに過ぎず。

歐陽修一たび周易童子問を作り、十翼の所説が何等統一なきを辨明し、以て孔子の作にあらざるべきを疑ひてより、近世に至り考證益、精に入り、今や孔子の作にあらざることが定論となれり。寧ろ孔穎達の語を反對に、十翼の孔子作る所にあらざるは、諸家更に異論なしと言ひ得るに至れり。實に、今に於いては、立證の責任は、寧ろ孔子の作なりと主張する方面に在れば也。

繫辭文言二傳は、文中に『子曰はく』の語多きより見れば、其の孔子以後の作なるは極めて明瞭也。象傳は伊藤東涯の讀易私説にいふ如く、左傳に出でし韓宣子が魯にて見たるといふ易の象とは、象傳のことなるべく、孔子以前に之れあ

十翼著作の時代

りしもの也。易の象といへば、必らず爻詞か象傳か二者其の一ならざるべからず。而して爻辭は當時魯の外に晋齊等にも之れありしは、左傳の明記する所なれば也。而して繫辭傳文言傳を繫辭文言といふ如く、傳の字を省き、象傳を單に象といふと、其例少なからず。象傳は爻辭の解釋にして、爻は卦を解剖せるものなれば、卦の解釋たる象傳は、爻傳の前に出でざるべからず。且つ象象二傳は其の文體古樸にして、繫辭文言等の新様あるに似ず。されば象象二傳は孔子以前にして、繫文二傳は孔子研易の後に、孔子の思想、殊に易に關する所説を含むものとなして不可ならず。但し文言傳冒頭の四徳の解釋は、左傳襄九年穆姜の言と同じきを見れば、著者一人の思想より出でしにあらずして、古來の所説を纂輯せしものあるは亦明かなり。説卦傳は仁義並稱より見て、曾孟前後の著作なるべく、他の雜卦序卦の如きは、易を解するに於いて參考すべきものありと雖も、何等敬重すべき思想を載せず。其の何れの時に、出で、何れの人の手に成りしやは、深く問ふを要せざる也。

五 三禮について

(天) 周禮について

其の傳來

周禮は元と周官といひ、或は後に周官經ともいふ。儀禮と共に周公の作なりとなされ、中庸の禮儀三百威儀三千は、禮儀は經禮即ち周禮にして、威儀は曲禮即ち儀禮なりと解されたり。戰國亂離、禮儀行はれず、始皇亦古制を忌みしより、遂に一旦其の傳を失ひしが、漢武のとき、河間獻王厚賞を懸けて古書を蒐めしとき、李氏なるもの、周禮五篇を獻す、冬官即ち司空の卷缺げ、天官冢宰(總理兼宮相)、地官司徒(文部)、春官宗伯(禮部)、秋官司寇(法部)、夏官司馬(軍部)は備はれり。王は千金を以て殘缺一篇を求めしも、終に得ず、乃ち考工記を以て之れを補へり、今の周禮是れ也。當時猶ほ其の學者なかりしが、劉歆頗る之れを究め、王莽の篡奪に參與して、其の宰相となり、周禮により新政を施設せしより、此の書漸やく著はる。

信疑の二説

周禮が無名の一匹夫によりて發見せられ、王莽劉歆に利用せられ始めて著はれしは、周禮の爲めに極めて薄倖なり。何休は六國陰謀の書といひ、歐陽修蘇轍

胡五峯等皆之れを偽書となせり。之れを疑ふものは云ふ。周禮は孔子之れを言ふことなく、孟荀諸家亦之れを知らず、孟子に周の制度を論せし條、軻や其の略を聞くといふのみ。又秦以前の古書、周禮を引用するものなく、漢に至り、他の諸書皆一流の學者によりて傳へられしに、周禮獨り然らず、怪むべき也。又古書として、は餘りに綿密に過ぐることも一の疑ふべき也。且つ孟子に、文王のとき關市讖^シて征せず、澤梁禁なしとありて、通行税又は雜税の類なかりしと言へるに、周禮にては、關門往來には重税あり、又雜税多きも矛盾也。又公の地百里、侯七十里、伯五十里云々と孟子に見ゆるに、周禮には公五百里、侯四百里、伯三百里なり、矛盾の甚しき也。又周禮に在る賒貸の法は後世のものらし。要するに王莽新政の爲めに其の典據を傳會せんとて、劉歆の偽作にはあらざるかと。

而るに唐太宗、程伊川、朱子等は深く周禮を信するもの也。信するものは辨じて曰はく。周禮は執政者の寶典にして、普通人民には讀ましむべきものならず。上世の學者が未だ之れを知らざりしは怪むを要せず。又孟子の古制を言ふは一と事實として信すべからず、何となれば、孟子は諸侯の收歛を戒め、又土地を是

れ廣むるに急なるを諫止せんとて、古制を假りて言を爲すとあり。又假令ひ關市の税なしとするも、孟子は是れ文王の岐山に在りて天下を一統せざりし前のことを言へるにて、一統後の制なる周禮とは自ら異なる所あるべき理なり。又公國は車千乗を出すとすれば、兵十萬人を要す、百里の小國の能くなすべき所にあらず、孟子の所謂百里とは井田の實積正味のみにて、領域全部に非ざるは明かなり。賒貸法の如きも極めて便利なれど、王莽の如く高利を貪りてこそ害あれ。文章も簡古の風あり、古字多く、歆等が短日月にて偽作し得べき所ならず。現に王莽の爲めには、妨害なるべきもの頗る多しと。

公平に判断するに、之れを後世の偽作となすは其の當を得ず、されど、周公の作なりとなすも臆説を免れず、周制の記録としては信すべきものなるが如し。其の信すべき程度は、儀禮の書も亦同じ。

周禮を讀むには、今傳はれる鄭玄の註を宗とするも、今日より見れば、其註が亦解し難き所あり。唐の賈公彦、周禮正義を作る、十三經中の白眉と稱せらる。但し公彦の説き得ざりしものあり、九賦の如き是れ也、鄭玄は賦を口率錢と云ふさ

らば人頭税の如きものにて、周に此の制ありしやは疑はし。公彦以後見るべき註書なし、宋の王與之の周禮訂義稍参考すべし。清朝にては方望溪の周官集註及び周官析義あり、乾隆帝御纂の三禮義疏あり、其の所謂御案なるものは望溪の説なり、望溪は頗る周禮を研精せしも、獨斷多く、其の解し難きものに會へば輒ちいふ、是れ劉歆の竄入せるものと。

宋學諸儒は心性を主とし、深く意を制度、字義、訓詁に用ゐず、故に周禮の如きは其の短處なり。清朝考證學の隆興に至りても、周禮は偽作なりとの説あるより專心研究するもの少なし。吾邦にては獨り安井息軒先生の晩年大に之れを好まれしのみ。周禮は通例「しゅうれい」と云はずして「しゅうらい」と訓す

(地) 儀禮について

儀禮は主に儀式上のことを定めたるものなり、古來之れあるもの、周のとき、一層之れを綿密にしたるものならん。すべて十七篇、原と三百篇ありしといふ。周の世は上代の簡素を承けて、一層法則の詳なるを張れり、儀禮の如きは其の尤なるもの。

其の傳來

禮に對する思想を窺ふに、道德は無形なるものゆえ、禮義を設けて、具體的に法則を建て、何人も之れに依らしめんとの趣意なり。例へば美はしき情も、之れに過ぐれば敬を失す、親を愛するの極、分に過ぎたる生養死葬は、却つて其親を喜ばしめざるが如し。故に道德の原則を教ふるのみにて危険なりとし、格式身分に應じ、人情を酌みて、精細に法則を設けたる也。後世に至り、人情亡びて、儀式獨り存し、其の弊漸やく多きを致せり。是れ決して儀禮の本旨にあらず。

漢のとき魯の高堂生なるものあり、禮を傳ふ、子夏よりの傳統なりと稱せり。又魯の共王、孔子の舊宅を毀ちしとき、儀禮五十六篇を得たり、其の十七篇は高堂生と同じ。皆科斗の文字にして、之れを天子の秘府に藏したるまゝなり。今の儀禮は高堂生の傳へたるもの也。

儀禮は主として士格の儀式を述ぶるも、燕禮、聘禮、覲禮等は皆諸侯の大禮也、其他はすべて滅びたるならん。大戴禮の中に、天子遷祚の禮、遷廟の禮等あり、科斗文字の儀禮より取れるものならん。

其の註釋

後漢の鄭玄の註最も可なり。後漢の末より清談行はれ、禮は其の大に忌む所

なれば、儀禮の如き煩些なるものは、之れを研究するものなかりき。南北朝のとき、南朝は華美優麗の藝術を好むが故に、禮の如きは殆んど顧みられず。北朝は之れに比し、頗る強健質實なるものあり、禮の學者亦なきにあらず。徐遵明、熊安生の如き是れ也。唐に至りて、賈公彦の儀禮正義あり、儀禮は唐に至りて始めて讀まる、但し讀み難きもの、一に數へられ、韓退之も之れを讀むに困むといへり。唐のとき、試験には詩文を重んじ、禮は其の科目に之れなきが爲めに、禮學一たび挫折し、宋のとき、王安石周禮を好みて之れに註し、又學校の教科に用ゐしも、儀禮を退けて、用ゐざりしが故に、儀禮二たび衰ふ。朱子晚年儀禮經傳通解を著はす、儀禮を経とし、他の二禮を其の註脚とせしが、完からずして逝き、女壻黃幹之れを繼げり。近來にては張惠言の儀禮圖頗る可なり。儀禮は「ざら」と訓するを例とす

(人) 禮記について

禮記は儀禮と相表裏す、儀禮の註脚と見ても可也。漢初、后蒼なるもの禮に詳し、其弟子に戴氏兄弟あり、兄を戴德と云ひ、弟を戴聖といふ、聖は禮記を輯し、德は大戴禮を編す。大戴禮、くわしくは大戴禮記といひ、之れに對し、其の舍弟の輯せ

其の編輯

其の内容

る禮記を小戴記ともいふ。大戴禮は孔子の言あり、曾子の言あり、名教に資すべきもの多きも、漢孝昭帝のときの禮もあり、又賈誼の文も編入されあるが故に、之れを経書中に列せず。而して禮記は七十二弟子の傳へたるものを蒐輯したるものとなりとして、之れを尊重したり。禮記中には頗る教訓に富むもの多きも、周禮儀禮は事の中に教訓を含めり、二禮を棄て、一に禮記に取るは、宋人の誤まりなり。大戴禮は「だたい」と訓するを例とす

禮記の中に、樂記及び學記には名言多し、されど其の文卑弱、後世の作なるは明かなり、たゞ其の事は即ち上世の傳ならん。大學中庸の二篇は眞の古書なり、朱子之れを擇み出し、單行とし、論孟と並べて四書と名づけしは、誠に其の當を得たり。王制の篇は孔子時代のものならず。月令は呂不韋の呂氏春秋中にあるものにして、不韋は今逸せる周書より取りたるものなれば、疑ふべきものならず、されど、禮記中、處々漢儒の手に成るものあり、檀弓の中、武王の夢に、天が三を與え五を與ふと見しに、文王は九十五にして死し、武王は九十三にして死せりとあり、此等は全然信すべからず。其他斯くの如きものあるより、清朝の學者は禮記よ

りも大戴禮を取るに至れり。大戴の文、荀子と同じきものあり、信すべきもの多けれど、天圓篇の如きは頗る疑ふべし。阮元は大戴より曾子十篇を別にしたられど、之れとて總べて曾子の遺言にはあらざるべし。

禮記は大小ともに、甚だ讀み易し、之れを讀むには、鄭玄の註、孔穎達等の正義、衛泌の禮記集說等可ならん。禮記は「らいき」と訓するを例とす

六 春秋及三傳について

古は左史右史あり、左史は事を記し、右史は言を記す。其の事の記されたるが春秋となり、其の言の記されたるが書經となるといはるゝも、斯く判正に區別さるべからず。されど、類別體の記録と年代別の歴史との區別はありしならん。類別體の記録が即ち書經なり、而して正史は編年體を正則とす。しかし、古は竹簡に漆もて書きしものなれば、多く精密に書くことを得ず、篇書と簡書との別あり、又板に書することあり、之れを方といふ、今の冊の字は竹簡を綴りたる形の形象文字也。

歴史の總名を春秋といふ、春夏秋冬の略稱にして、四季の出來事を網羅するの意ならん。周公、周の制度を定めしとき、修史の體裁も亦一定せしならん、諸侯にも史官ありて、編年の歴史を記せり、皆之れを春秋と云ひしは、既に前章述べし所の如し。前章の數例の外、汲冢書に夏殷の春秋なども見ゆ。然るに衰世に及びて修史の法廢れしかば、孔子は治國修身の規則を後世に残すが爲めに、直筆を以て事實を正し、順逆を明にせんとしたる也。且つ當時天子は諸侯に、諸侯は卿大夫に制せられつゝあるが故に、孔子は最も意を名分に致せり。孔子春秋を作りて亂臣賊子懼るゝ所以也。

古來、孔子の春秋は、一字も忽にせず、一字を以て褒貶せりとの説をなすものあり、公と云はずして人といふ、一字を以て貶する也、名を稱せずして字を云ふ、一字を以て褒せるなりとなすが如し。是れ或は然らんも、さればとて、一と明瞭ならず、諸家或は之れが爲めに揣摩を逞しくし、孔子を以て苛酷なる獄官視するに至れり。鄭樵の通志略に、孔子豈一字や二字やを以て褒貶せんや、只これまで史官の曲筆せるを直筆せるのみといへど、是れも亦非也。孟子に其義は丘竊かに之

れを取るといひ荀子に春秋は微とあれば、事實以外に微意の存せるものありしならん。且つ其の褒貶とは、從來の事跡につき把羅剔抉するにはあらずして、以後の亂臣賊子の爲めに藉口する所を防ぎたる也。趙盾其の君を弑すの如き是れ也。されば、善惡を定めたるはあり得べきことなれど、褒貶の趣旨の明かならざるを強いて牽會せんは宜しからず。

三傳の短長

春秋のみにて事迹尙ほ明瞭ならず、左傳出でざるべからざる所以也。左傳にても尙ほまゝ疑はしき所あり、故に公羊傳、穀梁傳あり、公羊高及び穀梁赤の著なり、問答體にて、理屈多く、事實少なし、以上を合して三傳といふ、たゞ左傳のみを春秋傳といふこともあり。秦火のとき皆滅びしが、漢に至りて公羊、穀梁の學は早やく世に出で、董仲舒、公孫宏の如き皆公羊學者也。左傳は張蒼より賈誼に傳はりしが、甚だ流行せざりき。左傳中には奇怪なること多く、又浮夸と稱せらるゝ程に文章美彩あるが故に、人の信用を博せず、左傳は後漢の末頃より漸やく世に用ゐらるゝに至れり。公羊は「くやう」と訓するを例とす

公羊、穀梁は、春秋が周を退けて魯を王とすといへり。是れ孔子自ら大逆を犯

すものにして、其の意を失すること甚し。左氏は元年春王の正月を解して、特に明かに周の正月といへり、此の一事最も孔子の心を得たり。這般の事漸やく明かとなり、公羊穀梁は左傳に壓せらるゝに至れり。左氏は別に左傳の史料の殘餘を蒐めて國語を作れり、故に左傳を内傳と云ひ、國語を外傳といふ。而るに其の著者は、論語に所謂左丘明なることは、史記にも之れあり、甚だ疑はれざりしが、唐人時に之れを疑ふものあり、宋に至り王安石は、論語の左丘明は左丘が姓なれども、左傳の著者は左氏なりといへり。此の論は取るに足らざれども、左ればとて、必らず左丘明なりとの確乎たる證據もなければ、姑らく疑を存せん。公羊穀梁は其の著者の名は明かなれども、年代詳かならず、其文より見れば先秦の人らしからず。三傳の優劣論は古來之れあるも、必らずしも決するに及ばず、一は事實を主とし、他の二は義を旨とす、宜しく相參酌すべきのみ。

三傳の外、鄭氏傳、夾氏傳なるものありしが如くなるも、早く既に滅び、其の形骸の一片だも存せず。宋のとき胡氏傳あり、胡安國なるものゝ著なり。當時高宗の志は弛みて、金に對する敵愾心を失へるを慨し、春秋の輕外重内旨義により、盛

三傳外の三傳

んに尊王攘夷の氣を吐けり。一の慷慨的理屈論にして、史傳としては少しも取るべき所なし。

其の註釋

左傳を讀むには服虔の註は既に滅びたれば、杜預の註のみに依らざるべからず。されど杜註誤謬あるを免れず、諸侯以上は葬終れば喪を除すとさせるが如きは是れにて、其の解到る處矛盾を免れず。杜預は蓋し時の太子の爲めに其の意を承け、速かに太后の喪を除せしめんとてなり。實に春秋の罪人といふべく、其他文義の誤解あり。孔穎達の左傳正義頗る可なれども、一字一句悉く杜預に依り、服虔の説を擧げ、終りに其の説非なりといへり、實は其の説可なる也、勅命に違はざらんが爲めに、強いて杜註を庇護せる也。清の顧炎武に杜解補正あり、參考すべし。我國にては安井息軒先生の輯釋あり、又數年前始めて上木されたる予の恩師竹添先生の左氏會箋は、博覽精通支那の學者皆之れを驚けり。

一 既に孔子の小傳と人格と事業とを序述し了る、而して更に下の二篇を附す。
二 思想史上の孔子、孔子の倫理說等は、世既に之れを言ふもの多けれど、其の教育說及政教論は、淺學未だ興かり聞かざれば也。
三 且つ其の倫理說、及び思想界に於ける孔子の位置等は、其の人格の修養、學術に於ける集大成及び其他の諸章、既に略其の一般を説きたれば也。
四 但し余をして孔子の教育學を敘說せしむるは、別に機あらん。今たゞ其の要を摘みて成るべく簡なるに従ふ。
五 政教論、一たび之れを教化行政論と題せんとしたりき、爲政者が政治を通じて民衆を教化するの義なり。
六 人の社會に在る、何人も常に教育されつゝあらざるなく、又教育しつゝあらざるはなし。教育は單に教師と學生との間に行はるゝものとなす勿れ。余は教育に興味を有するものが、益、教育圏外に多からんことを望む。
七 而して、人を教育するの法は、同時に自己を修養するの法たり。教育と修養とを思ふもの、之れを孔子に於いて得る所甚だ多きを看取されんことを望む。

第四篇 孔子の教育説

第一章 教育概論

教育の意義
と人性観

先づ孔子が教育とは何ぞや、教育の意義何如と解せるを見んに、必然其の人性觀に入らざるべからず。孔子は未だ後の宋學者の言ふが如く、未だ性善を云はず、韓退之の性三品説即ち上中下ありとするの説は、餘りに常識的にして、思索家は物足らぬ心地すべけれど、寧ろ孔子の本旨を得たるものに近からん。故に孔子の思想に在りては、教育とは必らずしも、人性の善なるを發達せしむるのみならず、亦必らずしも其の惡なるを矯正するのみにあらず。左の言は此の點に於いて味はふべきものあり。

生れて之れを知るものは上也、學びて之れを知るものは次也、困みて之れを學ぶは、又其の次也、困みて學びざる、民斯れを下となす矣。(季氏)

此の言は教育の限界を説くものと合せ見るべしと雖も、亦以て教育の意義を窺

ひ知らるべきものなり。教育上より觀察すれば、人は凡そ分ちて二種となすべく、更らに小別して四階となし得べし。學知以上は其の性、明且つ善なるもの、困學以下は、昏且つ惡なるもの也。之れを小別すれば、生知は上賢孔子は又之れをなり、學知は下賢なり、困學は上愚にして、困不學は下愚也。其の賢なるものは、教育は之れを發達せしむるに在り、其の愚なるものは、之れを矯正するに在り、賢愚相混するものは、發達と矯正とを互用せざるべからず。

元とより孔子は、教育とは發達なり又は矯正なりと、意識的に之れを判別したるに非ざれど、其の所言の意義を推度するに、發達論及び矯正論の萌芽を含めるを見らる。例へば、

發達と矯正

仁遠からんや。我れ仁を欲すれば、斯に仁至る矣。(述而)

能く一日其力を仁に用うるあらんか、我れ未だ力の足らざる者を見ず。(里仁)と云ひ、仁に到るの甚だ容易なるを示し、仁吾れに在るが如く、

君子、九思あり、視は明を思ひ、聽は聰を思ひ、色は温を思ひ、貌は恭を思ひ、言は忠を思ひ、事は敬を思ひ、疑は問を思ひ、忿は難を思ひ、見得ては義を思ふ。(季氏)

教育概論

三

といへるは、尙書の洪範に見ゆる五行五事の如く、其の性の自然に従ひて之れを治め之れを發達せしむる思想と、其用語までも相似たり。此等は發達的教育又は修養にして、又例へば、孔門教育の綱領として前篇解釋せし

子四を絶つ、意するなかれ、必ずするなかれ、固するなかれ、我するなかれ。(子罕)の如きは、人の本來有する所の惡的分子を抑制し改善するの義にして、又毎に克己を説くも此の意に解せらる。此れ等は矯正的教育又は修養にして、孔子自身も此の二者を兼ねたりとなせるは、

我れは生れながらにして之れを知るものに非ず、古を好み、敏にして以て之れを求むる者也。(述而)

徳の修まらざる、學の講せざる、義を聞いて徙る能はざる、不善改むる能はざる是れ吾が憂也。(同上)

等の言にて窺ひ知らる。

古來の教育學者、人性を善なりと觀するものは教育の意義を發達なりとし、之れを惡なりとするものは、之れを矯正なりとなせり、而して孔子は此の二様の見

を含むもの也、孟子は性善論者なり、故に孔子の發達的教育説を祖述し、荀子は性惡論者なり、故に其の矯正的教育説を展擴す、而して孔子に在りては二者共に存す。されば此の二人は共に孔子の一面を得たるもの也、荀子が人性を惡なりといへるを不愉快として、之れを孔子の正系にあらずとなせる學者あるは過まて

る也。
教育の必要にして、且つ其の效果の確實なる、所謂教育の可能なることは、孔子の深く信ずる所なり。

教へあり、類なし。(衛靈公)

の言、人間生來何等の別なく、又類なし、只教化なるものありて、然るに至らしむといへるものにして、語簡なりと雖も、殆んど教育の萬能を道破せり。又

性相近きなり、習へば相遠き也。(陽貨)

ともいへり。此の章、宋儒は之れを解して其の性質理氣論に傳會せんとすと雖も、孔子の思想に在りては、少しも此の種の傾向なきが故に、寧ろ簡單に教育の可能と必要と及び其の効果を言へるものとなすの妥當なるに如かず。斯く教育

の可能なる所以は何ぞや、前に言ふ如く、何人も善的に發達すべき資質ある又易の
新義の節天人合一一説參照と、又善は必らず感化力を有するものとなさるれば也。

徳は孤ならず、必らず隣あり。(里仁)

孔子曰はく、徳の流行する、置郵して命を傳ふるよりも速かなり。(孟子公孫丑上)

君子の徳は風、小人の徳は草。(顔淵)

等の言、皆此の意なり。

孔子は人の知性を分ちて生知、學知、困知、困不學の四階に分てり、中庸は之れを承繼していはく、

或は生れながらにして之れを知り、或は學びて之れを知り、或は困して之れを知る、其の之れを知るに及びては一也。

と。結末一句、如何なる知性の人も、善く教育又は修養を経たるものは、其の效果の劃一なるを示すものなり。但し孔子が人に困不學と下愚移らざる一階ある(陽貨)を認め、教育の到底如何んともなし難き人物あるを擧げたるは經驗的にして、古來の教育家又は教育學者が已むを得ざるの限界とせるに一致す。されど

孔子が上に生知の一階ありて、教育修養を要せざるもの後世之れをあるを稱し
たるは、蓋し空想にして經驗的事實にあらず、大に教育の領域を縮小したるの感
なきにあらずと雖も、一方に、孔子自身も亦生知にあらず(述而)と云へるは、教育の
必要及び効果の爲めに、大に心強き心地す。

故に教育は何人にも必要なり、既に美質あるものと雖も、教育又は學問なけれ
ば危しとす。即ち、

君子重からざれば威あらず、學べば、則ち固ならず。(學而)

是れ也。此の章古來兩解あり、邦語にて訓すれば、「學も則ち固かたからず」とするも
のにて、前句と一事に解し、君子重からざれば其の學問も堅固ならずの義とし、固
といふ字を善意に取れり、朱子は此の説なり、正義にも兩説を擧げたり。されど
文勢上、二句二事と見るべく、「則ち」の字義よりするも、又固の字は毎に頑固、固陋
等惡意に用ゐらるゝよりするも、又孔子の他の所説を參攷するも、又學が固しと
の造語の生硬なるより考ふるも、「君子學べば則ち固蔽ならず」との意義を可
とせん。孔子すら、學ぶの必要を十分に感得せり。

吾れ非て終日食はず、終夜寐ねず、以て思ふ、益なし、學ぶに如かざる也。(衛靈公) 而して老いていよく、修學を怠らざりしは、孔子の人格の章に於いて、既に言へる所の如し。

又學ばざるの道德は其の根柢甚だ薄弱なるの危険あるが爲めに、道德に心を寄すると共に、同時に又學問を好愛すべしとて、

子曰はく、由や、女、六言六蔽を聞けるか。對へて曰はく、未だし。居れ、汝に語らん、仁を好みて學を好まざれば、其の蔽や愚、知を好みて學を好まざれば、其の蔽や蕩、信を好みて學を好まざれば、其の蔽や賊、直を好みて學を好まざれば、其の蔽や絞、勇を好みて學を好まざれば、其の蔽や亂、剛を好みて學を好まざれば、其の蔽や狂。(陽貨)

と説示したるは是れ也。又尙書大傳略説及び大戴禮勸學に左の如き一節あり、教育あるものとなきものは、明かに區別さるべきをいへり。

孔子曰はく、野なるかな、君子學ばざるべからず、中略近うして逾、明かなるものは學なり、之を譬ふれば、洿の如きか、水潦濁し、堯滯生ず、上より之れを觀れば、誰

教育の無効なる一階

れか其の源泉に非ざるを知らんや。

此の文、説苑建本にもあり、但し冒頭『野哉』の二字『鯉哉』とあり、孔子が鯉を呼びて其の子伯魚に告げたる語なり。鯉と野とは字劃相似たり、而して『野哉』は義をなさず、説苑の記する所是ならん。

教育の必要にして可能なるは既に明かなれども、其の効界を限界するものあるを知らざるべからず。上に於いては、『生れながらに之れを知る者』あり、教育は此の生知者に及ぶの要なしとなせるは既に言へり、下に於ける限界は何如。

教育萬能を信ずる孔子も、其の教育に於ける多年の經驗より、茲に留意したりと見え、之れを明言したり。いはく、

唯、上知と下愚とは移らず。(陽貨)

と。又宰我を叱したる、

朽木は雕すべからざる也、糞土の牆は朽すべからざる也。(公冶長) も、一時詰責の言なりとはいへ、到底教育すべからずといふの意也。又下愚にあらざるも、自ら善に遷るの努力なきものは、教育者より見て如何ともなし難きも

のあり、

法語の言能く従ふなからんや、之れを改むるを貴しとなす。異與の言能く説ぶなからんや、之れを釋ぬるを貴しとなす。説びて釋ねず、従ひて改めず、吾れ之れを如何んともする末きのみ矣。(子罕)

の如き是れ也。従はしむる、説はしむるまでは、教育者の任なれども、改むる釋ぬるは、之れを被教育者自身の努力に俟たざるべからず、此の努力を缺くものは、竟に之れを教育し難しとなす也。

又、教育に限界あるは、猶ほ苗の悉く長せざる、若しくは長じても悉く實るなきが如く、自然の數に於いて已むを得ざるものとなりとす。いはく、

苗にして秀でざるものあり矣、秀で、實らざるものあり矣。(子罕)

此の章、孔安國の註に、『言ふは、萬物生れて育成せざるものあり、人に喩ふるも亦然り』と解せるは、其の意を得たり。邢昺は、此の前章に孔子が顔淵を惜みたる言あるに繼續して、更らに復び之れを憶ふの辭となせるは當らず。顔子の如きは不幸蚤世せりとはいへど、夙に既に育成したるものにて、之れを苗にすれば、秀

で且つ實りたるものなれば也。秀と實とは學問及び道德の上よりいふべく、富とか貴とかの實利的に言ふにはあらざれば也。即ち此の言、顔子を惜むにあらすして、一般に到底育成せざるものあるをいふ也。朱子の解に『蓋し學びて成るに至らざるもの、此くの如きものあり』とあるは可也。

既に教育の可能にして、且つ其の効果に制限あるは、教育事業の愉快にして且つ困難なる所以なり。孔子はしばしば

人を誨へて倦まず。(述而)

といへり、是れ其の天職なりとする信念に驅られてなりと雖も、亦之れに愉快を感せしは想像さる。彼れが如き偉大なる性格と、斯くの如き熱心なる教育を以てして、三千の門下、能く其の業をなせしもの七十餘人に止まりしとすれば、孔子豈自ら教育の至難なるを経験せざらんや。

哀公問うて曰はく、弟子孰れか學を好めりとなす。孔子對へて曰はく、顏回といふものありき、學を好みて、怒りを遷さず、過まちを二たびせざりしも、不幸短命にして死せり、今や則ち亡し矣、未だ學を好むものを聞かざる也。(雍也)

といへるを見れば、其の多數なる門生中、眞に善く自ら教育し得たりと信じたるものは顔子一人のみなりしと見ゆ。此の言は顔子死後なると、問者の哀公なるよりして、孔子の最も晩年のことなるは明かにして、四十餘年の長日月を教育に努力したる最終の辭也、如何に教育の困難なるを深く感じたりけん。以下之れを言ふもの、皆其の經驗より出でたる傾聴すべきものなり。先づ

唯、女子と小人とは養ひ難し。之れを近づくれば則ち遷らず、之れを遠ざくれば則ち怨む。(陽貨)

といへり、世は君子少なく小人多きを常とすれば、此の點に於いて教育は既に難し。而して教育の困難には種々の因あり、其の一は、學問其のものが本來既に容易ならざる性質のものたること也。いふ、

學ぶこと及ばざるが如くなるも、猶ほ之れを失はんことを恐る。(泰伯)

其の二は、一般被教育者が、多くは教化に歸するの努力を缺くこと也。いふ、

吾れ未だ徳を好むこと、色を好むが如きものを見ず。(子罕)

其の三は、多くは教化に就くの誠意を有せざること也。いふ、

亡くして有りとなし、虚にして盈となし、約にして泰となす。難いかな恒あるや。(述而)

其の四は、多くは教化を咀嚼するの思辨を厭ふこと也。いふ、

學びて思はざれば、則ち罔し。(爲政)

斯くの如く教育は至難なりと雖も、其の至難なるは即ち是れ愉快の存する所なり。其の教ふる所のもの彬々進色あるを見るが如き是れ也。

後生畏るべし、焉くんぞ來者の今に如かざるを知らんや。(子罕)

といへる、後輩年少の畏敬すべきものあるをいふ也。孔子も自ら其の門の教育を楽しみしの狀は既に之れを前篇に見たり。

次に教育の時期につきての説を窺ひ見ん。

孔子自身は、

吾れ十有五にして學に志さす。(爲政)

といへり。此の語以外には、人の教育の初まるべき時期を明言せるを見ず。されば茲に周禮、禮記、大戴禮、尙書、大傳及び周易等に散見する、上代に於ける教育の

初期即ち學齡の制度、習慣、又は學說等を一顧するの要あり。

周禮春官大宗伯の條下に、『樂師、國學の政を掌り、以て國子に小舞を教ふ』とあり、其の鄭玄の註に、

年幼少の時、之れに舞を教ふ、内則に曰はく、十三、勺を舞ひ、成童、象を舞ひ、二十、大夏を舞ふ。

といへり、されば十三既に學に就くなり。禮記の曲禮に、

人生れて十年、幼學と曰ひ、二十を弱冠と曰ふ。

とあり、又同じく禮記の内則に、

子能く食を食へば、教ふるに右手を以てす。能く言へば、男は唯、女は俞。男の盤は革、女の盤は絲。六年、之れに數と方名とを教ふ。七年、男女席を同じうせず、食を共にせず。八年、門戸を出入し、及び席に即き、飲食する、必らず長者に後れしめ、始めて之れに讓を教ふ。九年、之れに日を數ふるを教ふ。十年、出で、外傳に就き、外に居宿し、書記を學び、衣は襦袴を帛にせず、禮初めを師ひ、朝夕幼儀を學び、請うて簡諒を肄ふ。十有三年、樂を學び、詩を誦し、勺を舞ふ。成童、象

を舞ひ、射御を學ぶ。二十にして冠し、始めて禮を學び、以て裘帛を衣るべく、大夏を舞ひ、悖く孝弟を行ひ、博く學びて教へず、内にして出でず。

とあり。されば幼時より家庭教育なきにあらざるも、學業の方より云へば、十歳にして豫備教育を受け、十三歳にして、本科に入るの制なるが如し。

然るに尙書大傳には、

年十五、始めて小學に入り、十八、大學に入る。

とあり。尤も天子の嫡子、衆子、諸侯の子、又は庶人の子弟等、身分によりて始學の年齢も異なりたるやに見ゆ。何れにしても、今の小學令の學齡の如く、強制的に劃一に實行されたるや否やは疑はしく、十三歳前後、十五歳に至る年輩を以て教育の初期となしたりしが如し。

しかし、學說としては、教育は早くより始まらざるべからずとなせるは、禮の内則の文にても窺ひ知るべく、大戴禮保傅篇、實は賈誼新書の保傅篇の言ふ所の如き、王者の教育なりとはいへ、胎教、養教、褓教等の別ありて、生後は勿論生れざる以前より教育を要すとなせり。易に於いても、蒙卦に教育を説き、教育は童蒙に於

いて有効なるをいへり。孔子も、積學成徳は成るべく夙やくより始まらざるべからずとなせるは、

孔子曰はく、少成は人性の如く、習慣を常となす。(天戴禮保傅篇)

孔子曰はく、少成は天性の如く、習慣は自然の如し。(新書保傅篇)

の言にて察せらる。

而して教育の効力ある期間は殆んど終極なしとなせり。孔子自身も老ひて益、修養し勉學したり、又現に其の門人中には、曾參の父曾皙の如き年長者もありし也。

又教育の成效に要すべき時間は、一通りの教育は三年にして可なりとす。

三年學びて穀に至らざる、得易からざる也。(秦伯)

此の解には二説あり、孔安國は穀を善と解し、邢昺之れを取り、鄭玄は祿と解し、朱子之れに與し、以て人の仕官を急ぐなからんを戒めたるものとなせども、穀字の善字と同じきは古書毎之れあり、又此こに『至らず』とあるより見れば、寧ろ孔説を可とせん。孔安國いはく、『穀は善也。言ふは、人三歳學びて善に至らざる也。』

其の有効時間

るは、得べからず、必らずなきをいふ也。人に學を勸むる所以』と、即ち例外は已むを得ずとして、人は通例三歳の教育を以て、一通りの成效を見るべしとなせるもの也。

されど、三年は蓋し最短期なり、孔子は

速かなるを欲すれば、則ち達せず。(子路)

といへり、是れ子夏が政を問へるに答へたるものなれど、亦以て之れを教育に移し見るべし、闕黨の童子を退くるに『速かに成るを欲するもの也』といひしこともありき。此の三年以上、教育は固より終極なし、愈、長けれ愈、善し。

子漆雕開をして仕へしむ。對へて曰はく、吾れこれ之れを未だ信ずる能はずと。子説。(公冶長)

の一例は此の意を見るべし。

而して人の年齒と教育との關係は、如何なる高年者と雖も、教育は有効ならざるはなしとせるもの、如し。

朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり矣。(里仁)

教育は老死
まで有効な
り

との言あり、何晏は之れを解し、孔子が世の道なきを嘆じ、若し世に道の行はるゝあるを聞けば、吾れは死すとも可なりといへるものとし、朱子は、人生の本務は道を知るに在るの意を強く言ひたるものと解するも、寧ろ顧炎武が中庸の所言を引きて解する説の最も明瞭なるに如かず。いはく、

學ばざるあり、之れを學び、能くせずんば、措かざる也。問はざるあり、之れを問ひ、知らずんば、措かざる也。思はざるあり、之れを思ひ、得ずんば、措かざる也。行はざるあり、之れを行ひ、篤からずんば、措かざる也。年數の足らざるを知らざる也。俛焉として日に華ふ、斃れて後に已む。故に曰はく、朝に道を聞く、夕に死する可なりと。吾れは其の進むを見る也、其の止まるを見ざる也。一日未だ死せざるの身あり、則ち一日未だ聞かざるの道あり。(日知錄卷七)

と、即ち人は老衰死に至るときと雖も、努力さへあらば、必らず善に遷るの可能性あるをいふ也。荀子に、

子貢、孔子に問うて曰はく、賜、學に倦めり。中略、孔子曰はく、其の曠を望む、卓如たり、嶼如たり、兩如たり、此れ則ち息む所なるを知ると。子貢曰はく、大なる哉

死や、君子も息み、小人も休む。(天略篇)

とあり、又列子にも此れと同様の問答を擧げ、最後に、

仲尼曰はく、賜、汝之れを知れ、人胥生の樂しきを知り、未だ生の苦しきを知らず、老の憊なるを知りて、未だ老の佚なるを知らず、死の惡なるを知りて、未だ死の息むを知らず。(天瑞篇)

と附加し、列子一流なる死生を一にするの解説をなせども、孔子と子貢との間に若し此の種の問答ありしとすれば、恐らくは列子の解する所の如くならじ。韓詩外傳にも、之れと相似たる問答を載せ、其の結語に、

子貢曰はく、君子も亦休むあるか。孔子曰はく、棺を闔うて播を止む、其の時の遷り易きを知らず、今、此れ之れを君子の休む所といふ也。(卷八)

と見ゆ、孔子の本意は、人間一生を通じて努力すれば、向上進歩す、學問は死するまで止むときなく、眞の休息とは即ち死なりとなすもの也。

されど、最も有効なる期間は、年少より四十五に至るまでの間となせり。孔子自身發達の内省的序述(爲政)にも、老齡尙は進歩しつゝ、已ますとはいへ、十五よ

り始まり、四十を最も盛んなりとし、五十に至りて確立せしが如し。尤も學問の限界は、古來の習慣上、五十に限られたるが加し、是れ禮に明文あるものにして、毛奇齡の考證論語稽求篇せる如く、古へは五十以後、復親學せず、故に養老の禮、五十を以て始まるものなり。孔子また別に之れを明言せり。

四十五にして聞ゆるなき、斯れ亦畏るゝに足らざるのみ。(子罕)

年四十にして惡まるゝ、其れ終りなるのみ。(陽貨)

是れ四十五に至るも尙ほ善聲なきは、最早や學問修養の成効覺束なきものとなせるなり。但し其の發展已まざるものにありては、一生を通じて終息するなく、曾子の所謂「死して後已む」秦伯ものたる也。

第二章 教育目的論

教育又は修養の目的は理想の人格に達するに在り。孔門の教育に在りては、理想の人格は、聖人善人を最高とし、之れに次ぎては、君子と云ひ、士と云ひ、成人と

云ひ、最も君子を推す。孔子は屢、門人に教へて君子たらんを期せしめ、門人も亦君子に達するを期し、毎に如何にして君子たるべきやを質問したり。思ふに孔子の教は、君王に堯舜禹湯文武たるを理想せしめ、輔相及び臣僚に、伊尹周公管仲子産たるを努力せしめ、而して人として、最も完全なる人格として、全般人間に君子たることを希望せしめたるが如し。孔子自らは、聖人善人たるを以て居らざるは勿論、君子たるを以てすら居らざりき。孔子は、

聖人は吾れ得て之れを見るを得ず、君子を見るを得ば斯れ可なり矣。(中略善

人は吾れ得て之れを見ず、恒にするものを見るを得ば斯れ可なり矣。(述而)

といへり。即ち聖人善人は最高の理想なれど、こは不出世にて容易に見らるべからず、又其の内容も瞭解しがたきが故に、模範となすを得ず、故に寧ろ及び易く知り易く學び易きを取らざるべからず、君子の如き、恒にする者の如き是れ也。恒にするものとは、未だ成徳の境には達せざれど、常に道徳を忘れざるもの也。三月仁に違はざる回也(雍也)の如きは既に之れに近し。而して士といひ、成人といひ、君子といふ、以下少しく其の人格の内容を窺ひ見んとす。先づ士とは、

子貢問うて曰はく、如何んか斯れ之れを士といふべき。子曰はく、己れを行ひて耻あり、四方に使して君命を辱しめず、士といふべし矣。(子路)
子路問うて曰はく、如何んか斯れ之れを士といふべき。子曰はく、切ら思ふ、怡たり、士といふべし矣、朋友には切ら思ふ、兄弟には怡ら。 (子路)
等の言、略其の一斑を知るべく、廉耻を重んじ、君國の用に當り、交友間には義を以て親しみ、兄弟相愛するをいふものにして、左に見ゆる荀子中の一節(大戴禮の哀公問五義中にも見ゆ)は更らに明か也。

哀公曰はく、善く如何なれば則ち士と謂ふべき。孔子對へて曰はく、所謂士とは、能く道術を盡さずと雖も、必らず由る所あり、能く善を盡くし、美を盡さずと雖も、必らず處する所あり、是の故に知は多きを務めず、而して其の知る所を審にせんことを務む、行は多きを務めず、而して其の由る所を審にせんことを務む、言は多きを務めず、而して其の謂ふ所を審にせんことを務む。(哀公篇)
即ち士とは、知能道徳の上に於いて未だ完全なるものにあらずと雖も、散漫無秩序ならずして、既に主義精神の立するあり、既に品性で形式に進み、外延的に博

大ならざるも、内容的に充實せるものにして、一言にていへば、孔子の所謂恒にするもの、之れを稱して士といふべきが如し。

次に成人とは、

子路、成人を問ふ。子曰はく、臧武仲の知、公綽の無欲、卞莊子の勇、冉求の藝の如く、之れを文るに禮樂を以てす、以て成人となすべし矣。(憲問)

と見ゆ。臧孫詒の多知なりしことは左傳襄公十三年に見ゆされど、知に過ぎて君を要したる形迹あるを孔子は非難したり(憲問)。孟公綽の無欲は、憲問篇なる此の文の前章に見ゆ。卞莊子の勇は、荀子大略篇及び戰國策等にも出づ。冉求は孔門の逸足、才氣、藝能ありしやに見ゆ。されど、此の四人が知なりし勇なりし無欲なりし藝なりしといふことのみは知らるゝも、何様の知、無欲、勇、藝なりしやは明かならず。要するに成人とは、知識、道徳、勇氣、技能の發達を遂げ、而して狷介獨を善くし、木強自ら持する等のとなく、之れを文飾する所なかるべからず、之れを文飾するには、禮樂てふ社交的審美的の素養を以てするをいふもの也。士と概稱するものよりも、進むこと一等なるやの觀あり。而して文質彬々たるを君

如君子とは何

子と稱する(雍也)より見れば、成人とは君子の別名なるが如く見ゆ。思ふに、君子とは、其の人格其のものに就きていひ、成人とは凡人に對して其の成功せるよりいひ、即ち發展育成して其の人格に達したる其の成迹よりしていふものにや。次ぎに君子に至りては、孔子が子夏に告げて、明かに、

女君子の儒となれ、小人の儒となるなかれ。(雍也)

といひ、讀書的口舌的儒者たらずして、事業的人格的儒者たれと戒めしを主として、理想的人格として之れを解説すること甚だ多し。今其の二三を舉げて、君子てふ人格の内容を檢覈せんとす。先づ

君子は器ならず。(爲政)

といへり。器とは或る一個の役務、或る一個の職業、又は或る一個の目的の爲めに存在せるものなるが故に、器ならずとは其の以上に出づるもの也。即ち君子とは(一)生きたる多方知識を有し、諸力の調和的發達を遂げ、(二)職業以上に超出せるものならざるべからず。此の職業以上に超出するとは、例へば工人たり官吏たるもの、其の業其の職を善くするを以て満足するものは、一の器たるに止まる

のみ、一の人としての人格、一の國民としての知能道德は、此の職業的なるもの、以上に、何人も有せざるべからざる所のものたるなり。次ぎに、

質、文に勝てば則ち野、文、質に勝てば則ち史。文質彬々、然して後君子。(雍也)

といへり。質とは質素、質實等の質にして、文とは文彩、文飾等の文なり。初めの二句は只一般的解説にして、單に、質餘りに多ければ卑俗鄙野となり、文餘りに過ぐれば小説稗史となるといへる也。而し次ぎに、文質彬々、之れを君子となすに至りて、其の質實なるもの、其の文飾なるもの、玆に具體的意義なかるべからず。君子に於ける文とは、前に成人をいへる條に、

之れを文るに禮樂を以てす。(憲問)

とあるに依り、明かに禮樂を指せり。又質とは、

君子、義以て質となし、禮以て之れを行ひ、孫以て之れを出だし、信以て之れを成す。(衛靈公)

の言と對照すれば、義を指せること知るべし。即ち君子とは(三)内に正義を守持し、外に禮樂を以て之れを文飾し、其の中を得るもの是れ也。次ぎに、

君子、博く文を學び、之れを約するに禮を以てす、亦以て畔かざるべし矣。(雍也)といへり。茲に所謂文とは、學而篤の「文を學ぶ」と同じく、「古の遺文」なること諸家の解皆一致せり、即ち書籍なり。されど寧ろ其の意を擴充して、古來蓄積して、當代に至れる社會の文物文化と解するを以て更らに可なりと信ず。即ち君子とは、(四)博く文化を理會し、世に處する上に於いて、禮節を守るものにして、理論的方面と實際的方面との調和、若しくは個人的方面と社會的方面との調和を意味せりとも解し得。此の最後の點につきては、左の一語も亦味ふべし、いはく、

君子矜して争はず、群して黨せず。(衛靈公)

と。即ち(五)個人的には知徳藝能を以て自ら高うするも、同時に社會交友に處する所以を忘れざるもの、是れ亦君子也。又、

君子の道は三。中庸仁者は憂ひず、知者は惑はず、勇者は懼れず。(憲問)

ともいへり。こは孔子の人格の篇にも一言したる如く、知仁勇對稱のときは、仁は情的方面の圓滿なるもの、知は知的方面の充實せるもの、勇は意的方面の完全なるものと解し得るが故に、君子は(六)知情意三方面の十分に發達せるものなり

と見らる。又、

子路、君子を問ふ。子曰はく、己れを修めて以て人を敬す。曰はく、斯くの如きのみか。曰はく、己れを修めて以て人を安んず。曰はく、斯くの如きのみか。

曰はく、己れを修めて以て百姓を安んず、己れを修めて以て百姓を安んずるは

堯舜だも其れ猶ほこれを病めり。(同上)

といへり。之れを要約すれば、修己治人孔子の集大成の條下に論じたる政教一致論の條参照の意に外ならず。即ち

君子とは、(七)修己てふ個人的、獨自的、靜止的方面のみならず、治人てふ社會的、事業的、活動的方面にも成功するものならざるべからずとなす也。修己には、知的、美的、道徳的の修養、即ち知識の豊富と、意志の剛且つ正と、感情の美とを要し、治人には家庭に善く、朋友に善く、政治に善く、外交に善きを要す。此くの如くにして理想の人格即ち君子たるに達したる也。

人の本務は修己治人に在りとなす、人既に此の社會に生れたる以上は、此の社會に寄與し貢獻する所なかるべからず。此の點に於いて、孔子は餘りに狹義に解し、官に仕ふるを以て道を行ふ所以なりとし、自らも之れに焦慮し、人にも之れ

を勸めたり、

邦道あれば貧且つ賤なるは耻也。(泰伯)

の如き此の意なり。されど到る處意を得ず、竟に仕へずして斯文を後に傳ふるに安んじたるが如く、君子とは(八)仕ふると仕へざると知らるゝと知られざるに論なく、學問道德に於いて修養を怠らず、自己の人格を完全にすることを謀り、只己れに在るものを努力し、貧賤富貴の如き、外より來るべき物質的利害は、毫も之れを問ふことなく、一に天命に安んせざるべからずとなせり。

命を知らざれば以て君子となすなき也。(堯曰)

君子三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。(季氏)

君子能なきを病む、人の己れを知らざるを憂ひず。(衛靈公)

君子は道を憂ふ、貧を憂ひず。(同上)

君子はこれを己れに求め、小人はこれを人に求む。(同上)

人知らず、而るを慍らず、亦君子ならずや。(學而)

等の言はこれを言へるもの也。

身分位置に
因る區別

君子の内容は、もとより以上述ぶる所を以て盡きずと雖も、教育上より見て、君子を教化の目的とすべき理想の人格として、而して教授又は訓練によりて、之れに達せしむべきものとして、はゞ其の内容を解剖すれば、以上の序述にして足れりとせんか。

全般人間に對する、教化上共通の理想ありと雖も、身分階級に應じて多少の區別あるを要すとなし、孔子は哀公に對して曰く、

昔者先王學びて大道を齊へ、以て政を觀る。天子は樂を學び、風を辨じ、禮を制し、以て政を行ふ。諸侯は禮を學び、官を辨じ、政、以て事を行ひ、以て天子に尊事す。大夫は徳を學び、義を別ち、行を矜（たが）うし、以て君に事ふ。士は順を學び、言を辨じ、以て志を遂げ、庶人は長に聽き、禁を辨じ、農以て力を行ふ。(大戴禮小辨篇)

此くの如きは、職掌と位置とを世襲する封建制の當年に在りては、亦已むを得ざるの注意ならん。

又、高等教化の目的は、元より文質彬（ま）たる君子に在るは論なきも、其の最も重んずる所は道德と事業とに在りし如く、初等教化に在りても、道德文學兼ね修む

べきとはいへ、寧ろ重きを道徳に措き、道徳に對する餘力を以て學ぶべしとなせり。而して其の所謂道徳も、道徳的知識に非ずして、實踐的道徳なり。而して其の實踐的道徳も、治人安民の如き大なる範圍に對するものにあらずして、日常接近する小なる區域に對してなり。

弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹しみて信、汎く衆を愛し、仁に親しむ。行ひて餘力あれば、則ち以て文を學ぶ。(學而)

是れ也、此の言の初等教化に對していはれたるは、餘力、文を學ぶの説にて明か也。歸する所の目的は道徳と事業とに在りとはいへ、高等なる教育及び修養に在りては、孔子は決して文を輕んずることなかりしを以て也。荀子にいふ、入りては孝、出でては弟、人の小行也。(子道篇)と、亦此の意に近し。

但し、高等教化に在りても、道徳を最も重しとなせるは、

道に志ざし、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。(述而)

の言にても察せらる。藝とは周禮の六藝ならん、但し孔子は恐らくは孔子の言にても察せらる。藝とは周禮の六藝ならん、但し孔子は恐らくは孔子の

道徳を偏重す

於いて禮樂は六藝より區別して之れを用ゐ、藝とは才藝を指せるのみなるが如し。藝の最も輕んぜられしを見るべし。此の點に於いて後世頗る弊をなせり知識を研き活動力を加ふることは、支那に在りては長く教育の第二位に置かれたるが如き、必らずしも獨り孔子を罪すべからざるも、孔子も亦決して其の責を述るゝ能はざる也。

又孔子自身は頗る衛生に注意する所ありしは、鄉黨篇の記する所なるも、教育の目的としては、肉體の發育につきては何等いふ所なく、六藝中の射御は孔子自身にも之れを善くせしが如くなるも、體育の意義に於いて言ふ所なかりし、又知育につきても言ふ所少なかりしは、之れをヘルバルトの教育學に比較すべし。ヘルバルトの教育學が一時我國に盛行したるも、其の儒教と相類する所ありしを以てならんか。ヘ氏の教育學と孔子の教旨と相似たる所あるは、ヘ氏學祖述時代の谷本博士が、其の著實用教育學及び教育學講義速記録に於いて試みし所なり。經典の文字を解するに多少の誤謬ありしと、強いて牽強してヘ氏の學說に對比せんとしたるは、憾とする所なりと雖も、教育家及び教育學者は、其の國の

古典に於いて準據する所を求めざるべからず、而して西洋に於いての古典が希臘羅馬に在るが如く、我が古典といふべきは、支那の經典に外ならずとなせるは著者の双手を擧げて賛する所にして、著者の研究も此の言に激勵せられし所少なからず。

第三章 教授論

文化と教材

孔子は教育の目的を以て、文質彬々若しくは文を學び、禮を以て約し、若しくは君子備たり、若しくは修己治人に在りとなせり。換言すれば、文化を理會し、道徳を實踐し、及び之れを事業に現はすに在り。而して所謂文化なるものは、多くは書籍と禮樂と藝術とに具體され、包蔵集約され、あるが故に、教授は此等のものを以て教材とし、擇ばざるべからざるは論を須たす。詩書禮樂が孔門の教材として採用されしは、當時此等を教科として採用せし今教材と教科と二様の語を用ひたるに注意されんことを望む孔門教育の條參照 習慣よりなりと雖も、一は以上の意義に於いてせるなり。但し禮

と樂とは政治的教化の要具なると共に、且つ其の訓育的意義を有せる爲めに、知識を授くるを目的とする所の教授論の章下に於いては、之れを述べず。

文化及び政治、道徳、其他主要なる知識を包蔵すること最も多きものは書籍なり。孔子は其の必要を教へていはく、

子路、子羔をして費の宰たらしむ。子曰はく、夫の人の子を賊すと。子路曰はく、民人あり、社稷あり、書を讀みて然して後に學びたりと爲さんや。子曰はく、是の故に夫の佞者を惡むと。(先進)

茲に所謂書とは、詩書禮樂の書即ち今の尙書の意にはあらず、一般書籍の義ならん、中庸にも孔子の言として、

文武の政、布いて方策に在り。

といふこと見ゆ、讀書の必要なる所以也。因りて一考するに、子路の言も亦理なきにあらず、實際に當りて得べき經驗的知識は、書籍によりて得るものよりも、實用的にして之れに優ることあれば也。されど政治の如き教育の如き、人を取扱ふものは、他の知識の如く試験的に實驗すべからざるが故に、先づ過去の經驗を

十分に知得するの準備なければ極めて危険也、過去の經驗とは書籍に藏されたる記録に外ならざるが故に、此の意味に於いて、孔子が書籍を尊重するは最も理あり。但し孔門に於ける實際の教育を見るに、決して講書にのみ重きを置きたるにはあらず。後世、支那の教育が、讀書以外に之れなしとするの弊風を生じたるは、大に孔子の真意を誤まりたるものなりとす。

方策即ち當時の書籍は、學問上皆必要なるものなれども、教化上修養上最も主要なるは書即ち尙書なり、其の外には、六藝、詩、禮、樂等教材として用ゐらる。

藝に遊ぶ。(述而)

詩に興り、禮に立ち、樂に成る。(泰伯)

といふものは是れ也。其の中、書籍のみとして獨立するは尙書にして、詩は一の書冊となり居りしなるべきも、樂と結びて用ゐられ、禮も今の周禮又は儀禮の如く、周初の制作の方策に載せられたるものありしに相違なきも、孔門の教育には主として實習を科したるが如し。

尙書の價值につきては、尙書大傳に左の問答あり。

子夏、書を讀み畢る。孔子問うて曰はく、吾子何をか書に於いて爲めし。子夏曰はく、書の事を論ずる、昭々として日月の若し、夫子に受けし所のもの、敢て忘れず、退いて河濟の間、深山の中に窮居するも、壤室蓬戸、瑟琴を弾じ、以て先王の風を歌ひ、人あるも亦之れを樂しみ、人なきも亦之れを樂しみ、上、堯舜の道を見下、三王の義を見、以て死生を忘るべきなり矣と。孔子愀然容を變じて曰はく、子夏、與に書を言ふべし、然りと雖も、其の表を見て未だ其の裏を見ず、其の門を闢ひ、未だ其の中に入らずと。顔回曰はく、何の謂ぞや。孔子曰はく、丘常に心を悉くし志を盡し、以て其の中に入らんとす、前に高岸あり、後に大谿あり、填々正立するのみ、六誓は以て義を見るべく、五誥は以て仁を觀るべく、甫刑は以て戒を觀るべく、洪範は以て慶を觀るべく、禹貢は以て事を觀るべく、臯陶謨は以て治を觀るべく、堯典は以て美を觀るべし。

是れ實際孔子と子夏及顔回との間に交換されたる問答なるや否やを知らずと雖も、書の専門家たる伏生の傳ふる所なるが故に、或は依る所あらんか。要するに孔子は尙書を以て無上の寶典とし、之れにより先王の大道を知り、之れを政治

孔子の教育説

に行ふ所以を會通するものとなせるが如し。

詩の價値は孔子屢之れを語る。先づ

詩三百を誦し之れに授くるに政を以てして達せず、四方に使ひして専ら對ふる能はずんば、多しと雖も亦何をか以て爲さん。子路

といへり。詩は國俗民情を解し、政治の善惡の人心に及ぼす効果を知るものとなさるゝが故に、政治を行ふ上に頗る必要な知識なり、故に之れに授くるに政を以てして達しうべしとなす也。而して又屢左傳の中にて見るが如く、當時の外交的會合には詩中の詩を賦賦するとは作るにあらす諷ふ也を示したるが故に、外交的辭令に熟せんには詩は唯一の料なり、故に善く詩を知るものは、四方に使用するを得べしとなす也。

古昔羅馬に於いて、時世の必要上、教育の目的が修辭にありし如く、當時も列國對時の必要上、外交的辭令は甚だ重んぜられしが如し。士たるの一資格として、四方に使ひして、君命を辱かしめず、士といふべし矣。子路

といへるも是れ也。門人公西赤を推稱して、

赤や、朝に立ちて賓客と言はしむべき也。(公治長)

といへるも是れ也。鄭が晋楚の二強に介在せる一小國を以て、内善く平治し、外能く折衝せるは、子産國政を執りて最も心を盡し、一外交的辭令にも賢能をして熟議を経せしむるものなりとて、孔子特に之れを感嘆して、

命命を爲る辭命を爲るを爲る、裨裨益謀謀思思慮慮慮密密なり、之れを草創し、世叔世叔し人人なりしと見ゆ、之れを討論し、行人行人子羽子羽と外外國國への使使者者を勤勤むるもの之れを修飾し、東里の子産之れを潤色す。(憲問)

といへるが如き是れ也。獨り外交的辭令のみならず、一般に修辭といふことも亦重んぜられしが如し、徳行文學政治と共に、

言語には宰我子貢。(先進)

と並べ言ひしも此の意を窺ひ知るべし。但し後の遊説家の如く博辯宏辭なるを尙ばざりしは、

辭は達して已む矣。(衛靈公)

の言にて知らる。又

詩を學びざれば以て言ふなし、禮を學びざれば以て立つなし。(季氏)
 ともいはる。邢昺の解に、『古へは會同皆詩を賦して意を見す。之れを學ばざれば何を以て言を爲さんや』といひ、又『禮は恭儉莊敬、人禮あれば則ち安く、禮なければ則ち危し。故に之れを學びざれば、則ち以て身を立つるなき也』といへり、詩は交際上國と國とのみならず人と人との必要なものにして、禮は社會に處する所以の要具となせる也。此の點に於いて詩と禮とは共に社交的なるに於いて、其用相關すといふべし。詩は又一面に於いて禮の豫備的知識なりともなざる。禮記に孔子曰はく、詩三百を誦して、以て一獻するに足らず、一獻の禮、以て大饗するに足らず、大饗の禮、以て大旅するに足らず、大旅具はり、以て帝を饗するに足らず、んば、輕しく禮を議するなかれ。(禮器篇)
 とある是れ也。又

小子、何ぞ夫の詩を學ぶなきや、詩は以て興すべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべく、之れを遁うしては父に事へ、之れを遠くしては君に事へ、多く鳥獸草木の名を識る。(陽貨)

子伯魚に謂うて曰はく、女、周南召南を學びたりや、人にして周南召南を爲めずんば、其れ猶ほ正しく牆に面して立つが如くなるか。(同上)

といへり。後章馬融の解に、『周南召南は國風の始め、淑女を得て以て君子に配するを樂しむ、三綱の旨、王教の端、故に人にして爲めずんば、牆に向つて立つが如し』とあり、されば前章の意を併せ見るに、詩は現在の活社會に處する所以を教ふると共に、副貳的の利益として、博物的知識を授けらるゝものとなす也。

教授は文化を理會せしむるに在り、且つ博く學ぶといふことは、孔子自らも之れを勉め、門人にも精厲せしめたる所なれど、雜技小識は寧ろ不可なりとせり。

異端を攻むる斯れ害なるのみ。(爲政)

とは是れ也。此の章につきては、古來頗る説あれど、要するに皆後世の意義を以て異端を解し、揣摩臆測するに過ぎず。邢昺解して、『此の章、人の雜學を禁ず』と云ふは當れり、而るに更らに附加して、『異端とは諸子百家の事を謂ふ』といへるは、誤まれり、既に後世の意義を加へたる也。孔子の當時未だ諸子百家なるものあらず、假りに今の管子及び老子の書は未だ孔子以前に出でざりしとする

も、諸子百家なるもの、中、孔子と同時代以前の人は此の二家のみ、且つ況んや、管仲は孔子之れを稱し、老聃は孔子之れに問へるをや。今存せざる諸子の、孔子以前より之れありしものあるべきは想像さるゝも、孔子之れを排するに、後世の意味の異端を以てするに非ずして、若し排すべきあらば、孔子の意味の異端を以てせる也。孔子教に反對するものを稱して異端といふは、漢儒の墨守より以降のことと屬す。されば此章の所謂異端とは、後世解する程に重き意味あるにあらざる也。孔子は自己の説を一個の學説とし、他を呼びて異端となす程に、小規模小局量にはあらずし。又學派を樹立し、他派を攻撃するが如きは、孔子の言行中に少しも之れを見ざる所なり。若し假りに然りとせば、此の章の言は殆んど價值なく、無意義なるを免れず。何となれば、後世の意義に於ける『異端』には既に邪道又は外道の觀念を含むが故に、異端を攻むるは害のみとは悪しき道に就くは悪し、といふの、極めて平凡無味なるに過ぎざれば也。此の章の結語に『也已』の二字あるは、頗る重きを置きたるを知るべく、孔子の當時、孔子の所謂異端を攻むを以て、一の修學方法となせる思想ありしを察せらるべく、孔子之れ

に對して、斯れ決して益なし、寧ろ唯害なるのみと斷言したるものなり。異端を攻むるを以て一の修學方法となせしとすれば、異端てふ意義は既に明かなるを覺ゆ、邪異の所謂雜學、即ち雜識小技と解するを以て當れりとす。且つ斯く解し得べき根據を有す、公羊傳文公十二年の條に、『斷之焉、他の技なし』とあり、其の何註に、

他技とは奇巧異端なり。

とあり、又漢書の司馬相如傳にある封禪の文中に、周が大道と終始せるを序し、之れを贊稱して、

豈始めを善くし終りを善くせざらん、然して異端なし、由る所を前に慎しみ、教へを後に遺すのみ。

といへるあり、こゝに『異端なし』とは、専心一途といふの意に過ぎず。されば異端を攻むるとは、其の學に専心ならずして、雜識小技にも亘るを以て講學の一家とし、之れを誇りとなせるをいふものにして、孔子は深く之れを戒しめたるなり。此に於いて此の言は始めて價值あるを知る也。

種々の教材あり、之れに加ふるに、時に應じ機に臨みて教ふる所千種萬様なりと雖も、出來らば之れを綜合し之れを歸納して、一個の大原則に融會せしむるに至らざるべからず。此くの如きは集大成の大業を完うせる孔子の如き、精力非凡にして、徹知明敏なる偉人にして始めて能くし得べきも、各知識の連絡さるべきを尙べるは、孔子自ら之れを示して、

子曰はく、賜や、女、予れを以て多く學びて之れを識るものとなすか。對へて曰はく、然り、非か。曰はく、非也、予れ一以て之れを貫く。(衛靈公)

といへるものにて明かなり。貫とは貫統の意なること既に言へり、されば、一貫とは知識の合一にあらざして統一の義なり。此の言特に教授上に於いて適切なるを覺ゆ。

教授に於いて最も必要なるは興味之れに伴ふこと也、興味は努力を生じ、應用を生じ、實行を生ず。故に學を爲すには、必らず之れを好み之れを樂まざるべからずとす。

之れを知るものは、之れを好むものに如かず、之を好むものは、之を樂しむもの

に如かず。(雍也)

君子、食、飽くことを求むるなく、居、安きことを求むるなく、事に敏にして、而して言に慎しみ、有道に就きて正す、學を好むといふべきのみ。(學而)

といへるは是れ也。又之れを逆に、實行應用は興味を生ず、之れを實習し得て興味はいよく加はるとなさる。即ち興味あるが故に應用を生じ、應用あるが故に興味を生じ、此の二者は、相待ち相因果して、以て教授を有効ならしむる者也。

學びて時に之れを習ふ、亦説ばしからずや。(學而)

とは即ち此の意也。孔子は興味と應用との必要を言へども、如何にして應用せしめ、如何にして興味を生せしむべきかにつきては明言する所なし。由りて思ふに、實習によりて愉快を感せしめ、愉快なるが故に實習せしめんとするものゝ如し。

教授に尙ふ所のものは、其の被教育者に入りて、活きたる知識となるに在り、古き死知となるべからず、新事物に對して應用さるべきものならざるべからず。

古來の文化を知るは、古來の文化其の者に價值あるにあらず、之れを現在の活社

會に處する所以を理會するに在り。是れ孔子が詩書禮樂に對して其の教育的價值を説明せしものに於いて、明かに其の意を知るべきもの也。又故きを温ねて新しきを知る、以て師となるべし矣。(爲政)といへる、更らに此の意を明瞭になさる。又孔子が現代の文化に重きを措けるは、

周は二代に鑒み、郁と乎として文なるかな。吾れは周に従はん。(八佾)といへるにても知らる。又中庸に、

子曰はく、中庸今の世に生れ、古の道にか反る、此くの如きものは、い裁其の身に及ばんものなり。

と見ゆ、『古の道に反る』とは、鄭玄は『今王の新政の従ふべきを知らず』と解し、朱子は『反は復也』といふ、即ち反は背反の意にわらずして復歸の義なり、現代に生れて現代の尙ふべき解せず、心を往古に走するものを戒しめたる也。此くの如く明瞭に現代を尊重せる孔子の思想に留心せずして、一に今を忘れて古をのみ憧憬せし、後年の儒者の、甚だ謂はれなきを感せずんばならず。

應用的觀念

觀念は、實行さるべく應用さるべきによりて始めて價值あり。故に教師の教授する所は、己れが實行し應用し得るものならざるべからず。而して被教育者をして單に之れを聞き、之れを記するのみに止まらず、之れを應用し實行せしめざるべからず。

道に聽きて而して塗に説くは、徳の棄也。(陽貨)

古への學者は己れの爲めにす、今の學者は人の爲めにす。(憲問)等の言あり、前者は教ふるものに對する注意にして、後者は學ぶものと教ふるものとの對する戒告たり。荀子に『耳に入り口より出づ』(勸學篇)といひ、口耳の間四寸、焉くんぞ七尺の軀を善くせんやといへると同意なり。邢昺は孔安國の説によりて、後章を解していはく、

古人の學は、則ち履みて之れを行ふ、是れ己れの爲めにする也。今人の學は、空しく能く人の爲めに言説し、己れは行ふ能はず、是れ人の爲めにする也。

と、己れの爲めにするると人の爲めにするとの別は頗る明白也。

教授に在りては、提示又は受領といひ、教育學上の用語たりと提示とと考察と併せ

必要なりとなさる、是れ教育學が教ふる教授の階段なるもの所謂五段教授法は今（受領）と考察と應用との三段階は觀念と相符合すといふべし。を明晰に把持するに必要なるもの

吾れ嘗て終日食はず、終夜寝ねず、以て思ふ、益無し、學ぶに如かざる也。（衛靈公）
學びて思はざれば則ち罔、思うて學ばざれば別ち殆。（爲政）

の言を味はふに、學ぶとは即ち受領に當り、思ふとは考察に當れり。前章は、受領なくして獨り考察あるの無益なるを示し、後章は二者相待ちて始めて完きをいふ。包咸は、後章の『殆』字を解して『精神の疲勞倦殆する』をいふとなせり。朱子の危殆と解せるよりも適切なるを覺ゆ。されば邦人の此の章を訓讀して『あやふし』となすは非にして、『つかる』となさるべからず。即ち受領のみにて考察なければ則ち罔なり、罔とは生きたる理會を得ざるの狀なり、考察のみにて受領なければ則ち殆なり、殆とは定まりたる理會を得ざるの狀なり。韓詩外傳に此れと同じ意義を言へるもの見ゆ。いはく、

子曰はく、學ばずして思ふことを好めば、知ると雖も廣からず、學びて其の身を慢にすれば、學ぶと雖も尊からず、誠を以て立たずんば、立つといへども久しか

らず。（卷六）

と、此の言は應用を尙ふをも合せ言ひ、受領、考察及び應用の三段階を列舉せるに於いて、今の教育學より見て趣味なしとせず。

教授は開發的ならざるべからず、單に注入的のみなるべからず。被教育者をして、既に得たる觀念を應用して更らに新らしき他の觀念を得るべく努力せしめざるべからず、此の努力を缺ぐものは教ふるとも益なしとなさる。

憤せざれば啓せず、排せざれば發せず、一隅を擧げて之れを示し、三隅を以て反せざれば、則ち復せざる也。（述而）

とは、孔子が其の門に於ける實際の教授と相對照して、孔子の教育說中、特に其の教授に關するもの、最も主要なる語なり。憤とは、疑義を生じて百方之れを思索し、其の將に達せんとする一步に及びて、而かも未だ之れを得ず、焦心發憤するをいふものにして、此に至りて始めて一言之れを啓くなり。排とは、已に之れを心に得たるが如くなるも、之れを述べんとすれば、囁言ふ能はず、之れを思ひ之れを苦しむの狀態をいふものにして、此の境に至らざれば、發いて達せしめざる

也。一隅を擧げて之れを教示し世に行はるる論語の書に「擧一隅の下に」而示之の本には此の三字あり他の三隅は學ぶもの自ら之れに反應し努力して、研究考察す敵義始めて明瞭也るものにあらざれば、則ち復教へざるなりとす。普汎的に教授の原則とするこ
とは危険なきにあらねど、當今の教育の如く、只成るべく被教育者の努力を輕減
せんことをのみ計れる所謂軟教育は、寧ろ教育の實甚だ擧らざる所以ならずん
ばならず。但し教授は被教育者の才學發展の程度によりて斟酌する所あるべ
きは勿論にして、孔子も亦、
中人以上は、以て上を語るべく、中人以下は、以て上を語るべからざる也。(雍也)
と注意したりき。

第四章 訓練論

知と行との
關係

訓練の基礎讀書により自ら修養するも亦然りは、被教育者の受領し把持する
觀念が、其の意志によりて行爲と現はるゝに在るが故に、知と行との關係如何は

最初に定むべき重要な問題ならずんばならず。孔子は後世の學者殊に程朱
陸王の如くに、知行の關係を説くこと精ならざるが故に、觀念を整頓することは
如何様に實行に及ぼす所あるやは明瞭ならず。たゞ

學びて時に之れを習ふ。(學而)

の一語を味はふに、學とは知的に屬し、習とは其の字の本義「鳥の數飛ぶなり」
にして、復習といふよりも寧ろ實習といふの當れるを見るが故に、行的に屬し、知
と行とは別ちて之れを言ふものなれば、知のみにては未だ一定不斷の行爲とな
らずして、別に努力を加へて之れを行ふの習慣を養はざるべからずとなせるも
の、如し、然れども完全なる知識、即ち十分明瞭に整頓されたる觀念は、何等の障
礙なく實行に現はるゝは、

知るものは惑はず。(憲問)

の一句、此の意を含めるに似たり。孔子は未だ知行合一と言はざるも、斯くの如
く知と行との親密なる關係を認めたる也。即ち中庸に、
子曰はく、舜は其れ大知なるか。

といへる一章の如き、其の大成を指して大知と稱せるは、明知の直ちに實行に現はるゝとなすの意と見るべく、又同じく中庸に、

子曰はく、人皆予れを知ありといふも、驅りてこれを罟獲陷阱の中に納るればこれを避くるを知るなし、人皆予れを知ありといふも、中庸を擇びて期月守る能はざるなり。

とあるものは、知るものは必らず行ふとの前提を許容し豫想せざれば、此の意義は解し得られず。

知行の前後

知行の關係は斯くの如しとして、被教育者の程度に應じて、之れを前後するの差ありとなさる、但し何れにするも重きを行に措くは勿論にして、前後の關係は決して輕重の關係にあらざることは半記せざるべからず。孔子其の教ふる所を大體に於いて中人以上と中人以下とに二大別し(雍也)、其の材により教ふる方法を異にせしが如く、高等なる教化と、低度の教化とに分ちて訓練を異にしたるが如し。

弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛し、而して仁に親し

み、行ひて餘力あれば、則ち以て文を學ぶ。(學而)

と云へるは低度なる教育法にして、行ひを前にし知を後にしたり。又

君子博く文に學び、之れを約するに禮を以てす。(雍也)

と云ひ、若しくは、

蓋し知らずして之れを作すものあり、我れは是れなき也。多く聞きて其の善なるものを選びて之れに従ふ。(述而)

と云ひ、或は前に挙げし『學びて時に之れを習ふ』といへるが如き、及び孔門の高弟に對する實際を參考するに、高等なる教化に在りては知を前にして行を後にす。左の言も亦此の意を窺ふべく、且つ學は行によりて始めて價值あるをいへるもの。

孔子曰はく、君子三愛あり、知らずんば、以て愛ふなかるべけんや、知りて學ばずんば、愛ふなかるべけんや、學びて行はざる、愛ふなかるべけんや。(韓詩外傳二)孔子は教育の目的を道德に在りとなすが故に、其の教材は總べて訓育的意義を有すとなさる。詩は内政外交の知識を興ふる有用なる教材なると同時に、

教材の訓育的價值
其の一詩書

詩三百、一言以て之れを蔽ふ、曰はく思ひ邪なし。(爲政)

關雎は樂しみて淫せず、哀しみて傷らず。(八佾)

の如き道徳的價値を有す、又書は政治的及歴史的知識を興ふる至高なる經典なりと雖も、亦孔子の言として尙書大傳に擧げたる、

六誓は以て義を觀るべく、五誥は以て仁を觀るべし。

吾れ高宗彤日（高宗の崩御の日）に於いて、徳の報あるの疾きを見る也。

等は、同時に其の道徳的訓典なるをいへり。

禮樂は只玉帛の儀や鐘鼓の律やを教ふるにわらず、之れを内心に反映せしむるによりて、道徳的價値ありとなさる。

禮と云い、禮と云ふ、玉帛をしも云はんや、樂と云ひ、樂と云ふ、鐘鼓をしも云はんや。(陽貨)

とは是れ也。孔子は禮樂を推稱すること太だ至れりと雖も、之れを教育的にいふときは、主として之れを教化行政の要具として論じたるが故に、次篇の一章に之れを述ぶること、し、今禮記の一二章を引用して其教育的價値を見んとす。

禮記に、

禮やは理なり、樂やは節なり。君子、理なければ動かす、節なければ作なさず。詩を能くせざれば、禮に於いて繆（む）なり、樂を能くせざれば、禮に於いて素（そ）なり、徳に測（はか）れば、禮に於いて虚（む）なり。(仲尼燕居篇)

とあり、是れ禮と樂詩をも含むと徳との相交渉し、相因果する關係をいへるものなり。孔子は禮を内心に反映せしむるによりて、其の最高道徳とする所謂仁に達せしむる所以となせるは、

非禮視るなかれ、非禮聽くなかれ、非禮言ふなかれ、非禮動くなかれ。(顔淵)の語と共に、前に詳述したる所也。孔子及び其の思想を發展せしめたる學者に在りては、禮樂は殆んど政教一切の根本たりとす。

教育上禮の必要なるは、人には自然に情慾あるが爲めなり。孔子が禮の訓育的價値を取るは、蓋し其の倫理思想が禁欲主義にわらずして節欲主義なると相願望するもの、禮記の左の言は、此の點に於いて参照すべきものなり。

何をか人の情といふ、喜怒哀懼愛惡欲、七者は學ばずして能くす。何をか人の

義といふ、父は慈、子は孝、兄は良、弟は弟、夫は義、婦は聽、長は惠、幼は順、君は仁、臣は忠、十者は之れを人の義といふ。信を講じ、睦を修む、之れを人の利といふ。争奪相殺す、之れを人の患といふ。故に聖人、人の七情を治め、十義を修め、信を講じ、睦を修め、辭讓を尚び、争奪を去る所以、禮を捨て、何を以て之れを治めん。飲食男女、人の大欲存し、死亡貧苦、人の大惡存す、故に欲惡は心の大端也。人其の心を藏し、測度すべからざる也、美惡心に在り、其の色を見ざる也、一以て之れを窮めんと欲せば、禮を捨て、何を以てせんや。(禮運篇)

又樂は其美的修養の料なると、教授論禮と相關する、教育目的論及び其の有する樂徳孔子集大成の章下の爲めに、訓育的價値の既に十分なると共に、禮記の左の言も亦參照すべし。

凡そ音は人心に生ずるもの也。情中に動く、故に聲に形はる。聲、文を成す、之れを音といふ。是の故に、治世の音は、安以て逸、其の政和す。亂政の音は、怨以て怒、其の政乖く。亡國の音は、哀以て思、其の民困す。聲音の道は、政と通ず。

(樂記)

是れ政教の結果の音樂に現はれたるを説けるものなりと雖も、正しからざる性情が、現はれて正しからざる音樂となるを認むるものなるが故に、其の意は寧ろ正しき音樂が、惹いて正しき性情となり、正しき政治となるを言ふに在るが如し、此の點に於いても、樂は訓育上甚だ緊切なる料たる也。

孔子は正しき意志は強き意志となるを信するもの、如し、思ふに孔子自ら然りし也。孟子に、曾子が孔子より聞きたりとて、子襄に告げて、

吾れ嘗て大勇を夫子に聞けり、自ら反りて縮縮からざれば、禍寬博と雖も、吾れ憚れず、自ら反りて縮からば、千萬人と雖も、吾れ往かん矣。(公孫丑上)

と見ゆ。實際に於いては、正しく弱き意志の人あり、不正なるも強き意志の人あり、意志を強うすると、正しくするとは、別個の訓練を要すと雖も、之れを正しくすることは、之れを強くする所以の一方方法たることは否定し難し。

又訓育は人の品性を完成するものならざるべからず。品性とは何ぞや、種々の意志活動が、統一されて一定の形を取るをいふものにあらずや。孔子は、吾が道、一以て之れを貫ぬく。(里仁)

といへり。衛靈公篇に於ける『一貫』は多識を統一するものなれば、朱子の解する如く、『知を以て言ふ』ものにして、此の章の一貫は『行を以て言ふ』ものと解せられ得。所謂一貫の道は、孔子の集大成の條下に述べし如く、孔子が政教に於ける一大原則を得たるの義なるは勿論なれども、之れを教育的に解釋すれば、一貫とは、知的には統一したる觀念、行的には統一したる意志、即ち品性の完成したるものとして妨げなし。

教育者は躬行實踐を以て示範をなさざるべからず、徒らに口舌を以て訓ふべからずとす。故に、

示範と感化

古は言の出でざる、躬の述ばざるを耻ぢて也。(里仁)

子貢、君子を問ふ。子曰はく、先づ其の事を行ひ、而る後之れに従へ。(爲政)

といへり。此等は一般の人に對して、寡言實行を尙ふべきを教へたるものなれども、之れを教育者の用意と見られざるにもあらず。又、

人能く道を弘む、道人を弘むるにあらず。(衛靈公)

の言も、教育者其の人の感化が即ち訓育にして、教育者たるの任務甚だ重大なる

忠愛と努力

を示すものと解され得。

教育者は被教育者に對して忠愛にして誠實ならざれば、其の訓育は全らし難きをいへり。

之れを愛す、能く勞するなからんや、忠なり、焉くんぞ能く誨ふるなからんや。

(憲問)

とは是れ也。忠愛誠實ならば、之れを教へ之れが爲めに勞せずんば已まざるに至るとなす也。又被教育者の方面にありても、一意専心、進歩遷善の努力なければ、訓育は全からず。

士道に志し、而して惡衣惡食を耻づるものは、未だ與に議するに足らざる也。

(里仁)

譬へば山を爲るが如し、未だ一簣を成さずして、止むは吾が止む也。譬へば平地の如し、一簣を覆へすと雖も、進むは吾が往く也。(子罕)

忠信を主とし、義に徙るは、徳を崇む也。(顔淵)

仁に當りては師に讓らず。(衛靈公)

等の言は皆此の意也。

徳的訓育

訓育には高遠なる理論を用ゐるを要せず、常識を以てすべきのみとなせり。故に又能はざるを責めざる也。中庸に、

子曰はく、道人に遠からず、人の道をなして人に遠きは、以て道とすべからず。中庸故に君子は人を以て人を治む、改めて止む。

とあり、其の鄭註に、「人、罪過あり、君子人道を以て之れを治む、改むれば則ち止めて之れを赦す、責むるに人の能はざる所を以てせず」とあり、又朱解に「蓋し之を責むるに、能く知り能く行ふ所を以てす、其の人に遠ざかりて以て道を爲すを欲するに非ず、張氏の所謂衆人を以て人に望めば、則ち従ひ易き也」とあり、朱解殊に明瞭なるを覺ゆ。孔子が其弟子を訓育するもの、一に皆之れならざるはなきも、左の一例の如きは、最も常識に富めるもの、教訓なるを看取せずんばあらず。

君子三戒あり、少き時、血氣未だ定まらず、之れを戒むる、色に在り。其の壯なるに及びてや、血氣方に剛、之れを戒むる、闘に在り。其の老なるに及びては、血氣

交友の影響

既に衰ふ、之れを戒むる、得_得利也に在り。(季氏)

最後一言すべきは、人の交友間に於ける感化影響は、其の勢力甚だ大なるものあるが故に、訓育に於いて意を此に用ゐざるべからざること也。

己れに如かさるものを友とするなかれ。(學而)

子、子賤を謂ふ、君子なるかな、かくのごとき人、魯に君子者なくんば、斯れ焉くんぞ斯れを取らんや。(公冶長)

三人行けば必らず吾が師あり、其の善なるものを選びて之れに従ひ、其の不善なるものは之れを改む。(述而)

益者三友、損者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とす、益なり矣。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とす、損なり矣。(季氏)

其他友を言ふもの頗る多し、されど朋友の關係は平等にして、師弟の關係は上下なるが故に、少しく異なる所あり。朋友關係に在りては、師が弟子に對する如く權威を以て、飽くまで之れを是正せざるべからざるにはあらず。いはく、

子貢友を問ふ。子曰はく、忠告して之れを善導す、可かれざれば則ち止む、自ら

辱しむるなし。(顔淵)

第五章 女子教育説

女子教育の
可能

孔子は女子につきては特にいふ所多からず、たゞ唯、女子と小人とは養ひ難し、之れを近づければ則ち遜らす、之れを遠ざければ則ち怨む。(陽貨)

の一言のみ。是れ女子教育の甚だ難きをいひ、是れを小人と同列に置きたるも左ればとて女子には教育の可能性なしといふにはあらざるべし。何となれば國語の魯語中に見ゆる如く、孔子盛んに公父文伯の母季氏の知にして禮を知れるを絶稱し、又賢婦人ありて國家興隆に與かるの事實あるを肯定すれば也。周南召南殊に關雎の化を重んずるの意見るべく、又才難しと、其れ然らずや、唐虞の際、斯れより盛んなりとす。婦人あり焉、九人のみ。(秦伯)

女子教育の
目的及び女
子に關する
當代の思想

ともいへり。此の章の大意は、舜は五人を以て天下を治め、武王は十人を以て天下を取る、舜の治や盛んなり、周は此れより尙ほ盛んなりと稱せらるゝに、婦人一人の加はるを除けば、僅に九人のみといへる也。然るに此の「婦人」につきては頗る異論あり、或は文母と云ひ、或は文姜と云ひ、或は是れ「般人」の誤りにして、漢の石經には般人とありといふ(翟灝の四書攷異條考十二)ものあれど、漢の石經なるものが信すべからず、古文般人となせるの證左明かならず、況んや亂臣の臣字は古書之れなかりしとの説根本先生論語講義あれば、婦人一人とは太姒を指せりとして何の不可を見ず。要するに、孔子が此くの如き賢婦人あることを許すは、婦人教育の成功を豫想せしむるものなり。尙書大傳に、

孔子、子張に對へて曰はく、男子三十にして娶り、女は二十にして嫁す、女は二十にして織紉紡績の事、黼黻文章の美に通ず、是くの如くならざれば、則ち、上、以て男姑に孝なるなく、下、以て夫に事へ子を養ふ無き也。(唐傳)

とあり、上代に在りて、女子の社會的位置は、單に男子の附庸たるに過ぎざるを以て、其の教育程度も、亦蓋し此れに止まりしならん。大戴禮に、教化の狀態を形容

したる孔子の言として、

君先づ仁に立てば、則ち大夫は忠、而して士は信、民は敦く、工は璞、商は懋、女は愷、婦は空よ。(王言篇)

と見ゆ。孔廣森の註に、愷は慍、空よは『識らず知らず』といへり、されば、是れ亦婦女子は單に男子に黙従するを以て足れりとするを、寧ろ美德とするもの也。孔子が女子につきて多く言ふ所なきは、女子に關する當代の思想を是認するものと見るべく、現に屢、夫婦男女の別を明言し、且つ女子は小人と一括して養ひ難きものとなし、周の建業に與かる一婦人を除きては、多くの場合に於いて、婦人は愷にして空よたるべきものとなせるが如き、之れを證すべければ、茲に、其の所謂夫婦男女の別とは何如と推究する爲めに、及び孔子が是認する所の何如を窺知する爲めに、上世以來の女子に關する思想習慣及び其の教育を一顧するの要あり。以下舉ぐる所の書、孔子以後に出でたるものも多けれど、其の思想は上世以來傳へ來れるものと信すべきものを掲ぐ。

尙書の牧誓に武王の言として、

女子は男子の附庸

王曰はく、古人言へるあり、いはく、牝雞晨するなしと、牝雞の晨するは、是れ家の索也。

とあり、女子は、男子の事業に與かるべからず、其の意見を發言することすら能はざるものとなされ、全然男子の附庸たるべきもの也。大戴禮に、女は如也、子は華也、女子とは、男子の教の如くして、其の義理を長ずるものを言ふ也。故に之れを婦人といふ、婦人とは人に伏するもの也。是の故に専ら制するの義なくして、三従の道あり、家に在りては父に従ひ、人に適きては夫に従ひ、夫死しては子に従ふ、敢て自ら遂ぐる所なき也。(本命篇)と見ゆ、同音同義は上代少なからざれど、又同時に、近き音の字を以て、其の意義を牽強せんとする幼稚なる説明も亦少なからず、以上の如きは其の一例なれども、要するに其の説明は後世的なりとするも、女子が男子に附屬するものなりとの思想は上世的なるを知らる、儀禮及び禮記にも亦之れを言ふ。いはく、婦人は、三従の義ありて、專用の道なし。故に未だ嫁せざる時は父に従ひ、既に嫁すれば夫に従ひ、夫死すれば子に従ふ。故に父は子の天也。夫は妻の天

也。(儀禮喪服篇)

婦人は人に従ふもの也、幼にして父兄に従ひ、嫁しては夫に従ひ、夫死しては子に従ふ。夫やは夫也、夫やは知を以て人を帥ふるもの也。(禮記郊特牲篇)と、斯かる憐れむべき社會的位置に満足せざるべからざるものなるを以て、其の社會的職能は、極めて小なる一家の範圍内に局限すべきものたり。禮記に、女を嫁するとき、其の親が先方に告ぐる禮の辭令として、

女を天子に納るゝには、百姓に備ふと曰ひ、國君に於いては、酒漿に備ふと曰ひ、大夫に於いては、掃灑に備ふと曰ふ。(曲禮下)

とあり、是れ元と謙辭なるべしと雖も、其の由りて來る所を見れば、女子に關する思想を知るべし。『百姓に備ふ』とは、鄭註に『姓の言たる生也、天子には、皇后以下百二十人、子姓を廣うする也』とあり、されば、子を生むの道具に差上げますといふが如き意也。詩經に在る魯斯の詩は、婦人の子多きことをたゞへたるにて、女子の第一の天職は子孫を擧げて其の姓の族を廣うするに在るが如し。『酒漿に備ふ』と『掃灑に備ふ』とは別に解釋するまでもなし。又

其の社會的職能

男女内外章の別

令は閨門を出でず、事は饋食の間に在り矣。(大戴禮本命) 是の月季春や、后妃齋戒して親ら東郷し、躬ら桑し、婦女に禁じて觀するなからしめ、婦女とは宮中の世婦又は諸臣の妻なり 婦使婦使とは縫紉の事を省き、以て蠶事を勸む。(禮記月令)

婦順とは、舅姑に順ひ、室人に和し、而して後、夫に當り、以て絲布帛の事を成し、以て審かに委積蓋藏を守る。(同上昏義)

中春、后に詔し、外内の命婦を帥る、始めて北郊に蠶し、以て祭服を爲る。(周禮内宰)

以上の言を併せ考ふるに、女子の定められたる職は、子を産むこと、饋食を作り及び供すること、裁縫、蠶絲、其他家庭の雜役に服するに過ぎざるもの也。

女子の社會的位置及び其の職能が斯くの如きに過ぎざるが故に、所謂男女の別なるものは、明かなり。第一内外の別なり。禮記に、

男は内を言はず、女は外を言はず。(内則)

とあり、女子は社會的知識なきものなるが故に、一切外事と交渉するの權なきも

の也。后妃が國王の政治に對し、妻妾が其の夫の業務に對し、容喙するが如きことあるに至れば、遂に秩序を紊り、事宜を失するに至るとなさる。管子に「婦、人事を言へば、則ち賞罰信ならず。男女別なければ、則ち民廉耻なし。」(權修篇)

といへるもの是也。

第二に男女の別は尊卑なり。女子は、男子の附庸として、之れに従ふを以て足れりとするが故に、既にをのづから尊卑の別あり。列子に榮啓期行なるものが孔子に告げて、

男女の別、男は尊く、女は卑し、故に男を以て貴となす。(天瑞篇)といひしこと見ゆ。

第三には、易に於いて見らるべき乾坤陰陽の別なり。易の繫辭傳に、

乾道は男を成し、坤道は女を成す。(上傳)とあり、されば乾坤陰陽の對待的關係は、移して之れを男女の別に用ふべし、即ち健順剛柔、内外等の別生ずる也。

對待的關係
と内外尊卑
の意義

陰は美ありと雖も、之れを含みて王事に従ひ、敢て成さざる也。地道なり、妻道なり、臣道なり。(文言傳)

柔順貞しきに利し。(坤卦の象傳)

女は位を内に正しくし、男は位を外に正しくす。男女正しきは天地の大義なり。(家人卦の象傳)

婦人貞しきは吉、一人也一人とは一人也に従ひて終る也。夫子男子なりは義を制す、婦に従ふは凶なり。(恒卦の象傳)

等の意、以て見るべし。但し茲に注意すべきは、乾坤陰陽は同等なる對待的關係にして、貴賤尊卑の別なきこと也。之れを天地に配すれば、其の位置に於いては卑高の差ありとも、其の職能よりすれば、共に其の一を缺くべからず、孰れを以て他の一よりも尙ふべしとはなされざる也。而して乾坤は、即ち男女なるが故に、男女間にも尊卑の別を設くる能はざるが如し、現に易は前に擧げし如く、「女は位を内に正しうし、男は位を外に正しうす」と云ひ、明瞭に其の畛域を設けたるなり、内外の別は決して尊卑の別にあらず。故に、

男女睽くわいいて、而して其の志通ずる也。(家人卦象傳)

と云ひ、男女各相背いて、其の方塗、任務及び性向を異にする所以が、即ち兩者其の志の通ずる所以なりとし、共に其の分たれたる權義を守るべきことをいへり。恰も分業には尊卑の別なく、之れを綜合して生産を完うするが如き也。更らに例すれば、宰相尊くして、農夫卑しむべきにあらす、一は政治でふ一の分業に當り、他は農産でふ一の分業に當るのみ、而して各其の與えられたる分業に熱心なるは、共に國家に貢獻する所大なる所以にして、而して各、分業を守り、其の方塗を異にするだけ、其れだけ其の志は相通じて、一個共通の目的に匯會すべき理なり。故に易は人道の上より、又其の純理觀よりして、男女に尊卑の別なく、唯内外分權を認むるものなれど、之れを人事に下し、社會の上より見て、乾坤が師弟主從等の道を標識する如く、茲に始めて宇宙的對待は社會的尊卑の別を生ずるに至れる也。主從なるもの、詮すれば元と一の對待的分業に過ぎずと雖も、社會を維持する上に於いて秩序の必要上、之れに尊卑の別を設くるが如き也。されば易は男女の分業的同權を認むれども、社會的又は政治的同權を認めず、女は男に順ふべきものとし、

淫亂を塞ぎ
争鬭を防ぐ

さものとし、

陰陽に疑はしければ、必らず戰ふ。(文言傳)
と戒めたる也。再言すれば、男女の尊卑とは、其の本質的職能よりいふにあらすして、社會的便宜より設けたる別なりとす。

第四に、男女の別を嚴にするは、淫亂を塞ぎ、争鬭を防ぎ、以て社會の安寧を保持する所以なりとす。古典に、男女につきていふもの、女子をして其の夫たる一人を終生守らしめ、一に姦淫を防ぐを以て主とせるもの甚だ多し。今其の二三を擧げんに、

男女は坐を雜へず、椀枷を同じくせず、巾櫛を同じくせず、嫂叔は通問せず。中略已に據して反れば、兄弟も與に席を同じくして坐せず、與に器を同じくして食せず。(禮記曲禮上)

寡婦の子は、見睽あるに非ざれば、與に友とならず。(同上)

道路、男子は右よりし、女子は左よりし、車は中央よりす。(同王制)

夫在らざるときは、枕簟、篔簹、席、櫛、器を歛めて之れを藏す。(同内則)

七年、男女席を同じくせず、食を共にせず。(同上)

姦淫を防ぐこと至れりといふべし。女子をして其の夫以外に自由に交際せしめば、淫情を選しくし、其の極竟に禽獸の如く、數牡一牝を争ふに至り、社會の安寧の保たれざるべきを恐るゝ也。故に曰はく、

夫れ唯禽獸禮なし、故に父子聚麀す。是の故に、聖人作爲して以て人を教へ、人をして以て禮ありて、自ら禽獸に別つを知らしむ。(禮記曲禮上)

と。又男女の別を嚴にするは、争鬪を防ぐが爲めに、姦淫を塞ぐに在りと雖も、亦姓氏を亂しめざる爲めの用意もありたるが如し。支那の古代に在りては他國に於いてせし如く、女系を尙びしやに想像さるゝことなきにあらねど、有史以來既に男系を尊ぶことゝなれるが如し。而して其の姓氏の紊亂せざること、其の姓の族を繁榮ならしむることには頗る注意せしが如し。前に挙げし『女を天子に納るゝには、百姓に備ふと曰ふ』の例にても知らるべく、又

妾を買ひ、其の姓を知らざるときは、即ち之れを下す。(禮記曲禮上)
にても、姓を分つことの必要視されしを想ひ得べきか。

大要以上の如き意義を以て、男女の別は立てらるゝが故に、其の別の峻嚴なるに従ひ、其の所期の効果は擧げらるべき也、即ち一言にて言へば、社會の秩序は保たれ、益、安寧を享受し得べき也。故にいふ、

男女別あり、然うして後、父子親む。然うして後、養生し、然うして後、禮作る。禮作り、然うして後、萬物安し。別なく義なきは禽獸也。(禮記郊特牲)

男女別あり、而うして後、夫婦義あり。夫婦義あり、而うして後、父子親あり。父子親あり、而うして後、君臣正あり。故に曰はく、昏禮は禮の本也。(同昏義)

詩經は最も男女の別をいへるもの也、而して開卷第一關雎の詩は、孔子の毎に其の徳を稱するものなり、此の章につきて、小序に其の意を解していはく、

關雎は后妃の徳なり、風の始め也、天下を風し、而して夫婦を正す所以なり。故に之れを郷人に用ゐ、之れを邦國に用う。

と、又其の毛傳にいふ、

所謂夫婦別あれば父子親しみ、父子親しめば、則ち君臣敬す、君臣敬すれば、則ち朝廷正し、朝廷正しければ、則ち王徳成るとは是れ也。

と、男女別あるの關する所亦大且つ廣しといふべし。而して男女の別は、やがて婦徳及び婦教と稱する特殊の徳教を生ず。女子は男子と相並びて社會の一半を構成するもの、婦徳成り、婦教擧るは、一國の教化に關係する所極めて大なり。故に男女の別は、其の効遂に所謂『王化成る』にまで至る也。

婦徳の第一は貞操なり。其の意は、其の分義を正しくし、終生一夫を守ることにて、是れ上來述べし所にて明か也。易に

婦人貞しきは吉、一に従ひて終る也。(恒の象傳)

牝馬の貞に利あり。(坤の卦辭)

とある是れ也。第二には順也。能く柔を守り、我執に固せずして、人に従ふこと也。易に

坤道は其れ順乎。(繫辭上傳)

柔順貞しきに利し。(坤の象傳)

女の壯なるなり、女を取るに用ゐるなかれ。(姤の卦辭)
とある是れ也。又孟子にも

順を以て正となすは、妾婦の道也。(滕文公下)

とも見ゆ。第三には信なり。信とは人に事へて二心なきこと也。

上略人に事ふるを信にする也、信は婦徳なり、一たび之れに與して、齊しく身を

終るまで改めず。(禮記郊特牲)

自ら媒するの女は、醜にして信ならず。(管子形勢篇)

とあるもの是れ也。第四には敬也。敬とは人に事へて其の全を注ぐこと也。

女を嫁するとき父母之れを送るの辭にいはいはく、

父之れを送り、之れに命じて曰はく、之れを戒めよ、之れを敬せよ、夙夜命に違ふ

ことなかれと。母は衿を施こし、帨を結びて曰はく、之れを勉めよ、之れを敬せ

よ、夙夜宮事に違ふことなかれ。(孟子滕文公上。儀禮士昏禮)

とあるは是れ也。第五には嫉妬せざることも也。嫉妬を戒しむるは情を矯むるの嫌あれども、支那古來の道徳は情を矯むるもの頗る多く、且つ一夫多妻例へば禮記昏義に依れば、『古へは天子は、后、六宮、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻』とあり、一と枕席に侍するものならねども、亦盛んならずや。又普通人も蓄妾の

習慣ありしは、前に擧げし「妾を買ふ」云々の例にても明かなり(の當時にありては、家を齊ふるに於いて、女子に嫉妬せざることを強ふるは、最も然るべき所ならん。詩經に此の意を諳へるもの多し。例へば開卷先づ、樛木、螽斯、桃夭の三章之れを言ふに接す。其の詩意にいはいはく、

樛木は、后妃下に逮ふなり。言ふは能く下に逮びて、嫉妬の心なし。(樛木詩序)

妬忌せざれば、則ち子孫多き也。(螽斯同上)

妬忌せざれば、則ち男女以て正し。(桃夭同上)

以上、女子の社會的位置、其の職能、男女の別の意義、及び所謂婦徳なるものを略述したれば、女子をして、當時の社會が要求する所の女子たらしむる所以、即ち所謂婦教なるもの、何如は、亦知るべき也。

先づ古來女子は外出せざるものなるが故、家庭教師ありしが如し。宮中にては之れを九嬪といへり、

九嬪、婦學の法を掌り、以て九御に、婦徳、婦言、婦容、婦功を教ふ。(周禮家宰)

是れ也。又女師なるものあり、左の記事に依れば、其の殷代よりこれありしこと

男子も亦女師たり得ること此二件伊尹が女師及び女師は其の身分甚だ卑しかりしこと、包人となりしにて知らる又の三點は頗る注意すべきものなり。古昔、希臘に於いて、家庭教師が奴隸なりし習慣も連想せらるるといふべく、上代に於ける教育殊に支那上代に於ける女子教育の、太だ重んぜられざりしは察せらる。

伊摯は有莘の女の私臣なり、親ら包人となる。(墨子尙賢篇中)

昔し、伊尹、莘氏の女師となり、僕使されて包人となる。(同上、下)

又師氏といふものあり、詩經の葛覃に、

言に師氏に告げ、言に告げ言に歸る。

とあり、其の詩序に、

葛覃は后妃の本也。后妃父母の家に在りしとき、則ち女功の事に志ざし、躬節用を儉にし、澣濯の衣を服し、師傳を尊敬す。則ち以て父母に歸安すべく、天下を化するに婦道を以てする也。

とあり、又、其の毛傳に、

古へは、女師教ふるに婦徳、婦言、婦容、婦功を以てす。

とある是れ也。又姆といふものあり、此れは普通の家にもありしと見へ、姆は其の教育したる女子の婚禮に立會ふもの也。

姆、綏を授く、姆辭して曰はく、未だ教へず、與に禮を爲すに足らざる也。(儀禮士昏禮)

と見ゆ。此等は皆婦教を司るもの也。

其の二婦教の科目

詩經の采蘋の序に、

此れ能く法度に循ふを言ふもの。今既に嫁して大夫の妻となり、能く其の女たりし時、學びし所觀し所の事に循ひて、以て法度と爲す。

とあり、其の女たりしときに教ふる所のは、即ち周禮に九嬪が九御に教ふる所の婦德、婦言、婦容、婦功にして、是れ葛覃の毛傳にも引き又禮記の昏儀にも、

古へは、婦人、嫁に先だつ三月、祖廟未だ毀たず、公宮に教ふ、祖廟既に毀たるれば宗室に教ふ、教ふるに婦德、婦言、婦容、婦功を以てし、教へ成れば之れを祭る。

といへるものと同じ。此の四科の内容につきては、經典之れを説明せるものなきも、鄭玄の周禮の註に、

婦德は貞順をいひ、婦言は辭令をいひ、婦容 婉婉をいひ、婦功は絲枲をいふ。

といへるもの其要を得。細言すれば、婦德とは前に述べたる貞操、柔順、信敬及び嫉妬せざることにして、婦言と婦容とは特に定むべき目あるべからず、單に婦人に適當なる辭令言語、及容姿修飾にして、婦功とは女子の社會的職能として前に挙げたる裁縫、削烹、組紉、蠶絲、洒掃等をいふものなり。

而して九嬪の之れを教ふるは宮廷の事にして、儀禮にいふ所は、諸侯同族の女嫁せんとする前の事なるが、普通良家の子女にありては、前に云へる姆が之れに教へたる也。姆とは鄭玄のいへる

婦人年五十、子無ければ出で、復嫁せず、能く婦道を以て人に教ふるもの。(儀禮士昏禮の註)

蓋し依る所あらん。婦道に於いて世途の經驗を積めるものたるなり。其の教ふる所は禮記に出づ、

女子十年、出でず、姆、婉婉聽從を教へ、麻枲を執り、絲繭織紉組紉を治め、以て女事を學ぶ。(内則)

是れ也。婉は婦言に當り、婉は婦容に當り、聽従は婦徳に當り、麻衣以下は婦功に當る。科目は大體に於いて宮廷諸侯と相同じきも、婦功の事が、此れ寧ろ彼れより多かりしならん。此くの如き婦教の科目は、女子の社會的職能を教へ、又當時の婦徳とする所を進むる所以なりしを知る也。

以上に於いて女子に關する當時の思想を、はゞ領し得たりと信ず。少しく詳に過ぎ、本書の題意を失するに似たるも、是れ孔子も亦是認せるものと思爲するが故に、而して、こは當今に於いても女子教育に於いて参考すべきもの甚だ多きを認むるが故に、而して著者自ら之れを草するに興味を覺えしが故に、竟に又煩を讀者に強うるに至れり、請ふ恕焉。

孔子も學ばざれば道を知り玉はず、宋儒は只徳を以て天下を治むる事斗を會得して道といふ物を不存是によりて孔子の好學との玉ひ博く學び玉へる事其解不明白或は謙詞といひ或は學者を勉む語杯まざらかし被置候也

(徂徠先生答問書下)

第五篇 孔子の政教論

第一章 政教概論

第三篇に入らんとするに當り、一言し置きたる如く、本篇は元と教化行政論と題せんとせしを改めたるものにして、政教全體に亘りての孔子の説にあらず。廣き意味に於ける教化行政即ち教化に關係ある政治、強いて語を爲せば政治的教化ともいふべきやの意なり。

君にして師、師にして君、修己と治人とは二にして一、一にして二、聖人中心主義を以て國家を組織したる支那古來の思想に在りては、政教一致の觀念は明かに看取せらる。元首は權力の根本なるも、支那に在りては寧ろ道德教化の根源なり。孔子は政教一致を説くこと甚だ多からず、其の説の精なるは、中庸を経て、孟子の出づるを待たざるべからず、大學の書は孔子の遺書にあらざるべきも、政教一致を説くこと頗る至れり。されど孔子が此の思想を有せしことは、固よりいふまでもなし。

孔子は、政治とは其の殆ど全體が教化なりとなせるが如し、故に『治むる』の代りに『道する』なる動詞を用うることあり。

千乗の國を道する。(學而)

之れに道するに政を以てし、中略之れに道するに徳を以てす。(爲政)

の如きは是れ也。馬融は解して『道するとは之れが政教を爲すを謂ふ』といへり、政治するとは道を行ふことにして、道を行ふは教化することなれば、政教は即ち道に於いて一致する也。其の所謂道とは、既に解説したる所の如し。

政は教なり、而かも孔子は之れを全稱的に肯定して、教ふることも亦政治するなりと云はんとするものゝ如し。

或るひと孔子に謂うて曰はく、子奚ぞ政を爲さざる。子曰はく、書に云ふ、孝乎惟れ孝、兄弟に友に、有政に施すと、是れ亦政を爲すなり、奚ぞ其れ政を爲すと爲さんや。(爲政)

此れは思ふに一時の戯言なるべしと雖も、此の文意より考察するに、教ふるは直ちに政治するにはあらざれど、教ふるとは人に善良なる感化を興ふること也、政

の目的も亦善良の教化に在るが故に、必らずしも有權的政令を以てのみ政治と稱するにあらず、即ち此の意義に於いて教も亦政なりといへる也。政教一致を主持すること篤しといふべし。

孔子は毎に徳治を稱道せり、而して徳治とは主として元首及び爲政者の道德的感化をいふものなれば、徳治とは即ち一種の教化なり、故に曰はく政は正なりと。

季康子政を孔子に問ふ、孔子對へて曰はく、政は正なり、子帥ふるに正を以て教からは、敢て正しからざらんや。(顔淵)

とは是れ也。政の目的は民を正しくする在りとすれば、教化の目的も亦然るが故に、民を正しくするといふの點に於いて、政教は一致せる也。又

景公政を孔子に問ふ。孔子對へて曰はく、君、君たり、臣、臣たり、父、父たり、子、子たり。(同上)

公曰はく、敢て問ふ、政を爲すこと之れを如何せん。孔子對へて曰はく、夫婦は別、父子は親、君臣は義、三者正しければ、則ち庶民之れに従ふ矣。(大戴禮、哀公問

於孔子篇

等の言よりすれば、廣き意義に於ける政は、教と殆んど同様なるが如し。但し狭き意義に於いて、政と刑と合し、徳禮などの教化的のものと別様にして説けることあり、

之れに道するに政を以てし、之れを齊しうするに刑を以てすれば、民免れて耻なし。之れに道するに徳を以てし、之れを齊しうするに禮を以てすれば、耻ぢ且つ格るあり。(爲政)

子曰はく、夫れ民は之れに教ふるに徳を以てし、之れを齊しうするに禮を以てすれば、則ち民格心あり、之れに教ふるに政を以てし、之れを齊しうするに刑を以てすれば、則ち民遜心あり。(禮記緇衣篇)

の如き是れ也。されば民に臨むに政刑徳禮の四術あるも、之を治むるは之れに道する、又之れを教ふるもの前の言は之れを治むるといふ代りに「道する」の語を以てし、治道教三字は殆んど同義なる味ふべしなるが故に、徳治と禮治との教化を以て民に臨むの最も可なりとせるを見る也。依然として政教一致の見を失はず。但し政と教とを別

義に解するとき、政は寧ろ教の手段にして、教は政よりも重く且つ廣しとなさるゝことあり。

政正しからざれば、則ち教ふべからざる也。(大戴禮、子張問入官篇)の一語大に味はふべきものあり。

政教一致の見地より、政治は一種の社會教育にして、此の教育に於いて、其の主體たるものは君なり、其客體たるものは民なるが如き觀をなせることあり。孔子が曾子に教へし言に、

國馬ありと雖も、教へざれば服せず、以て千里を取るべからず。博地衆民と雖も、道を以て治めざれば、以て霸王たるべからず。是の故に、昔は明王、内、七教を修め、外、三至を行ふ。(大戴禮王言篇)

とあり、又禮記に、

子曰はく、愛を立つるは親より始まる、民に睦を教ふる也、教を立つるは長より始まる、民に順を教ふる也、教ふるに慈睦を以てし、而して民親あるを貴ぶ、教ふるに長を敬するを以てして、而して民命を用うるを貴ぶ、孝以て親に事へ、順以

て命を聴く、これを天下に錯きて行はれざる所なし。(祭儀)
又孝經に、

子曰はく、君子の教ふるに孝を以てする、室ごとに至りて日ごとに之れを見るにあらざる也、教ふるに孝を以てするは、天下の人の父たるものを敬する所以也。(廣至徳章)

といへるものゝ如き、皆多少社會教育的に觀察せらる。社會教育とは、其主體が一個人にして、其の客體が社會てふ一の團體を稱していへるものなれば也。

政教一致の歸著點は、言ふまでもなく一に道徳に在り、是れ前に挙げし二三の例にても知らる、左の言の如きは更らに適切なるを覺ゆ。

孔子曰はく、上、老を敬すれば、則ち下、益、孝、上、齒に順なれば、則ち下、益、悌、上、施を樂しめば、則ち下、益、諒、上、賢に親しめば、則ち下、友を擇ぶ、上、徳を好めば、則ち下、隱さず、上、貪を惡めば、則ち下、争ふことを耻づ、上、果なるに強ければ、則ち下、廉、耻、民皆別あれば、則ち政、勞せず、此れを七教といふ、七教は民を治むるの本なり、教定まれば、則ち民正し矣。(大戴禮王言)

政教の目的
及効果

此の點に於いて近世國家の政治思想、殊に教化行政思想とは其の目的に於いて明白に差別あり、是れ必らずしも孔子獨創の見ならず、實に古來の思想なりと雖も、孔教を奉せる後世の支那をして、遂に誤まらしめたるも亦此に在り。即ち近世の國家に在りては、國家を組織する個人の身體、知識及び道徳を並び進め、其の活動力を盛んらしむるを以て國家に利ありとなし、之れを以て教化行政の目的となすと雖も、孔子に在りては然らず、教化行政とは、必らずしも國民心身の開進と強健とを希圖するものにあらずして、一に道徳を進むるに在り、而かも其の道徳は、被治者を或る模型に入れて、治者をして治め易からしめんとするに在るが如し。孔子が教化の極致として、

君先づ仁に立てば、則ち大夫は忠、而して士は信、民は教、工は璞、商は懋、女は儻、婦は空。(大戴禮王言篇)

といへるもの、此の消息を漏らせるものに非ずや、即ち他國との競争に打勝つべき活潑なる國民を作るを希はずして、現代の王政に心従する溫柔なる國民たらしむるを願ふのみ。近世國家の教化行政に在りては、終局の目的は勿論國家に

在りと雖も、直接の目的は、國民個人の心身發達に在り、即ち積極的なり、活動的なり、孔子に在りては然らず、寧ろ消極的なり、平靜的なり。孔子が

天下道あれば、禮樂征伐、天子より出づ。中略天下道あれば、則ち庶人議せず。

(季氏)

といへる如く、全く當代の政治に甘んじて、一人も之れを議するものなきを理想とする也。孔子の思想に在りては、未だ太甚しきに至らずと雖も、後世の政治家をして、遂に國民を驅りて、治者に全く都合よき模型に入れんことを是れ謀らしむるに至れり。是れ元と革命の起るを豫防するの政策よりなりと雖も、此の如き政策の根原は、遠く上代より孔子に至り、更らに其の後發展せる教化行政の思想に職由せずんばならず。又近世國家に在りては、之れを組織する個人の多方的なるを以て繁榮する所以なりとなせども、孔子に在りては寧ろ一樣ならんを希望せり。

之れを齊しうするに禮を以てす。(爲政)

といへる、『齊しうする』とは、民人が齊諧し調和するの意味もこれなきにはあ

國民の思想
形式を一樣
にせんとす

らざるべしとはいへども、左の語に於いて、

國を有し、家を有するものは、寡なきを患へず、均しからざるを患ふ。(季氏)

といふに至りては、前の齊も寧ろ調和よりも均一といふの意に重きを措きたること推測せらる。是れ國民の思想及び形式を統一して之れを一樣の模型に入れんとするの意に非ざるか。禮なるものは此の意義に於いて最も必要なる具なり、例へば、

子思曰はく、先王の禮を制するや、之れに過ぎたるものは、俯して之れに就き、至らざるものは、跂して之れに及ぼす。(禮記檀弓上)

の如き、禮とは一種の模型なるを示すものならざるか。されば所謂良民なるものは、一樣にさるべく教化されたるものなり、劉向の所謂孔子三朝記、即ち大戴禮千乘篇に、孔子、哀公に答へて、

夫れ、政以て百姓に教へ、百姓齊しうするに嘉善を以てす、故に蠱佞生せず、此れ之れを良民と謂ふ。

といへる如き、孔子が政教の理想とする所を窺ふに足るべし。

調和といふこと、均一といふこと、は相似て實は大に非なり。社會の民人が相調和することによりて、社會は維持せらるゝと雖も、其の各分子が思想形式に於いて一様なることは、却つて社會の力を弱くする所以ならずんばならず。孔子が人に於いては、君子の器ならずして多方的の趣味と知識とを勸めながら、社會に於ては、餘りに調和に重きを措きて、此の點に著眼せざりしは眞に惜むべく道徳を教化の唯一の目的となせるものよりも、後世を誤らしめたもの寧ろ大ならん。

されば、禮といひ、義といひ、信といひ、教化として上より下に發動するものは、下をして上に服せしめ、上をして下を使ひ易からしむる所以なりとなさる。

上、禮を好めば、則ち民使ひ易き也。(憲問)

上、禮を好めば、則ち民敢て敬せざるなし。上、義を好めば、則ち民敢て服せざるなし。上、信を好めば、則ち民敢て情を用ひざるなし。(子路)

習はざれば、則ち民使ふべからざる也。(大戴禮子張問入官篇孔子の言)

等といふ。如何に當時の庶民は、文字的教育より度外さるとはいひながら、『使

ひ易きなり』とは、餘りに露骨の言ならずや。政教の目的は知るべきのみ。

既に使ひ易し、故に其の効果は之れを征戰に用うべき也。征戰に用うべしとは、當今の如く、列強と生存競争の力を較する爲めに、國民全體の知力體力を進歩せしむる結果をいふにあらずして、唯、君長に服従するの最も効果あるは征戰なれば也。

善人、民を教ふる七年、亦以て戎に即くべし矣。(子路)

教へざるの民を以て戰ふ、是れ之れを樂つるといふ。(同上)

とは是れ也。又教化の一個の目的は、民をして相争はしめざるに在りとす。

訟を聽く、我れ猶ほ人のごとき也、必らずや訟なからしめん乎。(顔淵)

思ふに、是れ恐らくは孔子が司寇となりしとき、又は、たらんとせしときの言ならんか。

政教の一致は政治と道徳との一致を意味す、即ち修己と治人との一致を意味す、遂に教化とは、爲政者其の人の道徳其のものたるに過ぎずと極言せんとするに至れり、是れ古今を通じて支那の爲政家を律する典則となるもの也。大戴

禮に孔子が、

躬行は政の始め也。(子張門入官篇)

といへること見ゆ。されど孔子は、躬行は政の始めと言はんよりも、寧ろ政の全體となさんとするものゝ如し。

君子親に篤ければ、則ち民、仁に興り、故舊遺れざれば、民偷まず。(泰伯)

季康子盜を患ひ、孔子に問ふ。孔子對へて曰はく、苟くも子の欲せざる、之れを賞すと雖も竊まず。(顔淵)

季康子政を孔子に問うて曰はく、無道を殺して、有道に就くが如きは、何如。孔子對へて曰はく、子、政を爲す、焉くんぞ、殺を用ゐん、子、善を欲すれば、民善なり。

(同上)

甚しきは即ち、

其の身正しければ、令せずして行はれ、其の身正しからざれば、令すと雖も從はず。(子路)

苟くも其の身を正しくすれば、政に従ふに於いて何が有らん。其の身を正す

能はずんば、人を正すを如何にせん。(同上)

とまでいふに至れり。是れ盤江博士の所謂務本主義なれども、博士は家人卦の象傳『父、父たり、子、子たり、兄、兄たり、弟、弟たり、夫、夫たり、婦、婦たり、而して家道正し、象を正しうして、而して天下定まる矣』をも旁證として、擧げたるを見れば、其の所謂務本主義とは、極めて廣汎ある意義なり。國の本は家なるが故に、家道正しければ、天下定まるをいふものなれども、今言ふ所は、爲政者個人の道徳と教化との關係にして、堯舜の修己より治人に及びしが如く、大學の修身齊家より平天下に及ぶが如きをいふ也。象傳の意は、國民の家毎に正しくして、天下定まるをいふものにして、爲政者の一家を正しくして、天下定まるの意にはあらず。

斯く爲政者個人の道徳が、直ちに教化となるとは、何ぞや、下なるものは必ず上にあつて、上に倣ふものにして、上は即ち下の儀表たれば也。いはく、

君の爲す所は、百姓の從ふ所也、君の爲さるる所、百姓何を從はん。(大戴禮哀公問於孔子篇及び禮記哀公問篇、孔子の言)

上は民の表也、表正しければ、則ち何物か正しからざらん。(同上王言篇、同上)

孔子曰はく、人の君たるものは猶ほ孟のごとき也、民は猶ほ水のごとき也、孟方なれば水方、孟圓なれば水圓。(尸子處道篇、韓非子外儲說左上)

又、前に述べし如く、政治は一種の社會教育にして、被教育者は社會と稱する一の大なる團體なり。抑も政治の對象は一般にして、教育の對象は個人なるを例とす。然るに政治的教化は、人ごとに就きて教ふる能はざるが故に、是に於いて爲政者個人の道徳は、總ての特殊なる民衆に對して、一個の明かなる儀表典範となり、以て人ごとに教へたると同一の効果を生ずるものとなさる。即ち政教を歸著點に於いて一致せしむるものは、民衆に於ける徳化なるが如く、政教を發動點に於いて一致せしむるものは、爲政者個人の道徳なりとす。前に擧げし孝經中の孔子の言なる、

君子の教ふるに孝を以てするや、室ごとに至りて日ごとに之れを見るに非ざる也。

の元宗註にいはく、

言ふは、教ふるとは、必らずしも家ごとに到り、戸ごとに至り、日ごとに見て、之れ

に語るにあらす、たゞ、孝を内に行へば、其の化、おのづから行ひに流る。

と、言ひ得て明瞭なり。

然れども爲政者一人にては到底足らず、故に賢能を擧げて、教化を輔弼せしめざるべからず。又賢能を擧ぐるといふことは、士民をして賢能たらんことを勵ましむべき所以ともなる。いはく、

上は民の義也、有司執政は民の表也、邇臣便辟は、群臣僕の倫也。(大戴禮子張問入官篇)

哀公問うて曰はく、いかにすれば則ち民服せん。孔子對へて曰はく、直きを擧げて諸の枉れるを錯けば、則ち民服せん。(爲政)

季康子問ふ、民をして敬忠以て勤ましむ、之れを如何。子曰はく、之れに臨むに莊を以てすれば、則ち敬、孝慈なれば、則ち忠、善を擧げて不能を教ふれば、則ち勤む。(同上)

故に賢能を擧ぐることは最も留心せざるべからずとす。いはく、
歳ごとに賢を誘へば、則ち賢者は親しみ、不肖者は懼る。(大戴禮王言篇)

政は賢を官にするより大なるはなし。(同上)

賢能を選擧することは其の法、時により異なり、漢には薦擧郷黨より德行賢能のあり、唐に科擧、試験を以て採わり、或は並び行はれ、或は交ふるに保擧、或る大官が貴任を以て保薦することを以てするの類あり、支那古今を通じて最も重きを措かれたる所に於て、政治上一個の主たる要道なりき。而かも此れには、被治者族をして治者族たるに與かるべき希望を繋けしむる政略的意義あると共に、又教化を助け賢能に勵ましむべき教育的意義ある也。

教化の確實なる成功

以上に於いて政教の目的及び其の手段の大端を領せり、然らば斯くの如き教化は可能なりやと云ふに、孔子は個人に於ける教育の可能を信する如く、教化も亦豫期されたる効果の必らず擧がるべきを言へり。

君子の徳は風、小人の徳は草、草之れに風を上上れば必らず偃す。(顔淵)

齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らん。(雍也)

孔子曰はく、徳の流行することは、置郵して命を傳ふるよりも速かなり。(孟子 公孫丑上)

の如きは是れ也。而して其の感化は極めて速かなりとなさる。

苟くも我れを用うるものあらば、一年を期月一年をのみにして可なり、三年成すあらん。(子路)

といへり、蓋し徳の流行は置郵して命を傳ふるより速く、又己れに克ち禮を復むること一日にして、天下は其の仁なるを知りて之れに歸す(顔淵)べければ也。然れども孔子が、一年にして可、三年成すあらんの言には、自ら矛盾したる語あり、例へば

善人、邦を爲たむる百年、亦以て殘に勝ち、殺を去る矣と、誠なる哉言や。(同上)

如し王者あらば、必らず世三十年をにして後、仁。(同上)

の如きは、政教全く成るは少なきも三十年、長きは百年を要すと明言せり。漢書に、

周公旦の天下を治むる、期月にして變じ、三年にして化す。(公孫宏傳)

とあり、變とは形式的にして、化とは精神的ならん。之れを事實とすれば、速かなる成功の確實なるが如きも、周公の教化的事蹟が斯程まで顯著なりしとは思は

れず、是れ或は孔子の期月三年の言により、後世の史筆が文飾せるの辭ならん。實際に於いて一個人の教育すら、効を收むること太だ速かならざれば、一國の教化が數年の短日月にて成功し得べくもあらず。されば思ふに、孔子の本意は寧ろ後者に在りて前者に在らず、置郵傳命、一日天下の説は、感化の必らず可能なるを明かにせん爲めに特に誇張したるものにして、期月三年の語は、孔子自家の不遇に激して、其の抱負を漏らしたるに過ぎざるべし。即ち完全なる成功を擧げんと欲せば、

子夏、莒父の宰となり、政を問ふ。子曰はく、速かなるを欲するなかれ、小利を見るなかれ、速かなるを欲すれば、則ち達せず、小事を見れば、則ち大事成らず。(子路)

といへるもの、蓋し孔子の本旨ならん。

以上總べて政教一致の上より説をなしたり。されど天下の廣き政務の繁き必らずしも全然合一すとはいふべからず。故に又政と教とを別様に解して、教化と他の政治的施設との關係を明かにせざるべからず。但し政治の全體勿論

教化と他の
政務との關

教化行政の類をも含みて、が徳政ならざるべからずとの孔子本來の主張は、固より少しも枉ぐる所なし。

政を爲すに徳を以てす、譬へば北辰の其の所に居りて、衆星の之れに共トモふが如し。(爲政)

是れなり。先づ教化は刑罰の前にあらざるべからずとなさざる。いはく、教へずして殺す、之れを虐といふ。戒めずして成るを視る、之れを暴といふ。

(堯曰)

而して刑罰のみありて教化なきの害は、前に擧げし、政刑を以てするのみなれば民免れて耻なし(爲政)の言に見ゆ。

又軍事の前にあらざるべからずとなす。前に擧げし、教へて而して後戰はしむべし(子路)との言は、此の意に解せらる。

産業行政と教化行政との關係は、少しく明白を缺くの觀なからず。

子衛に適く、冉有僕たり。子曰はく、庶民多なる哉。冉有曰はく、既に庶なり又何をか加へん。曰はく、之れを富まさん。曰はく、既に富まさんば、又何をか加

へん。曰はく之れを教へん。(子路)

此の言より見れば、富ましたる後に始めて教ふべしとなせるが如し。然るに子貢政を問ふ。子曰はく、兵を足し、食を足し、民をして之れに信せしめん。子貢曰はく、必らず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて何れをか先きにせん。曰はく、兵を去らん。子貢曰はく、必らず已むを得ずして去らば、斯の二者に於いて何れをか先きにせん。曰はく、食を去らん、古へより皆死あり、民信なくんば立たず。(顔淵)

丘や聞く、國あり家あるものは、寡なきを思ひず、均しからざるを思ふ、貧なるを思ひず、安からざるを思ふ。(季氏)

といへり、信といひ、均といひ、安といふ、亦是れ上より下に發動する一種の教化なるが故に、以上の言は、前の既富教之の説と一見矛盾せるが如しと雖も、孔子の眞意を考ふるに必らずしも矛盾にあらず、先後の關係に於いては、教化行政は産業行政の後なりと雖も、輕重の關係に於いては、産業は教化よりも輕しといふに歸す。即ち前の言は、先後をいひ、後の言は、輕重をいふ。之れを前にしては、堯舜の

禮樂と政教
及び大體

施政實に然りき、洪範亦之れを説明す、之れを後にしては、孟子の明白に且つ精密に説明する所なりとす。

第二章 禮樂論

政教一致は爲政者個人の道德に於いて發動し來り、而して其の感化は十分可能なりと雖も、之れのみにては未だ足れりとすべからず、全般の民衆に對して、外部より之れを律し、以て其の内心を善導するものを與えざるべからず、禮と樂とは是れ也。故に禮樂は、政教一致が手段に於いて契合せるものといふべきか。其の禮を推奨するものは、

能く禮讓を以て國を爲めん乎、何か有らん。能く禮讓を以て國を爲めずんば禮を如何。(里仁)

上禮を好めば、民使ひ易き也。(憲問)

人を治むる所以は禮を大となす。(大戴禮哀公問於孔子篇。禮記哀公問篇)